公開　令和 8 年 4 月 1 日

教員研究業績

芦屋大学

臨床教育学部				経営教育学部	
教育学科		児童教育学科		経営教育学科	
窪田　幸子	学長 教授	石田　愛子	教授	藤本　光司	学部長 教授
青木　敦英	学部長 教授	大谷　彰子	教授	池田　　聡	教授 学科主任
金　　相煥	教授	福山　恵美子	教授	齋藤　　治	教授
阪本　美江	教授 学科主任	毛利　康人	教授	中村　宏敏	教授
杉島　威一郎	教授			森下　博行	教授
竹安　知枝	教授			盛谷　　亨	教授
三浦　正樹	教授			井上　　徹	准教授
伊藤　武徳	准教授			山片　崇嗣	准教授
西光　哲治	准教授			井村　薫子	講師
浅井　麻里	講師			高倉　弘士	講師
武田　光平	講師			成瀬　優享	講師
萩原　隆太	講師			明神　聖子	講師
吉田　隆夫	教授	林　知代	教授	安東　茂樹	教授
三羽　光彦	教授	小嶋　祐伺朗	教授	西光　晴彦	教授
		上月　敏子	教授	池田　和三	准教授
		渡　康彦	教授	林　　泰子	准教授
		武並　朋美	准教授		
		丹下　秀夫	准教授		
		中村　整七	准教授		
		槙場　政晴	講師		

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日
氏 名　窪田 幸子

担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要
社会学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	(著書) 1.Conflicts and Peacebuilding: Toward the Sustainable Society	共	平成29年	Doshisha University GRM Program	6 (109)	オーストラリアのヨルング社会において、部族間紛争の伝統的な和解構築儀礼をとりあげ、その内容と機能を紹介した。その上で和解儀礼が現在果たしている役割を検証し、和解のローカルな意味を論じた。 執筆担当部分:’Conflict and Peacebuilding rituals in North Australia - Traditional and contemporary contexts’ 共著者:Branislav Dordevic,Miro Hacek,Slobodan Jakovic, Jasmina Gavrankapetanović-Redžić, Chiharu Takenaka, Sachiko Kubota, Jun Honna, Tomohiro Kumagai
	2. トラウマ研究Ⅱ－トラウマを共有する	共	平成31年3月 令和元年4月？	京都大学人文科学研究所 京都大学学術出版社？	24 (598)	アボリジニが入植以来経験してきた主流社会による暴力についての記憶をめぐり、変化してきた主流社会は和解を試みている。歴史的変化と現在を考察した。 担当執筆部分:第６章「ナショナルな歴史経験とトラウマ　－先住民への謝罪と和解」田中雅一、松嶋健編　共著者:田中雅一、松嶋健、窪田幸子　他17名
	3. オーストラリア多文化社会論―移民・難民・先住民族との共生をめざして	共	令和2年2月	法律文化社	15 (318)	オーストラリアが多文化主義国家へと変貌していく中で先住民アボリジニへの対応も彼らへの認知もいかに変わってきたのかを遠隔地にいるアボリジニの経験から論じた。 担当執筆部分:第5章「政治的ダイナミズムと遠隔地のアボリジニ」　関根・塩原・栗田・藤田編 共著者:関根政美、塩原良和、窪田幸子、他13名
	4. Arts in the Margins of World Encounters	共	令和3年5月	Vemon Press	13 (252)	アボリジニのアートが境界をこえることでどのように意味と価値をかえるのかを日本とアメリカでの歴史的な展示の事例を示し、考察した。

						担当執筆部分:’Aboriginal art, transits and transitions ;exhibitions in Japan and the US’ 共著者:Willemijn de Jong, Eriko Aoki, John Clammer(eds.) ,Sachiko Kubota,他6名
	5. 死の神話学	共	令和6年3月	晶文社	26 (452)	ヨルング部族の死についての概念を概説した上で、死を語る神話を紹介し、ヨルングの死の神話が現在に生きるものであり、「お話」としてだけ扱われるものでないことを論じた。 担当執筆部分:「アボリジニの死の概念と神話」 木村武史編　共著者:木村武史、窪田幸子、他12名
	6. 紛争後社会と和解－ボスニアにおける国家建設	共	令和6年9月	晃洋書房	26 (208)	ボスニア・ヘルツェゴヴィナでの紛争後の和解にむけてのプロジェクトの現地調査でのデータから、和解、赦し、紛争解決についての現代的意味を論じた。 担当執筆部分:第6章「和解という筋道の可能性を考える」 月村太郎編　共著者:月村太郎、窪田幸子、他7名
	7. Ecotourism Impacts on Indigenous Peoples	共	令和6年11月	Lexington Books	12 (249)	入植以来200年間の間にオーストラリア主流社会の変化とアボリジニの経験を重ね、そこから読み取れる重要な要因を考察した。 担当執筆部分:’Aboriginal Alternative Tourism in Arnhem Land: Tourism as Cultural Learning’ 共著者:Wayne A. Babchuk, Robert K. Hitchcock(eds.), Kubota, S.
	(学術論文等) 1.1988年をふりかえる:入植200周年以降の先住民・非先住民関係	単	平成31年3月	『オーストラリア研究』第32号、オーストラリア学会	4 (4)	カナダとオーストラリアの先住民に対する謝罪と和解の取り組みの時系列的展開を整理した上で先住民との和解の可能性を考察した。
	2. 先住民族との和解にむけて―謝罪、補償とトラウマの修復―	単	令和3年3月	『アイヌ・先住民研究』第1号、北海道大学アイヌ・先住民研究センター	16 (16)	日本文化人類学会において、アイヌ研究の過去の姿勢をとりあげ、その不適切な性を反省し、より良い未来に向かおうとの議論をアイヌの研究倫理指針に関わり、議論した。
					17	アイヌ民族を文化人類学のこれまでの関係性のあり方をレビューし、かつての植民地

	3. For a Better Future for the JASCA	単	令和4年	"The Past and Future of Cultural Anthropology: Prospects from (Draft) Ethical Guidelines for Research on the Ainu People", Japanese Review of Cultural Anthropology Vol. 23, No. 1	(17)	的態度を批判的に検証した。それによって現在なぜこの問題を我々の問題とし考える必要があるのかを問いかけ、民族の協働的未来に向かう必要性を論じた。
	4. Dialogues: decolonizing anthropology in/with Japan	共	令和6年5月	Journal of the Royal Anthropological Institute, Royal Anthropological Institute	9 (42)	イギリスのRoyal Anthropological Institute DSからの依頼で日本の人類学において脱植民地化の動きがどのように動いているのかについて複数の対話を行った特集。その全体の計画に関わると同時にイギリスの人類学者の対話を通じ、日本の特に先住民あるアイヌのおかれた現状を論じたもの。 担当執筆部分:Introduction 共著者:Sachiko Kubotta,Shuhei Kimura 担当執筆部分:'Addressing Japan's colonial violence against the Ainu at the Japanese Society of Cultural Anthropology' 共著者:Sachiko Kubota, Soumhya Venkatesan

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 "Fashionable Traditions - Asian Handmade Textiles in Mortion"	共著	2020	Lexington Books, London, UK. pp. 177-191	"Crafts" to "Arts"?- A Trajectory of Aboriginal Women's Weavings in Arnhem Land, Australia. Nakatani,A.,Willemijin,de.J.,…Kubota,S. 計14名
2『浜松市楽器博物館総合案内図録2020』	共著	2020年	浜松市楽器博物館 pp.138-139	「アボリジニの文化とディジェリドゥー」
3『オーストラリア多文化社会論―移民・難民・先住民族との共生をめざして』	共著	2020年 2月15日	法律文化社 pp.79-93	「政治的ダイナミズムと遠隔地のアボリジニ」 関根政美、塩原良和、窪田幸子 計16名
4『部族紛争後状況の多元的研究』	共著	2020年3月20日	晃洋書房 pp.77－104	「和解という道筋の可能性を考える」 月村太郎、本名 純、窪田幸子 計7名

5“Arts in the Margins of World Encounters ”	共著	2021.5	Vernon Press pp.43-55	‘Aboriginal art, transits and transitions; exhibitions in Japan and the US’ Willemijn, de.J .,Aoki,E.,…Kubota,S. 計 10 名
6『岩波講座 世界歴史 19 太平洋海域世界～二〇世紀』	共著	2023 年 5 月 30 日	岩波書店 pp.139-140	「オーストラリア先住民族と歴史の場所－エアーズ・ロック」
7『世界のクリスマス百科事典』	共著	2023 年 11 月 30	丸善出版 pp.330-335	「オーストラリア連邦」
8『ジェンダー事典』	共著	2024 年 1 月 31 日	丸善出版 pp.272-273	「先住民と植民活動」
9『〈ひと〉から問うジェンダーの世界史 第 1 巻 「ひと」とはだれか？身体・セクシュアリティ・暴力』	共著	2024 年 2 月 28 日	大阪大学出版会 pp.66-67	「コラム⑤アイヌ女性と伝統文化―同化政策から権利回復へ・コラム⑥ オーストラリア先住民アボリジニ―女性の儀礼世界」
10『海とヒトの関係学⑥ 海のジェンダー平等へ』	共著	2024 年 3 月 8 日	株式会社西日本出版社 pp.48-54	「アボリジニにおける両性具有－ドリーミングの虹蛇」
11『死の神話学』	共著	2024 年 3 月 20 日	晶文社 pp.285-310	「アボリジニの死の概念と神話-北東アーネムランドのソングライン」
12『紛争後社会と和解－ボスニアにおける国家建設』	共著	2024 年 9 月 20 日	晃洋書房 pp.121-146	「和解という筋道の可能性を考える」
13『オセアニア文化事典』	共著	2024 年 10 月 30 日	丸善出版 pp.448-449	「10.アート・創造・メディア 概説」
14 “ Ecotourism Impacts on Indigenous Peoples”	共著	2024.11.30.	Lexington Books. pp.147-158	‘ Aboriginal Alternative Tourism in Arnhem Land: Tourism as Cultural Learning’
【学術論文】 1「先住民族との和解にむけて―謝罪、補償とトラウマの修復―」	単著	2021 年 3 月 1	『アイヌ・先住民研究』第 1 号 pp.67-82、北海道大学アイヌ・先住民研究センター	
2“The Past and Future of Cultural Anthropology: Prospects from (Draft) Ethical Guidelines for Research on the Ainu People”	単著	2022	Japanese Review of Cultural Anthropology Vol. 23, No. 1, pp.206-222	‘For a Better Future for the JASCA’
3‘Dialogues: decolonizing anthropology in/with Japan’	共著	2024.5.7.	Journal of the Royal Anthropological Institute,pp1-3,22-27	
4「工芸品からアートへ-オーストラリアにおけるアボリジニ編組品の変貌」	単著	2025 年 1 月 31 日	『季刊民族学』191 号 pp.78-85 千里文化財団	

【その他（講演や発表）】 1‘Changes in the repatriation - Issues concerning Ainu people, Japan, and involvement of academics’,	単	2020.3.3.	ICAS: MP Workshop ‘New Roles of professional historians in politics and new forms of public use of history’, Center for the Study of Developing Societies(CSDS) 3-4 March, Delhi, India	国際ワークショップ発表・招聘
2‘Dealing with Negative Legacies in Japan - Why we do not apologize ?’	単	2020.9.28.	Keynote, Annual Conference of The Taiwan Society for Anthropology and Ethnology (TSAE)、National Chi Nan University	台湾人類学会キーノート講演・招聘
3「先住民族との和解、謝罪とヒーリングーオーストラリアとカナダの比較から」	単	2021 年 2 月 16 日	北海道大学アイヌ・先住民研究センター講演会	講演・招待
4「コロナ禍におけるフィールドワーク研究の困難と課題」	単	2021 年 2 月 19 日	「2020 年度全国公正研究推進会議」COVID-19 を経験した世界のニューノーマルな公正研究と教育分科会3「コロナが変える？コロナで変わる？人文学・社会科学における研究公正と研究の質」	研究発表・招聘
5‘Continuous Attempts for Further involvements- Museums and Indigenous People in Australia’	単	2021.3.12.	IUAES 2020 Congress Sibenik, Croatia,	国際学会・研究発表 コメント
6「先住民研究の展開ー神戸大学での 12 年をふりかえって」	単	2021 年 3 月 27 日	神戸大学退職記念最終講演	講演
7「授産事業からハイアートへ-アボリジニのプリント布の展開-」	単	2021 年 7 月 3 日	国立民族学博物館共同研究会 「伝統染織品の生産と消費」第 9 回研究会	研究発表
8「アボリジニの神話と死-トーテミズムを生きる人々-」	単	2021 年 9 月 18 日	神話学研究会第 12 回オンライン研究集会	研究発表
9「オーストラリア先住民のアート-その美と力-」	単	2022 年 3 月 26 日	芦屋大学公開講座第 2 回	
10「多様性を学ぶ意味ー文化人類学の楽しさ」	単	2022 年 4 月 20 日	芦屋川カレッジ開講記念講演	

11「人類学研究と公共性」	単	2022 年 5 月 7 日	京都人類学研究会	新歓講演会　コメント
12「アイヌ民族に関する研究倫理指針（案）」から考える、文化人類学の過去と未来に向けての展望」	単	2022 年 6 月 5 日	第 56 回日本文化人類学研究大会研究倫理委員会特別シンポジウム 明治大学	研究発表
13「日本学術会議と国内の学協会連合等との連携―人文社会科学系学協会　男女共同参画推進連絡会―」	共	2022 年 7 月 12 日	科学者委員会学協会連携分科会	
14「日本学術会議・地域研究委員会歴史的遺物返還に関する検討分科会記録「先住民族との和解と共生ーアイヌの遺骨・副葬品の返還」をめぐって」	共	2022 年 9 月7日	日本人類学会のアイヌ遺骨研究を考える会、政府とのチャランケ	
15「多様性を知る楽しさー「学ぶ」意味」	単	2022 年 11 月 18 日	高知追手前高等学校	
16「文化人類学の未来に向けて」	共	2022 年 12 月 10 日	2022 年度 第 2 回日本文化人類学会倫理委員会シンポジウム	
17「ポストコロニアル状況における翻訳と主体化ー布製品、編組品の展開から」	単	2023 年 2 月 23 日	国立民族学博物館共同研究会	
18「謝罪という文化をめぐって-オーストラリアと日本の比較から-」	単	2023 年 7 月 5 日	芦屋川カレッジ世界文化コース	
19「ジェンダー観の歴史と展望」	共	2023 年 8 月 4 日	第 24 回アジア太平洋フォーラム淡路会議 第 2 分科会	座長
20「いま、求められる学びとはー多様性の理解はなぜ大切か」	単	2023 年 10 月 21 日	高知県高等学校PTA連合会第 2 回研修会	
21「テーマ:学術の未来と「無意識のバイアス」 ―「男女共同参画」を科学的根拠に基づいて議論する」	共	2023 年 12 月 21 日	令和 5 年度 日本学術振興会 男女共同参画推進に係るシンポジウム	パネルディスカッション　ファシリテーター
22「日本の多文化共生は可能か？」	単	2024 年 7 月 10 日	国立民族学博物館友の会午餐会	
23「『多文化』の可能性ーオーストラリアからの視点」	単	2024 年 10 月 29 日	大阪南ロータリークラブ	
24「大きく変わる少数者との関係性－謝罪と和解－」	単	2024 年 11 月 20 日	芦屋川カレッジ聴講生世界文化コース	

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

25「社会・国際連携の現状と可能性」	共	2025 年 1 月 30 日	人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト等研究連絡会	総合討論　コメンテーター
26”Decolonization in Japan: Ainu people, Anthropology and museums”	共	2025.03.10-11	The International Symposium of NIHU Transdisciplinary Project	

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日

氏 名　　青木 敦英

担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要
運動生理学(単独)	(学術論文) 1. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	平成30年4月	トレーニング科学 No.29 第3巻 pp.255-265	(抽出不可) 9	男子大学生を対象に肘関節屈曲を対象として一側性と両側性の筋力トレーニングを課し、力―速度―パワー関係からトレーニング効果について検討したところ、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 (執筆担当部分:ほぼ全編) 著者:青木敦英, 田路秀樹
	2. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について	共	平成30年11月	芦屋大学論叢 No.70 pp.51-56	(抽出不可) 6	兵庫県内の小中学生のバレーボールクラブチームに所属する女子選手15名を対象として、簡易自記式食事歴法質問票(BDHQ15y)を用いて、栄養素等の摂取量について調査を行ったところ、1項目(ビタミンB1)を除いて全国値を上回っており、栄養摂取状況は比較的良好であったが、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。 (執筆担当部分:ほぼ全編) 著者:青木敦英, 鈴木麻希
	3. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力―速度―パワー関係に及ぼす影響	共	令和元年6月	教育医学 No.64 pp.283-292	(抽出不可) 9	高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について検討したところ、1RMや力―速度関係からみたパワー発揮において一側群が両側群と比較して高いトレーニング効果が認められ、高齢者にとって一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。 (執筆担当部分:ほぼ全編) 著者:青木敦英, 田路秀樹
	4. 大学男子バスケットボール選手の敏捷性を高	共	令和7年8月	体育・スポーツ科学 No.34	(抽出不可) 8	大学男子バスケットボール選手を対象として、敏捷性の向上を目指したトレーニングについて, 筋パワーの向上を目指したプラ

	めるためのトレーニング方法の検討			pp.47-53		イオメトリックトレーニングを行う方法と敏捷性の動きそのものをトレーニング方法で比較をしたところ、敏捷性の動きそのものをトレーニング方法とするアジリティトレーニングの方が敏捷性パフォーマンスを向上する可能性が高いと考えられた。 (執筆担当部分:ほぼ全編) 著者:青木敦英, 石川峻, 森寿仁

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】				
【学術論文】 【学術論文】 1. 知的障碍男児における非肥満児と肥満児の身体的特性	共著	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢 No.75 pp.51-58	6歳児から 18 歳までの知的障碍児(男子)の身長、体重、脂肪量、除脂肪体重の2年半の測定結果についてパネルデータ分析を用いて分析をしたところ、知的障碍男児の肥満児は学童期に著しい脂肪量の増加によって体重が増加することから、知的障碍男児の肥満、痩身の予防は学童期以前から実施することが重要であることが示唆された。 本人担当部分:データ処理 著者:田路秀樹, 榊悠太, 青木敦英
2. 教育実習前後の模擬授業(保健体育)の変容に関する事例的研究 －教育実習を経験した大学生の模擬授業から－	共著	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢 No.75 pp.101-110	(再掲のため、略)
3. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共著	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢 No.76 pp.21-30	芦屋大学の運動部に所属する学生を対象として、スポーツ傷害の発生状況にについて調査したところ、格闘技と球技、男子と女子で傷害の発生状況に違いがみられたことが明らかになった。 本人担当部分:企画・調査・データ処理・執筆 著者:伊藤武徳, 西光哲治, 金相煥,

				別當和香，武田光平，石川峻，番平守，青木敦英
4．シニアテニス選手の運動継続に関わる実態調査 －国際大会参加の日本人選手を対象に－	共著	令和４年９月	芦屋大学論叢 No.78 pp.159-166	シニアのテニス選手に 105 名に対して運動継続に関する動機づけについて調査したところ、「健康・体力向上」「楽しさ」「友だちができる」などの目標以外に「競技レベルの向上」を目指す選手が多いことが明らかになった。 本人担当部分：データ処理・執筆 著者：竹安知枝，青木敦英，臼井達矢，織田恵輔
5．体育と運動の好き嫌いの現状とその要因分析 －兵庫県内の高校生を対象として－	単著	令和５年８月	芦屋大学論叢 No.79 pp.1-9	（再掲のため、略）
6．男女大学生の BMI と体脂肪率との関係	共著	令和６年１月	芦屋大学論叢 No.80 pp.35-43	兵庫県内の大学に 2008～2017 年度の入学をした男女大学生を対象に、BMI と体脂肪率の関係について横断的に分析を行ったところ、男子学生の肥満化が進んでいること、女子学生では痩せすぎが多いことなどを報告した。 本人担当部分：データ処理・執筆 著者：田路秀樹，竹安知枝，青木敦英
7．大学女子バレーボール選手の心理的競技能力 －兵庫県内の大学トップレベルの選手を対象として－	共著	令和７年３月	芦屋大学論叢 No.83 pp.1-8	兵庫県内のエリート大学女子バレーボール選手を対象として心理的競技能力調査（DIPCA.3）を実施したところ、全国大会の経験が心理的競技能力を高めていることが示唆された。また競技レベルと心理的競技能力との関係については必ずしも一致しなかった。 本人担当部分：企画・データ処理・執筆 著者：青木敦英，足立学，番平守
8．大学男子バスケットボール選手の敏捷性を高めるためのトレーニング方法の検討	共著	令和７年８月	体育・スポーツ科学 No.34 pp.47-53	（再掲のため、略）
9．大学ラグビーにおける競技人口の推移 －関西大学ラグビーリーグを対象として－	共著	令和８年３月	ラグビーフォーラム No.18 pp.1-8	20 年間にわたる関西大学ラグビーリーグの選手数およびチーム数の推移について分析した結果、総選手数・チーム数はいずれも減少傾向にあることが確認され、とくに競技レベルの高い A リーグへの選手集中が進む一方で、下位リーグではリーグ規模の縮小がみられ、競技レベル間の格差拡大や競技

				力低下と選手数減少との関連を指摘した。 本人担当部分:企画・データ処理・執筆 著者:青木敦英, 溝畑潤
(その他実践報告) 1. 保健体育の教育実習における ICT 機器の活用状況	単著	令和 5 年 3 月	教育ジャーナル No.3 pp.1-8	(再掲のため、略)
【その他(公演や発表)】 (学会発表) 1. 小規模大学の特徴を生かした IR 活動の課題と展望 ーIR 推進室の設置から教学 IR の分析に至るまでの3年間ー	共 同 発表	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会第 37 回大会	関西の小規模大学内で組織された IR 推進室でのこれまでの活動内容について報告をした。 本人担当部分:データ処理 共同発表者:藤本光司, 新谷隆之, 青木敦英, 徳岡拓, 小野貴久
2. シニアテニス国際大会の参加者における運動継続に関わる実態調査	共 同 発表	令和 3 年 9 月	日本体力医学会第 76 回大会	国際大会に出場しているシニアテニス選手を対象に運動継続の動機づけに関するアンケート調査を行い、その分析内容について報告をした。 本人担当部分:データ処理・要旨作成 共同発表者:竹安知枝, 青木敦英, 臼井達矢, 織田恵輔, 辻慎太郎, 松尾貴司
3. 小学校4年生の静止立位姿勢の足圧中心動揺における試行間および日内間信頼性の検討	共 同 発表	令和 4 年 9 月	日本体育・健康・スポーツ学会第 72 回大会	兵庫県内の小学4年生を対象に足圧中心動揺測定を、異なる時間帯で実施し誤差がどの程度生じているのか分析を行いその内容を報告した。 本人担当部分:データ処理 共同発表者:溝畑潤, 青木敦英, 竹安知枝, 田路秀樹
4. 幼児の立位姿勢保持能力と全身反応時間の関係	共 同 発表	令和 4 年 9 月	日本体力医学会第 77 回大会	兵庫県内の幼稚園児を対象に足圧中心動揺測定を異なる時間帯で実施し、誤差がどの程度生じているのか分析を行いその内容を報告した。 本人担当部分:データ処理 共同発表者:溝畑潤, 青木敦英, 竹安知枝, 田路秀樹
5. 大学ラグビー部での合同チームのリーグ戦参加についての一考察 ー関西大学Dリーグの事例を対象としてー	共 同 発表	令和 5 年 3 月	日本ラグビー学会第 16 回大会	大学ラグビーリーグにおいて初めて行われた合同チームによるリーグ戦の参加が、選手や他チームに及ぼす影響についてアンケート調査を行った結果について報告をした。

				本人担当部分:企画・調査・データ処理・要旨作成・口頭発表 共同発表者:青木敦英, 石指宏通, 入江直樹, 灘英世, 中井俊行, 千葉英史, 瀬川智広
6. 大学男子バスケットボール選手の敏捷性を高めるためのトレーニング方法の検討	共同発表	令和5年9月	日本体育・健康・スポーツ学会第73回大会	大学男子バスケットボール選手を対象に敏捷性を高めるための2種類の異なるトレーニングを行わせたところ、アジリティトレーニングが有効であることを報告した。 本人担当部分:企画・実験・データ処理・要旨作成・ポスター発表 共同発表者:青木敦英, 溝畑潤, 石川峻, 竹安知枝, 田路秀樹
7. 大学女子バレーボール選手に対するVelocity Based Trainingの効果	共同発表	令和6年5月	兵庫体育・スポーツ科学学会第35回大会	大学女子バレーボール選手を対象に速度基準のレジスタンストレーニング(Velocity Based Training)を6週間行わせたところ、パワー発揮能力に一定の効果がみられたことを報告した。 本人担当部分:企画・実験・データ処理・要旨作成・ポスター発表 共同発表者:植田大貴, 作田啓昭, 青木敦英
8. バランスボード上での簡易的なレジスタンストレーニングの効果	共同発表	令和6年8月	日本体育・健康・スポーツ学会第74回大会	定期的な運動習慣のない女子大学生に対してバランスボードを使用した簡易的なレジスタンストレーニングを行わせ、バランスボード上でのレジスタンストレーニングが筋力や体力向上に効果的であることを報告した。 本人担当部分:企画・実験・データ処理・要旨作成・ポスター発表 共同発表者:青木敦英, 竹安知枝, 田路秀樹
9. 大学ラグビーにおける競技人口の推移 ー関西大学ラグビーリーグを対象としてー	共同発表	令和7年8月	日本体育・健康・スポーツ学会第74回大会	20年間の関西大学ラグビーリーグの選手数の推移について高校生のデータおよび競技レベルでの推移について報告をした。 本人担当部分:企画・データ収集および処理・要旨作成・ポスター発表 共同発表者:青木敦英, 溝畑潤
10. 5歳児の足圧中心動揺における試行間信頼性	共同発表	令和7年8月	日本体育・健康・スポーツ学会第74回大会	幼児の立位姿勢における静的バランス能力について明らかにするため、5歳時の足圧中心動揺の試行間信頼性について検討した結果、信頼性が高いことを報告した。 本人担当部分:データ分析・要旨作成・ポスター発表 共同発表者:溝畑潤, 青木敦英, 秋武寛, 三木伸吾, 田路秀樹

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日

氏 名 金 相煥

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　　要

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 育成年代における監督の一考察	単著	平成 24 年 1 月 17 日(2012)	芦屋大学 論叢 56 号 P.53 ～P.62	育成年代の高校生と中学生のデータをとり、理想像の違いを研究した。 中学生も高校生も理想の指導者像で最低限必要な要素はサッカーの知識と指導のわかりやすさであり、それに加えて中学生年代には楽しみの要素を多く含み、高校生年代は選手をコントロールするモチベーションが不可欠であることがわかった。
地域密着型サッカークラブ設立について ～三宮フットボールクラブジュニアユースの機能と役割～	単著	平成 25 年 1 月 17 日(2013)	芦屋大学 論叢 58 号 P.55 ～P.64	日本サッカー界はめまぐるしい発展を遂げているが、都市部においては十分なサッカー環境が与えられていない生徒が存在する。その生徒たちにサッカー環境を与え、サッカークラブとして活動する場を提供した実践活動報告。
二部昇格への軌跡(チームアプローチ)	単著	平成 25 年 7 月 19 日(2013)	芦屋大学 論叢 59 号 P.75 ～P.86	芦屋大学サッカー部が創部 48 年目、監督に就任してから３年目での２部昇格を果たした経緯と実践してきた活動を報告した。

スペインのサッカーコーチにみる指導法についての一考察	単著	平成 26 年 7 月 14 日 (2014)	芦屋大学 論叢 61 号 P.93 ～P.106	世界でも有数のサッカー王国スペインから 2 名の指導者を招聘し、クリニックを行った活動を報告。スペインのサッカー観と指導方法に着目して考察した
地域密着型サッカークラブについて ～三宮フットボールクラブジュニアユースの発展と課題～	単著	平成 27 年 7 月 10 日(2015)	芦屋大学 論叢 63 号 P.69 ～P.76	3 年間で 85 名の選手にサッカー活動環境を与えた「三宮フットボールクラブジュニアユース」を設立して，今年で 10 年を経過した。5 年目以降からの生徒たちのサッカークラブへのニーズの変化に対応し、サッカー面と学習面において新たなる発展を試みたクラブの実践報告である。
芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共著	平成 29 年 7 月 18 日(2017)	芦屋大学 論叢 67 号 P.13～P.22	現代社会では，高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている．このような社会をより良く生き抜くためには，個々が内面的な充実感を高め，生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考える．そこで本研究では，2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い，全国平均データとの比較から，体力水準の検討をおこない，本学生の体力特性を明らかにすることで，今後の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善及び 1 回生後期に開講される「健康スポーツ科学概論」(講義)の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした． 共著者:西光哲治　金相煥　伊藤武徳　別當和香　武田光平
芦屋学園サッカースクールについて～芦屋学園の地域貢献事業と現状報告～	単著	平成30年11月21日 (2018)	芦屋大学 論叢 70 号 P.87 ～P.98	芦屋学園の地域貢献事業として立ち上げた芦屋学園サッカースクールの設立経緯や趣旨を報告する。芦屋地域の子供たちのスポーツ活動の現状をより豊かにする目的がある。
大学におけるスポーツ教育に関する一試論～課外クラブ活動を積極的に意味付けるA大学の事例を通して～	単著	令和１年 8 月 (2019)	兵庫教育大学大学院 修士論文	

サッカー競技における戦術のメソッド化とフィジカル測定の成果と課題～関西学生サッカー2 部Aリーグ昇格へのアプローチ～	単著	令和 2 年 9 月(2020)	芦屋大学 論叢 73 号 P.89 ～P.96	サッカー部の成果が出た要因に「戦術の言語化」を行い、メソッド化したこと、その戦術を発揮するためのフィジカル面でのデータ化をしたことが1つ上位のカテゴリーに上がれる要因になったことを記した。
課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題～芦屋学園サッカー部門の改革事例から～	共著	令和3年3月22日(2021)	芦屋大学 論叢 74 号 P.37 ～P.48	芦屋学園サッカー部門の一貫指導システムにおける募集人数増加と学校経営安定の成功に至った経緯と今後の一貫指導システムをより効率よく展開するための課題を明らかにし，サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。 共著者:金相煥　別當和香
コロナ禍の部活動自粛による、競技に対するモチベーションの影響に関する一考察	共著	令和3年7月27日(2021)	芦屋大学 論叢 75 号 P.41 ～P.50	コロナ禍の部活動自粛による，競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察 本研究では、コロナウイルス感染症に伴う、部活動停止期間が，運動部学生のモチベーションや自主トレーニングへの影響について，アンケート調査から得た自由記述回答についてテキストマイニング分析を実施した。その結果から，モチベーション維持ならびに自主トレーニングの有用な対策を検討するための一助を示した。 共著者:武田光平　金相煥　伊藤武徳　別當和香　番平守　石川峻
芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共著	令和4年3月24日(2022)	芦屋大学 論叢 76 号 P.21 ～P.29	芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査 本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷やスポーツ障害の発生状況について調査し、今後のスポーツ指導の資料として活用することを目的とした。今後の部活動において本研究で得られた知見を生かして、少しでもスポーツ傷害の発生を防ぐこと、また練習時間や運動頻度などに留意してスポーツの指導に当たることが期待される。

				共著者:伊藤武徳　西光哲治　武田光平　金相煥　別當和香　石川峻　青木敦英
球技系スポーツ選手におけるパーソナリティに関する検討～芦屋学園ジュニアユース・芦屋学園高等学校を対象として～	共著	令和 4 年 8 月 8 日 (2022)	芦屋大学 論叢 77 号 P.91 ～P.97	金ら(2020)は，課外活動における一貫指導システムを構築したことにより，芦屋学園サッカー部門における募集人数増加と学校経営安定の成功に至った. しかし，今後の課題として「明確な指導内容の構築や環境の整備が必要」とも述べている. また，日本サッカー協会(2009)では，「育成年代の心の成長には長期的な視点に立って働きかけいくことが必要」と述べており，組織下において各カテゴリーで戦っていくためには，各カテゴリー内で選手が同じ目標・目的意識・課題を遂行していくことが重要であり，そのためには，自分の置かれている立場・行動・役割などの自我状態を認識することが必要である. これらに鑑みると，組織下においてスポーツを実践及び指導するためには，自他の性格や選手の行動パターンを把握し，配慮した指導や組織連携をおこなう必要性があると考えられる. 共著者:金相煥　別當和香　山口将史
大学男子サッカー選手の下肢パワー発揮能力の特徴	共著	令和 7 年 7 月 30 日 (2025)	芦屋大学 論叢 84 号 P.1 ～P.8	地域社会への波及効果に焦点を当てて分析する。 共著者:青木敦英　金相煥　飛石孝行　植田大貴
学園資源を活用した地域連携型スポーツイベントの実践と課題 ―JAPAN KIDS FES の報告―	共著	令和 7 年 7 月 30 日 (2025)	芦屋大学 論叢 84 号 P.163 ～P.167	地域スポーツは単なる身体活動の枠を超えて、地域社会における交流促進や課題解決のための重要なツールとして注目を集めている。地域住民の健康増進やコミュニティ形成に資するだけでなく、地域資源の有効活用や教育的効果を含んだ社会的機能が期待されている。 芦屋市において 2022 年から 2024 年にかけて実施された「JAPAN KIDS FES」と題する三回のスポーツイベントを取り上げ、スポーツを媒介とした地域

				交流と課題解決への寄与について実証的に検討する。各イベントは、企業、自治体、教育機関（特に学生）との連携によって実施され、多様な年齢層や背景をもつ地域住民の参加を得ることに成功している。 これら3回のイベントを通じて得られた記録と参加者データを基に、スポーツイベントが地域社会にもたらす多面的な影響を検証し、特に企画・運営体制の構築、参加者の反応、地域社会への波及効果に焦点を当てて分析する。 共著者：金相煥　飛石孝行
【その他（公演や発表）】 サッカーにおけるコオディネーショントレーニングの実践と効果		平成 25 年 12 月	ユーハイムスポーツフォーラム （発表）	サッカーは様々なプレッシャー環境下の中での動きが要求される。コオディネーショントレーニングは、ジュニア期の選手に必要な基礎的な運動能力を効果的に身につけることが出来、潜在能力を高める効果があることを立証した

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日

氏 名 阪本 美江

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	(著書) 1.『「劣等児」特別学級の思想と実践』	単著	平成28年12月23日	大空社出版	277 (280)	本書は、戦前の文部省の「特殊教育」政策や「特殊教育」観を踏まえつつ、奈良県下の「特別学級」の歴史を明らかにするものである。本書では、奈良の奈良女高師附小、桜井小学校、治道小学校に着目し、「特別学級」や、当時「劣等児」「低能児」といわれた学力不振児、軽度障害児の特徴を明らかにした。その結果、同校では当該児童への道徳的教育の意義を主張し、特別な教育方法、教育課程を実践していたことが明らかとなった。本書は「2021年日本特別ニーズ教育学会文献賞」(学会賞)を受賞した。
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	2.『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』(改訂版)	単著	令和3年5月19日	大空社出版	280 (280)	本書は 、2016 年「旧版」にさらなる調査を加えた改訂版である。改訂版ではとくに、奈良女高師附小「特別学級」の実践や理論に着目し、奈良県下の公立小のみならず、附小の理念が京都市の「特別学級」の開設や実践に影響を与えたこと、さらにそれが後の障害児(者)教育へと継承されていった可能性について、より具体的に明らかにすることを目指した。戦前の「特別学級」の検討は、現代の教育問題を考える上でも多くの示唆を与えるものであるということを明確にした。
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	(学術論文等) 1.「戦前期における「劣等児」の身体的問題について:「特殊教育」関係者の理論に着目して」	単著	平成28年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第31号	11 (11)	本稿では、特別支援教育研究の一環として、「劣等児」とその身体的特徴について考察することを目指した。その際、当時「特殊教育」の実践・研究に関わった複数の人物(青木誠四郎、脇田良吉、東京高師附小の「特別学級」担任)に着目し、その見解を確認したところ、いずれも「劣等児」の原因には先天的要因と後天的要因があり、当該児童に対して特別な教育課程・教育方法を編制・実践することの意義が主張されていたことが明らかとなった。(pp:139～149)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ	2.「奈良女高師附小訓導斎藤千栄治の「劣等児」「低能児」論とその展開」	単著	平成28年3月20日	日本教育史学会『日本教育史学会紀要』第6号	20 (20)	本稿では、特別支援教育研究の一環として、奈良女高師附小「特別学級」主任齋藤千榮治の「劣等児」「低能児」論をまずは明らかにした。齋藤は、教育的見地のみならず社会的見地より「劣等児」等の教育が不可欠であること、さらに「実際生活」に即した教育や道徳的教育の意義のみな

(単独)						らず、特別な教育方法・教育課程の必要性が主張されていたことが明らかとなった。齋藤は、転出先の滋野小学校で学級担任として田村一二を育成するが、田村は後の障害児(者)教育においても、齋藤の理論を継承していた可能性を指摘した。(pp:20～39)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	3.「通常学級で特別な配慮の必要な子どもたちについて― 視機能の問題に着目して」	単著	平成29年3月(日付明記無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	11 (11)	本稿では、特別な支援が必要な子ども達への配慮のあり方と、そのための生徒指導・教育方法のあり方を考察する一環として、子どもの視覚的な問題に着目し検討することを目指した。とくに、視力・色覚に問題を抱え、心因性視力障害を発症した子ども達に着目し、どのような環境構成、教育方法、教育課程が必要なのか、また教職者として具体的にどのような取り組みが必要なのかについても言及した。(pp:99～109)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	4.「奈良女子高等師範学校第1期生斎藤よしの経歴について―佐保会での実績にも着目して」	単著	平成29年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	10 (10)	本稿では、奈良女高師1期生であり佐保会を設立したメンバーの一人である齋藤よしに着目し、齋藤の教職者としての実績のみならず、奈良女高師、佐保会での実績、社会貢献、及び佐保女学院での教育実践・教育課程を明らかにすることを目指した。その結果、齋藤は、女子の社会的地位の向上を目指して、学内の実践のみならず、社会的方面でも多くの実績を残していたことが確認できた。(pp:25～34)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	5.「「実際生活」に即した滋野尋常小学校特別学級の教育実践―特別学級担任田村一二の教育記録に着目して」	単著	平成29年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第32号	11 (11)	本稿では、田村一二の滋野小学校時代における教育方法や生徒指導・進路指導のあり方を明らかにしつつ、特別支援教育を歴史的に考察することを目指した。その結果田村は、障害を持つ子ども達には道徳面の育成のみならず、特別な教育課程の編成や教育が必要であるとの認識の下、子どもの生活に即した身近な事物を利用した教育を行うなど、教師が良好な教育環境を提供する必要性を主張し、さらに子ども達の将来の生活までをも顧慮した職業教育を行っていたことも明らかとなった。(pp:125～135)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	6.「小学校から現在までの印象に残る授業―教育課程論を受講する大学生を対象にした調査より」	単著	平成30年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第13号	8 (8)	本稿では、教職課程を履修する学生が回答した「思い出に残る授業」アンケートの内容を分析することで、今後の教育課程、教育方法及び教職のあり方について考察することを目指した。その結果、教師主体、座学中心の授業ではなく、体験を織り交ぜた授業が理想であり、子どもの興味関心に即した学習環境の整備、道徳教育・総合的な学習の時間の充実が必要であることが明らかとなった。(pp:35～42)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ	7.「OG によるキャリア教育に学生が期待する講義内容と今後の課題について―奈良女子大学「専門職論」の	単著	平成30年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第13号	8 (8)	本稿では、今後のよりよい進路指導を考察する一環として、奈良女子大学が開講する「専門職論」における受講生対象のアンケートに着目し、検討することを目指した。とくに将来教職を目指す学生においては、同講義で様々な職種のゲストスピーカーの職業内容・職業観に触れることで、

(単独)	アンケート結果から」					将来教育現場における進路指導のあり方を改めて考察するきっかけとなっていたことが確認できた。(pp:385～392)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	8.「大学生が語る「思い出に残る授業」より見えてきた芸術教育への創意工夫の必要性:教職に関する科目を受講する「初等芸術教育学科」の学生の記述より」	単著	平成31年3月23日	大阪芸術大学短期大学部学術研究委員会『大阪芸術大学短期大学部紀要』第43号	12 (12)	本稿では、教員養成課程に在籍し、初等教育の教員を目指す学生を対象に、とくに芸術系の教科において「思い出に残る授業」調査を行うことで、よりよい教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果、知識偏重ではなく、双方向型・体験型の教育方法・教育課程に基づく授業が、良い印象として残る傾向にある、ということが確認できた。また同調査を通じて、5 教科のみならず道徳教育や特別活動等においても創意工夫が必要である等、種々の課題が浮き彫りになった。(pp:117～128)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	9.「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単著	令和2年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第15号	9 (9)	本稿では、個性尊重・児童中心主義・画一的教授を打破した教育方法である「新教育」実践の確立の経緯を、奈良県に着目して検討することを目指した。本稿では斑鳩小学校に着目して、同校がどのような経緯で奈良女高師附小の影響を受けていたのか確認したところ、附小の近隣にあるという地理的条件が附小「新教育」を摂取しやすい条件となっていたことが明らかとなり、同校では児童の道徳的側面の育成を重視した教育方法・教育課程が編成されていたことが確認できた。(pp:21～29)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	10.「新型コロナウイルス感染症による臨時休校時の家庭指導等の状況について―小・中・高校生の保護者へのアンケート結果より」	単著	令和3年3月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第16号	9 (9)	本稿では、コロナ禍という非常事態における特別な教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果、奈良ではコロナ禍の中、全国に先駆けてオンライン学習が導入されたが、その利用に戸惑いを感じている保護者が多いことが確認できた。すなわち奈良県(奈良市)は、オンライン学習の上で恵まれた環境であった半面、早期導入であったが故の問題も抱えていたこ とが推察された。今後、非常時に即したよりよい教育方法・教育課程が編成され、環境整備の充実や、きめこまやかな指導が期待されると指摘した。(pp:89～97)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	11.学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例	単著	令和3年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第45号	5 (5)	本稿では、奈良女子大学において教職課程を履修し、将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法(学習案)・教育課程について紹介することを目指した。内、学生が考えた「日誌」を活用した「気温の変化や温暖化の学び」に着目した。その結果、教師を目指す学生には、積極的に学習案の作成に取り組む姿勢が見られた。学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されるのではないかと考えた。(pp:26～30)

・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	12.「草創期における奈良女高師附小「特別学級」の特徴と道徳的な教育目標について―附小所蔵資料にも言及して」(「特別寄稿」)	単著	令和4年4月25日	奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』第502号(春4月)号	6 (6)	本稿では、道徳教育指導法の歴史的変遷を知る一つの手がかりとして、奈良女高師附小「特別学級」に着目して、そこでの学力不振・軽度障害を有する子ども達への指導法がどのようなものであったのか、明らかにすることを目指した。附小では、「特別学級」の子ども達は、将来非行や貧困等といった社会問題と密接に繋がりがあるとの認識の下、学習態度や家庭生活での規律面を徹底させる教育を学校内で行っていたことが確認できた。(pp:16～21)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	13.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単著	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第17号	10 (10)	本稿では、心身症と不登校を呈した男児へのよりよい生徒指導のあり方について検討することを目指した。その際、男児が発症した心因性視力障害の治癒までの経過を、視力の変化に基づき明らかにした。男児は学校での「いじめ」が原因で同障害を発症させたが、学校における生徒指導の改善や、特別な教育方法・教育課程編成の必要性が浮き彫りになった。また、「いじめ」防止のための道徳教育の充実が必要であることも確認できた。(pp:75～84)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	14.「色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―」	単著	令和4年8月31日	『関西教育学会年報』第46号	5 (5)	本稿では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育、保育課程編成のあり方について紹介することを目指した。発表者が奈良市の認定こども園を対象に行った教育講演後、アンケート調査を実施したが、同アンケートの結果、講演受講前と後では保育教諭等の意識が大きく変化していることが明らかとなった。また、大学や専門学校等、保育教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることが必要であることについても言及した。(pp:97～101)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	15.「園の教諭等の色覚異常に対する認識と今後の課題について―園のカラーユニバーサルデザインの実現にむけて―」	単著	令和4年8月8日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第77号	6 (6)	現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においてはどのような状況にあるのか、論者が講演を行った某認定こども園で実施したアンケート結果を下に分析し、考察することを目指した。その結果、園が文科省作成の資料を活用することや、教諭養成機関の充実、特別な保育、保育課程編成、そして園のCUD化が進められていく必要性を認識した。(pp:85～90)
・教育学概論Ⅰ・	16.「桜井尋常高等小学校における「新教育」理論及び実践の形成過程―奈良女子高等師範学校附属小学校	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第79号	12 (12)	奈良県の桜井小学校では、戦前期、「新教育」に基づいた様々な教育実践が繰り広げられた。一公立小である桜井小で活発な「新教育」が行われていた理由を確認したところ、近隣の奈良女高師附小開催の「冬期講習会」への頻回にわたる参加

Ⅱ(単独)	との交流を中心に―」					や、附小訓導との積極的な交流が背後にあったことが確認できた。桜井小では児童への道徳的教育の充実のみならず、特別な教育課程編成の意義が主張されていた。(pp:33～44) 著者:阪本美江、阪本彩加
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	17.「「特別の教科道徳」の課題と展望―教職課程「道徳教育の指導法」における調査結果に基づいて―」	単著	令和6年1月28日 ☆※24番の論文の前に移動させてください	『芦屋大学論叢』第80号	10 (10)	芦屋大学教職課程「道徳教育の指導法」を受講した学生に、これまで自身が受けてきた道徳の授業の中で心に残る授業等について自由に語らせることで、道徳科の時間の充実と教育課程編制のあり方に示唆を得ることを目指した。その結果、問題解決的、体験的な学習に基づく授業が、よい思い出として心にのこる傾向にあることが確認され、今後期待される授業テーマとしてはLGBTを含めた性に関する授業を挙げる学生も多いことが確認できた。 (pp:1～10)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	18.「看護の歴史的変遷にみる看護教育の課題(第1報)－ナイチンゲール出現から第二次世界大戦直後の欧米および日本の比較－」	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第79号	12 (12)	ナイチンゲール出現～第二次世界大戦直後までの歴史的変遷を振り返り，看護教育がどのように構築されたのかをまとめた。ナイチンゲールによって看護教育の必要性が主張されたが、当時社会的に確立することはなかった。しかし20世紀後半以降は科学的な検証と根拠を構築して看護者の立場を尊重する時代へと変化していることが明らかになった。今後ますます看護教育の充実が期待されると考えた。 (pp:101～112) 著者:原田江梨子、阪本美江
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	19.「看護の歴史的変遷にみる看護教育の課題(第2報)―第二次世界大戦以降の看護の変遷からみた日本における看護教育の展望」	共著	令和6年3月25日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第81号	13 (13)	第二次世界大戦後以降の日本における看護の変遷をふり返り、看護教育の現状から課題を究明し、教育内容および方法に関する指標を得たるため考察した。その結果、日本だけに限らず，世界の看護の本質的には変わりはないが，戦争などの時代背景を含めた社会および文化の変化によって役割を変えながら，より良い看護が提供できるよう取り組んできた形跡が確認できた。また，第二次世界大戦後は質的充実が問われるようになり，今もその傾向が続いていることを指摘した。 (pp:141-153) 著者:原田江梨子、阪本美江
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	20.「青年期にある対象の健康自己管理能力の習得を目指した教育方法に関する文献レビュー」	共著	令和6年9月30日	『関西教育学会年報』第48号	5 (5)	青年期にある学生が健康管理に関する知識、自らの健康状態を把握して必要な行動を実践する意識を支援する教育が必要である。そこで、2013年～2022年に、医中誌とCiNiiに「健康管理」「健康教育」のキーワードで登録された文献の動向を調査し、健康自己管理を実践する能力育成に必要な教育内容および方法について考察した。その結果、総合的な視点で健康教育のあり方を捉える研究が今後必要で

						あることが明らかとなった。(pp:41～45) 著者:原田江梨子、阪本美江
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	21.「ICT教育環境整備における課題の一例―近視の低年齢化や「VDT症候群」の問題に着眼して―」	単著	令和6年8月31日	『日本基礎教育学科紀要』第29号	6 (6)	本稿では、ICT利用に伴う幼児の近視の問題の現状を概観しつつ、ICTと密接に関係があるといわれる「VDT症候群」の問題も踏まえて、ICTの普及が進む今、幼児の眼の健康を守る上でどのような取り組みが必要なのか考察した。その結果、幼児にも、太陽光にあたる戸外での遊びを積極的に導入する等といった配慮に加えて、「一次予防」のためにも、近視の進行が顕著な学童期を控える園児に、健康保持を意識する習慣を身に付けさせることが、園に与えられた課題ではないかと考えた。(pp:91～96)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	22.「昭和戦前期に新聞紙上に見る小学校教師の不祥事・犯罪(1)―教師の倫理性に関する史的考察:1930(昭和5)年12月まで―」	共著	令和7年3月21日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第83号	10 (10)	本研究(第1報)では、昭和期戦前に焦点をしぼり、小学校教師の不祥事・犯罪がマスメディアの中心である「新聞」において、どのような形で、どれだけの件数が取り上げられていたのかを調べ、昭和戦前期における小学校教師の不祥事・犯罪の傾向を明らかにすることを目指した。その結果、もっとも発生件数の多かった不祥事・犯罪は暴行で、次に文書、涜職とつづく等、一定の特徴があることが明らかとなった。(pp33-42) 著者:阪本美江、阪本彩加
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	23.「青年期の特徴と大学における看護教育の今後の課題―看護基礎教育における健康教育に着目して」	共著	令和7年3月31日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第83号	9 (9)	本研究では、看護基礎教育における健康教育支援のあり方、とくに大学における看護学生に対する支援方法に関する課題を究明する上においても、まずは大学生、すなわち青年期の特徴を把握する必要があることから、青年期の発達に注目して検討することにした。その結果,看護基礎教育を受ける対象である青年期の発達課題の傾向および課題について、内省力や自己を振り返る気づきの機会を設ける必要があること等が明らかになった。(pp:111～119) 著者:原田江梨子、岩城晶子、阪本美江
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	(その他) 1.「戦前の桜井に花開いた「新教育」」:大学的奈良ガイド(奈良女子大学の大学的地域学「なら学プロジェクト」のメンバーによる連載企画)	単著	平成28年1月1日	月刊大和路『ならら 平成28年1月号』	2 (2)	「ならら」は一般向けの情報誌である。奈良女子大学の「大学的地域学」の試みである「奈良学プロジェクト」の一環として、桜井小学校の「新教育」と「特別学級」に着目し、同校において活発な教育実践が繰り広げられた背景には、桜井の地域性があったことを同誌で紹介した。本検討を通じて、桜井の歴史のみならず、桜井が教育方法・生徒指導において先進的な取

						り組みを行ってきた地域であったことを、広く認識してもらうことを目指した。(pp:20-21)
・教育学概論Ⅰ・Ⅱ(単独)	2.「色覚異常の理解と啓発の必要性について」	単著	令和4年11月15日	日本保育保険協議会「保育と保健ニュース」第98号	1 (1)	現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においては積極的な取り組みが行われているとはいえない。しかし先天的な理由から一定数の色覚異常を有する園児も存在するということから、園における色彩環境整備に加えて、特性に配慮した保育方法・保育課程編制について考察していくことが必要であることを明らかにした。(pp:3)
・教育課程論(単独)	(著書) 1.『「劣等児」特別学級の思想と実践』	単著	平成28年12月23日	大空社出版	277 (280)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	2.『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』(改訂版)	単著	令和3年5月19日	大空社出版	280 (280)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	(学術論文) 1.「戦前期における「劣等児」の身体的問題について:「特殊教育」関係者の理論に着目して」	単著	平成28年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第31号	11 (11)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	2.「奈良女高師附小訓導斎藤千栄治の「劣等児」「低能児」論とその展開」	単著	平成28年3月20日	日本教育史学会『日本教育史学会紀要』第6号	20 (20)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	3.「通常学級で特別な配慮の必要な子どもたちについて― 視機能の問題に着目して」	単著	平成29年3月(日付明記無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	11 (11)	(前掲のため省略)

・教育課程論(単独)	4.「奈良女子高等師範学校第1期生斎藤よしの経歴について―佐保会での実績にも着目して」	単著	平成29年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第12号	10 (10)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	5.「「実際生活」に即した滋野尋常小学校特別学級の教育実践―特別学級担任田村一二の教育記録に着目して」	単著	平成29年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第32号	11 (11)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	6.「小学校から現在までの印象に残る授業―教育課程論を受講する大学生を対象にした調査より」	単著	平成30年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第13号	8 (8)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	7.「大学生が語る「思い出に残る授業」より見えてきた芸術教育への創意工夫の必要性:教職に関する科目を受講する「初等芸術教育学科」の学生の記述より」	単著	平成31年3月23日	大阪芸術大学短期大学部学術研究委員会『大阪芸術大学短期大学部紀要』第43号	12 (12)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	8.「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単著	令和2年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第15号	9 (9)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	9.「新型コロナウイルス感染症による臨時休校時の家庭指導等の状況について―小・中・高校生の保護者へのアンケート結果より」	単著	令和3年3月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第16号	9 (9)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	10.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単著	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第17号	10 (10)	(前掲のため省略)

・教育課程論(単独)	11.「色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―」	単著	令和4年8月31日	『関西教育学会年報』第46号	5 (5)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	12.「桜井尋常高等小学校における「新教育」理論及び実践の形成過程―奈良女子高等師範学校附属小学校との交流を中心に―」	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第79号	12 (12)	(前掲のため省略)
・教育課程論(単独)	16.「「特別の教科道徳」の課題と展望―教職課程「道徳教育の指導法」における調査結果に基づいて―」	単著	令和6年1月28日 ☆※24番の論文の前に移動させてください	『芦屋大学論叢』第80号	10 (10)	芦屋大学教職課程「道徳教育の指導法」を受講した学生に、これまで自身が受けてきた道徳の授業の中で心に残る授業等について自由に語らせることで、道徳科の時間の充実と教育課程編制のあり方に示唆を得ることを目指した。その結果、問題解決的、体験的な学習に基づく授業が、よい思い出として心にのこる傾向にあることが確認され、今後期待される授業テーマとしてはLGBTを含めた性に関する授業を挙げる学生も多いことが確認できた。 (pp:1～10)
	(その他)					
・教育課程論(単独)	1.「戦前の桜井に花開いた「新教育」」:大学的奈良ガイド(奈良女子大学の大学的地域学「なら学プロジェクト」のメンバーによる連載企画)	単著	平成28年1月1日	月刊大和路『ならら 平成28年1月号』	2 (2)	「ならら」は一般向けの情報誌である。奈良女子大学の「大学的地域学」の試みである「奈良学プロジェクト」の一環として、桜井小学校の「新教育」と「特別学級」に着目し、同校において活発な教育実践が繰り広げられた背景には、桜井の地域性があったことを同誌で紹介した。本検討を通じて、桜井の歴史のみならず、桜井が教育方法・生徒指導において先進的な取り組みを行ってきた地域であったことを、広く認識してもらうことを目指した。 (pp:20-21)
・教育課程論(単独)	2.「色覚異常の理解と啓発の必要性について」	単著	令和4年11月15日	日本保育保険協議会「保育と保健ニュース」第98号	1 (1)	現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においては積極的な取り組みが行われているとはいえない。しかし先天的な理由から一定数の色覚異常を有する園児も存在するということから、園における色彩環境整備に加えて、特性に配慮した保育方法・保育課程編制について考察していくことが必要であることを明らかにした。(pp:3)
(単独)						

芦屋大学

・道徳教育の指導法(単独)	(著書) 1.『「劣等児」特別学級の思想と実践』	単著	平成28年12月23日	大空社出版	277 (280)	本書は、戦前の文部省の「特殊教育」政策や「特殊教育」観を踏まえつつ、奈良県下の「特別学級」の歴史を明らかにするものである。本書では、奈良の奈良女高師附小、桜井小学校、治道小学校に着目し、「特別学級」や、当時「劣等児」「低能児」といわれた学力不振児、軽度障害児の特徴を明らかにした。その結果、同校では当該児童への道徳的教育の意義を主張し、特別な教育方法、教育課程を実践していたことが明らかとなった。本書は「2021年日本特別ニーズ教育学会文献賞」(学会賞)を受賞した。
・道徳教育の指導法(単独)	2. 『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』(改訂版)	単著	令和3年5月19日	大空社出版	280 (280)	本書は 、2016 年「旧版」にさらなる調査を加えた改訂版である。改訂版ではとくに、奈良女高師附小「特別学級」の実践や理論に着目し、奈良県下の公立小のみならず、附小の理念が京都市の「特別学級」の開設や実践に影響を与えたこと、さらにそれが後の障害児(者)教育へと継承されていった可能性について、より具体的に明らかにすることを目指した。戦前の「特別学級」の検討は、現代の教育問題を考える上でも多くの示唆を与えるものであるということを明確にした。
・道徳教育の指導法(単独)	(学術論文等) 1. 「戦前期における「劣等児」の身体的問題について:「特殊教育」関係者の理論に着目して」	単著	平成28年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第31号	11 (11)	本稿では、特別支援教育研究の一環として、「劣等児」とその身体的特徴について考察することを目指した。その際、当時「特殊教育」の実践・研究に関わった複数の人物(青木誠四郎、脇田良吉、東京高師附小の「特別学級」担任)に着目し、その見解を確認したところ、いずれも「劣等児」の原因には先天的要因と後天的要因があり、当該児童に対して特別な教育課程・教育方法を編制・実践することの意義が主張されていたことが明らかとなった。(pp:139～149)
・道徳教育の指導法(単独)	2. 「奈良女高師附小訓導斎藤千栄治の「劣等児」「低能児」論とその展開」	単著	平成28年3月20日	日本教育史学会『日本教育史学会紀要』第6号	20 (20)	本稿では、特別支援教育研究の一環として、奈良女高師附小「特別学級」主任齋藤千榮治の「劣等児」「低能児」論をまずは明らかにした。齋藤は、教育的見地のみならず社会的見地より「劣等児」等の教育が不可欠であること、さらに「実際生活」に即した教育や道徳的教育の意義のみならず、特別な教育方法・教育課
(単独)						程の必要性が主張されていたことが明らかとなった。齋藤は、転出先の滋野小学校で学級担任として田村一二を育成するが、田村は後の障害児(者)教育においても、齋藤の理論を継承していた可能性を指摘した。(pp:20～39)

・道徳教育の指導法(単独)	5. 「「実際生活」に即した滋野尋常小学校特別学級の教育実践―特別学級担任田村一二の教育記録に着目して」	単著	平成29年3月31日	奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第32号	11 (11)	本稿では、田村一二の滋野小学校時代における教育方法や生徒指導・進路指導のあり方を明らかにしつつ、特別支援教育を歴史的に考察することを目指した。その結果田村は、障害を持つ子ども達には道徳面の育成のみならず、特別な教育課程の編成や教育が必要であるとの認識の下、子どもの生活に即した身近な事物を利用した教育を行うなど、教師が良好な教育環境を提供する必要性を主張し、さらに子ども達の将来の生活までをも顧慮した職業教育を行っていたことも明らかとなった。(pp:125～135)
・道徳教育の指導法(単独)	9. 「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単著	令和2年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第15号	9 (9)	本稿では、個性尊重・児童中心主義・画一的教授を打破した教育方法である「新教育」実践の確立の経緯を、奈良県に着目して検討することを目指した。本稿では斑鳩小学校に着目して、同校がどのような経緯で奈良女高師附小の影響を受けていたのか確認したところ、附小の近隣にあるという地理的条件が附小「新教育」を摂取しやすい条件となっていたことが明らかとなり、同校では児童の道徳的側面の育成を重視した教育方法・教育課程が編成されていたことが確認できた。(pp:21～29)
・道徳教育の指導法(単独)	12.「草創期における奈良女高師附小「特別学級」の特徴と道徳的な教育目標について―附小所蔵資料にも言及して」(「特別寄稿」)	単著	令和4年4月25日	奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』第502号(春4月)号	6 (6)	本稿では、道徳教育指導法の歴史的変遷を知る一つの手がかりとして、奈良女高師附小「特別学級」に着目して、そこでの学力不振・軽度障害を有する子ども達への指導法がどのようなものであったのか、明らかにすることを目指した。附小では、「特別学級」の子ども達は、将来非行や貧困等といった社会問題と密接に繋がりがあるとの認識の下、学習態度や家庭生活での規律面を徹底させる教育を学校内で行っていたことが確認できた。(pp:16～21)
・道徳教育の指導法(単独)	13.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単著	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第17号	10 (10)	本稿では、心身症と不登校を呈した男児へのよりよい生徒指導のあり方について検討することを目指した。その際、男児が発症した心因性視力障害の治癒までの経過を、視力の変化に基づき明らかにした。男児は学校での「いじめ」が原因で同障害を発症させたが、学校における生徒指導の改善や、特別な教育
・道徳教育の指導法(単独)						方法・教育課程編成の必要性が浮き彫りになった。また、「いじめ」防止のための道徳教育の充実が必要であることも確認できた。(pp:75～84)

・道徳教育の指導法(単独)	16.「桜井尋常高等小学校における「新教育」理論及び実践の形成過程―奈良女子高等師範学校附属小学校との交流を中心に―」	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第79号	12 (12)	奈良県の桜井小学校では、戦前期、「新教育」に基づいた様々な教育実践が繰り広げられた。一公立小である桜井小で活発な「新教育」が行われていた理由を確認したところ、近隣の奈良女高師附小開催の「冬期講習会」への頻回にわたる参加や、附小訓導との積極的な交流が背後にあったことが確認できた。桜井小では児童への道徳的教育の充実のみならず、特別な教育課程編成の意義が主張されていた。(pp:33～44) 著者:阪本美江、阪本彩加
・道徳教育の指導法(単独)	17.「「特別の教科道徳」の課題と展望―教職課程「道徳教育の指導法」における調査結果に基づいて―」	単著	令和6年1月28日 ☆※24番の論文の前に移動させてください	『芦屋大学論叢』第80号	10 (10)	芦屋大学教職課程「道徳教育の指導法」を受講した学生に、これまで自身が受けてきた道徳の授業の中で心に残る授業等について自由に語らせることで、道徳科の時間の充実と教育課程編制のあり方に示唆を得ることを目指した。その結果、問題解決的、体験的な学習に基づく授業が、よい思い出として心にのこる傾向にあることが確認され、今後期待される授業テーマとしてはLGBTを含めた性に関する授業を挙げる学生も多いことが確認できた。 (pp:1～10)
・道徳教育の指導法(単独)	22.「昭和戦前期に新聞紙上に見る小学校教師の不祥事・犯罪(1)―教師の倫理性に関する史的考察:1930(昭和5)年12月まで―」	共著	令和7年3月21日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第83号	10 (10)	本研究(第1報)では、昭和期戦前に焦点をしぼり、小学校教師の不祥事・犯罪がマスメディアの中心である「新聞」において、どのような形で、どれだけの件数が取り上げられていたのかを調べ、昭和戦前期における小学校教師の不祥事・犯罪の傾向を明らかにすることを目指した。その結果、もっとも発生件数の多かった不祥事・犯罪は暴行で、次に文書、涜職とつづく等、一定の特徴があることが明らかとなった。(pp33-42) 著者:阪本美江、阪本彩加

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1.「奈良女高師附小との交流の下「新教育」を構築させた公立小学校の一例―奈良県斑鳩尋常高等小学校に着目して」	単著	令和2年3月(日付記載無し)	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第15号	本稿では、個性尊重・児童中心主義・画一的教授を打破した教育方法である「新教育」実践の確立の経緯を、奈良県に着目して検討することを目指した。本稿では斑鳩小学校に着目して、同校がどのような経緯で奈良女高師附小の影響を受けていたのか確認し

				たところ、附小の近隣にあるという地理的条件が附小「新教育」を摂取しやすい条件となっていたことが明らかとなり、同校では児童の道徳的側面の育成を重視した教育方法・教育課程が編成されていたことが確認できた。(pp:21～29)
2.「新型コロナウイルス感染症による臨時休校時の家庭指導等の状況について―小・中・高校生の保護者へのアンケート結果より」	単著	令和3年3月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第16号	本稿では、コロナ禍という非常事態における特別な教育方法・教育課程のあり方について考察することを目指した。その結果、奈良ではコロナ禍の中、全国に先駆けてオンライン学習が導入されたが、その利用に戸惑いを感じている保護者が多いことが確認できた。すなわち奈良県(奈良市)は、オンライン学習の上で恵まれた環境であった半面、早期導入であったが故の問題も抱えていたことが推察された。今後、非常時に即したよりよい教育方法・教育課程が編成され、環境整備の充実や、きめこまやかな指導が期待されると指摘した。(pp:89～97)
3.学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例	単著	令和3年8月31日	関西教育学会『関西教育学会年報』第45号	本稿では、奈良女子大学において教職課程を履修し、将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法(学習案)・教育課程について紹介することを目指した。内、学生が考えた「日誌」を活用した「気温の変化や温暖化の学び」に着目した。その結果、教師を目指す学生には、積極的に学習案の作成に取り組む姿勢が見られた。学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されるのではないかと考えた。(pp:26～30)
4.「草創期における奈良女高師附小「特別学級」の特徴と道徳的な教育目標について―附小所蔵資料にも言及して」(「特別寄稿」)	単著	令和4年4月25日	奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』第502号(春4月)号	本稿では、道徳教育指導法の歴史的変遷を知る一つの手がかりとして、奈良女高師附小「特別学級」に着目して、そこでの学力不振・軽度障害を有する子ども達への指導法がどのようなものであったのか、明らかにすることを目指した。附小では、「特別学級」の子ども達は、将来非行や貧困等といった社会問題と密接に繋がりがあるとの認識の下、学習態度や家庭生活での規律面を徹底させる教育を学校内で行っていたことが確認できた。(pp:16～21)

5.「心身症と不登校を呈した男児への生徒指導の一例―心因性視力障害発症から治癒までの経過に着目して」	単著	令和4年1月31日	奈良女子大学教育システム研究開発センター『教育システム研究』第17号	本稿では、心身症と不登校を呈した男児へのよりよい生徒指導のあり方について検討することを目指した。その際、男児が発症した心因性視力障害の治癒までの経過を、視力の変化に基づき明らかにした。男児は学校での「いじめ」が原因で同障害を発症させたが、学校における生徒指導の改善や、特別な教育方法・教育課程編成の必要性が浮き彫りになった。また、「いじめ」防止のための道徳教育の充実が必要であることも確認できた。(pp:75～84)
6.「色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―」	単著	令和4年8月31日	『関西教育学会年報』第46号	本稿では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育、保育課程編成のあり方について紹介することを目指した。発表者が奈良市の認定こども園を対象に行った教育講演後、アンケート調査を実施したが、同アンケートの結果、講演受講前と後では保育教諭等の意識が大きく変化していることが明らかとなった。また、大学や専門学校等、保育教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることが必要であることについても言及した。(pp:97～101)
7.「園の教諭等の色覚異常に対する認識と今後の課題について―園のカラーユニバーサルデザインの実現にむけて―」	単著	令和4年8月8日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第77号	現在、学校においては、色覚異常を有する児童・生徒のためのさまざまな取り組みがおこなわれつつあるが、色覚検査を実施しない幼稚園等においてはどのような状況にあるのか、論者が講演を行った某認定こども園で実施したアンケート結果を下に分析し、考察することを目指した。その結果、園が文科省作成の資料を活用することや、教諭養成機関の充実、特別な保育、保育課程編成、そして園の CUD 化が進められていく必要性を認識した。(pp:85～90)
8.「桜井尋常高等小学校における「新教育」理論及び実践の形成過程 ―奈良女子高等師範学校附属小学校との交流を中心に―」	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第79号	奈良県の桜井小学校では、戦前期、「新教育」に基づいた様々な教育実践が繰り広げられた。一公立小である桜井小で活発な「新教育」が行われていた理由を確認したところ、近隣の奈良女高師附小開催の「冬期講習会」への頻回にわたる参加や、附小訓導との積極的な交流が背後にあったことが確認できた。桜井小では児童への道徳的教育の充実のみならず、特別な教育課程編成の意義が主張されていた。(pp:33～44) 著者:阪本美江、阪本彩加

9.「「特別の教科　道徳」の課題と展望―教職課程「道徳教育の指導法」における調査結果に基づいて―」	単著	令和6年1月28日 ☆※２４番の論文の前に移動させてください	『芦屋大学論叢』第 80 号	芦屋大学教職課程「道徳教育の指導法」を受講した学生に、これまで自身が受けてきた道徳の授業の中で心に残る授業等について自由に語らせることで、道徳科の時間の充実と教育課程編制のあり方に示唆を得ることを目指した。その結果、問題解決的、体験的な学習に基づく授業が、よい思い出として心にのこる傾向にあることが確認され、今後期待される授業テーマとしてはLGBTを含めた性に関する授業を挙げる学生も多いことが確認できた。 (pp:1～10)
10.「看護の歴史的変遷にみる看護教育の課題(第1報)ーナイチンゲール出現から第二次世界大戦直後の欧米および日本の比較ー」	共著	令和5年7月29日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第 79 号	ナイチンゲール出現～第二次世界大戦直後までの歴史的変遷を振り返り，看護教育がどのように構築されたのかをまとめた。ナイチンゲールによって看護教育の必要性が主張されたが、当時社会的に確立することはなかった。しかし20世紀後半以降は科学的な検証と根拠を構築して看護者の立場を尊重する時代へと変化していることが明らかになった。今後ますます看護教育の充実が期待されると考えた。(pp:101～112) 著者:原田江梨子、阪本美江
11.「看護の歴史的変遷にみる看護教育の課題(第 2 報)―第二次世界大戦以降の看護の変遷からみた日本における看護教育の展望」	共著	令和6年3月25日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第 81 号	第二次世界大戦後以降の日本における看護の変遷をふり返り、看護教育の現状から課題を究明し、教育内容および方法に関する指標を得たるため考察した。その結果、日本だけに限らず，世界の看護の本質的には変わりはないが，戦争などの時代背景を含めた社会および文化の変化によって役割を変えながら，より良い看護が提供できるよう取り組んできた形跡が確認できた。また，第二次世界大戦後は質的充実が問われるようになり，今もその傾向が続いていることを指摘した。(pp:141-153) 著者:原田江梨子、阪本美江
12.「青年期にある対象の健康自己管理能力の習得を目指した教育方法に関する文献レビュー」	共著	令和6年9月30日	『関西教育学会年報』第 48 号	青年期にある学生が健康管理に関する知識、自らの健康状態を把握して必要な行動を実践する意識を支援する教育が必要である。そこで、2013 年～2022 年に、医中誌と CiNii に「健康管理」「健康教育」のキーワードで登録された文献の動向を調査し、健康自己管理を実践する能力育成に必要な教育内容および方法について考察した。その結果、総合的な視点で健康教育のあり方を捉える研

				究が今後必要であることが明らかとなった。(pp:41～45) 著者:原田江梨子、阪本美江
13.「ICT 教育環境整備における課題の一例―近視の低年齢化や「VDT 症候群」の問題に着眼して―」	単著	令和6年8月31日	『日本基礎教育学科紀要』第29号	本稿では、ICT 利用に伴う幼児の近視の問題の現状を概観しつつ、ICT と密接に関係があるといわれる「VDT 症候群」の問題も踏まえて、ICT の普及が進む今、幼児の眼の健康を守る上でどのような取り組みが必要なのか考察した。その結果、幼児にも、太陽光にあたる戸外での遊びを積極的に導入する等といった配慮に加えて、「一次予防」のためにも、近視の進行が顕著な学童期を控える園児に、健康保持を意識する習慣を身に付けさせることが、園に与えられた課題ではないかと考えた。(pp:91～96)
14.「昭和戦前期に新聞紙上に見る小学校教師の不祥事・犯罪(1)―教師の倫理性に関する史的考察:1930(昭和5)年12月まで―」	共著	令和7年3月21日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第83号	本研究(第 1 報)では、昭和期戦前に焦点をしぼり、小学校教師の不祥事・犯罪がマスメディアの中心である「新聞」において、どのような形で、どれだけの件数が取り上げられていたのかを調べ、昭和戦前期における小学校教師の不祥事・犯罪の傾向を明らかにすることを目指した。その結果、もっとも発生件数の多かった不祥事・犯罪は暴行で、次に文書、涜職とつづく等、一定の特徴があることが明らかとなった。(pp33-42) 著者:阪本美江、阪本彩加
15.「青年期の特徴と大学における看護教育の今後の課題―看護基礎教育における健康教育に着目して」	共著	令和7年3月31日	芦屋大学『芦屋大学論叢』第83号	本研究では、看護基礎教育における健康教育支援のあり方、とくに大学における看護学生に対する支援方法に関する課題を究明する上においても、まずは大学生、すなわち青年期の特徴を把握する必要があることから、青年期の発達に注目して検討することにした。その結果，看護基礎教育を受ける対象である青年期の発達課題の傾向および課題について、内省力や自己を振り返る気づきの機会を設ける必要があること等が明らかになった。 (pp:111～119) 著者:原田江梨子、岩城晶子、阪本美江
【その他(発表や講演)】 (発表)				
1. 学生が考えた奈良女附小資料を活用した学習案の一例	単独発表	令和2年11月16日～22日	関西教育学会第72回大会(Web 開催:神戸親和女子大学)	本発表では、奈良女子大学において教職課程を履修し、将来教師を目指す学生が考案した、附小資料を活用した児童・生徒への教育方法(学習案)について紹介することを目指した。内、学生が

				考えた「日誌」を活用した「気温の変化や温暖化の学び」に着目した。その結果、教師を目指す学生には、積極的に学習案の作成に取り組む姿勢が見られた。学校資料活用例を蓄積させることで、より一層学校資料の価値が認識されるのではないかと考えた。
2. 奈良女附小が所蔵する学校資料の保存と活用について―地域を物語る学校資料	単 独発表	令和 3 年 3 月 7 日	第 16 回学校資料研究会(於:京都府京都文化博物館)	学校資料研究会において講演。タイトル「奈良女附小が所蔵する学校資料の保存と活用について―地域を物語る学校資料」にて、学校資料が児童・生徒の教育方法や実践において広く活用されるべきであることと、活用例(資料を利用した学習案)の蓄積が目指されるべきであることについて指摘した。
3. 色覚特性に関する教育講演受講後の保育教諭等の意識の変化―園におけるよりよい色彩環境や教育のあり方とは―	単 独発表	令和 3 年 11 月 15 日～21 日	関西教育学会第 73 回大会(Web 開催:奈良教育大学・奈良女子大学)	本発表では、園児の色覚特性に着目しつつ、園のよりよい色彩環境や保育・教育課程編成のあり方について紹介することを目指した。発表者が奈良市の認定こども園を対象に実施した教育講演後、アンケート調査を実施したが、同アンケートの結果、講演受講前と後では保育教諭等の意識が大きく変化していることが明らかとなった。また、大学や専門学校等、保育教諭養成機関における、色覚特性を含めた特別な配慮が必要な園児に関する学びが充実されることが必要であることについても言及した。
4. 青年期にある対象の健康自己管理能力の習得を目指した教育方法に関する文献レビュー	共 同発表	令和 5 年 11 月 19 日	関西教育学会第 75 回大会(於:佛教大学)	青年期にある学生が、生涯を通じて身体的・精神的に健康な状態で過ごすための健康自己管理能力を養うためには、健康管理に関する知識、自らの健康状態を把握して必要な行動を実践する意識を支援する教育が必要である。そこで、2013 年～2022 年に、医中誌と CiNii に「健康管理」「健康教育」のキーワードで登録された文献の動向を調査し、健康自己管理を実践する能力育成に必要な教育内容および方法について考察した。 発表:原田江梨子、阪本美江
5.「特別な教育的ニーズ」を有する色弱の園児への合理的配慮に向けた調査研究	単 独発表	令和 6 年 10 月 19 日	日本特別ニーズ教育学会第 30 回記念大会自由研究発表(於:日本大学文理学部)	本発表では、教育学系大学教員であり眼科専門の国家資格である視能訓練士の資格を有する論者が、保育教諭と共に色弱を有する園児が色間違いする可能性のある園の色彩環境(モノ)を色覚シミュレーションツール、すなわち色弱を体験できる模擬フィルタやアプリを用いて検出・分析することに

				した。その結果、園には色間違いしやすい色彩環境(モノ)が豊富にあることが改めて確認できたことについて明らかにした。
6.『「劣等児」特別学級の思想と実践』(大空社出版、2016 年)および 新版『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』(大空社出版、2021 年)を刊行して〜私の研究歴を中心に	単 独 発表	令和 6 年 10 月 20 日	日本特別ニーズ教育学会第30回記念大会「若手チャレンジ研究会」(於:日本大学文理学部)	本発表では、『「劣等児」「特別学級」の思想と実践』を刊行するに至るまでの経緯を、筆者の研究歴に着目して語った。そこでは博士論文の内容を刊行する意義について詳述した。また、旧版からわずか 5 年で新版を刊行するに至った経緯についても紹介することで、研究を継続させることの意義について語った。
7.「田村肇の思想と実践 ―大阪市中大江東尋常小学校の「特別学級」と大阪市思斉学校での取り組みに着目して―」	共 同 発表	令和 6 年 10 月 20 日	日本特別ニーズ教育学会第 30 回記念大会自由研究発表(於:日本大学文理学部)	本発表は、昭和 15 年大阪市により設立された思斉学校の開設動機を初代校長である田村の1次史料により検討した。中大江東小から思斉学校設置における田村の教育思想及び実践を検討すると、田村はあらゆる個に応じた教育を構想していたこと、さらに思斉の実践が、国民学校令第 53 条、省令第 55 号に影響を与えていた可能性が示された。本発表を通じて、戦前期大阪市「特別学級」史研究、学校教育史研究に新たな知見を加えることができた。 発表者:磯崎加奈代、阪本美江
8.「ICT の活用に伴う視力低下とその抑制に向けた環境整備と教育方法の検討」	単 独 発表	令和6年11月2日	日本基礎教育学会令和6年度第2回月例会(zoom 開催)	本発表では、近年の子どもの視力低下の問題について、そのメカニズムと抑制の対策を明らかにした。WHO が近視を「世界的流行」と位置づけ、「公衆衛生上の危機」と警鐘を鳴らしている。文部科学省の「学校保健統計調査」においても、明らかに子どもの視力が低下している。近年、GIGA スクール構想の実施に伴い、子どもたちの ICT 機器の利用時間(近業)が増えており、学校教育において具体的にどのような対策が必要であるのか、教育学的・医学的な見地から検証した。
9.「戦前期大阪市中大江東尋常小学校「特殊学級」開設動機と田村肇の教育思想 ―大阪市思斉学校設置以前の田村の理論及び実践―」	共 同 発表	令和 6 年 11 月 30 日	関西教育学会第 76 回大会(於:京都大学)	本発表では、思斉学校の開設動機を田村の1次史料により検討するものである。そのために中大江東小「特別学級」、思斉学校の開設動機と教育対象児童を明らかにすることを目指した。その結果、先行研究の指摘とは異なり、中大江東小「特別学級」は、田村が「精神薄弱児」の存在に気が付いたことからはじまった「精神薄弱児」を含む学級であり、中大江東小「特別学級」から思斉学校への連続性がみられることが明らかとなった。

				発表者:磯崎加奈代、阪本美江
10.「青年期にある看護学生の健康状態と日常生活に関する実態調査」	共同発表	令和6年11月30日	関西教育学会第76回大会(於:京都大学)	本発表では、青年期にある看護学生に対して、健康に関する知識や健康自己管理の実態、健康状態や日常生活の過ごし方に関する質問紙調査の結果を明らかにした。同調査より、学生の健康自己管理には種々の問題があることが確認でき、健康状態や日常生活に関する課題を明らかにし、健康に関する知識の習得、適切な健康状態の維持、望ましい日常生活の過ごし方にアプローチする〈健康自己管理〉の育成方法について検討し、紹介した。 発表者:原田江梨子、阪本美江
(講演・シンポジウム) **(奈良県教育委員会・奈良県医師会等主催の講演)** 1)令和元年度奈良県教育委員会等主催「学校保健研修会」にて講演		令和2年1月30日		「学校保健研修会」にて、奈良県下の教員(養護教諭も含む)、医師、歯科医師、薬剤師等約100名を対象に講演。タイトル「心因性視力障害について―ストレスを抱えた子どもたち」【講演の一例動画URL: https://youtu.be/71RkGCWWhts 奈良県医師会・教育委員会等より限定公開の了承済み】
2)奈良県「学校保健研修会」講演	単独講演	令和2年1月30日	令和元年度奈良県学校保健研修会(奈良県教育委員会等主催。於:ホテルリガーレ春日野)	奈良県下の教員(養護教諭も含む)、医師、歯科医師、薬剤師等約100名を対象に講演。タイトル「心因性視力障害について―ストレスを抱えた子どもたち」にて、子どもの心身症の問題と今後の教育課程や生徒指導のあり方について講演。心因性視力障害の背後に、家庭、学校、社会の問題や、発達障害の問題があることについても紹介した。(奈良県教育委員会、奈良県医師会、奈良県歯科医師会、奈良県薬剤師会主催)
3)幼保連携型認定こども園中登美こども園講演	単独講演	令和3年5月17日	幼保連携型認定こども園中登美こども園教職員研修会(於:認定こども園中登美こども園)	中登美こども園にて、保育士・幼稚園教諭・その他職員33名を対象に講演を行う。タイトル「視力の問題と色覚異常を持つ園児の特徴について―園・家庭・社会・医療が連携する意義と園のよりよい環境構成のあり方について」にて、乳幼児の視機能の特性、心因性視力障害とその背後にある家庭の問題について紹介するとともに、色覚異常を有する乳幼児の特性と、園におけるよりよい環境

				構成(カラーユニバーサルデザイン)について説明した。また、特別な支援が必要な園児に対する指導や教育方法のあり方についても紹介した。
4)社会福祉法人どんぐり「そら保育園」「はな保育園」「うみ保育園」「もり保育園」講演	単 独講演	令和3年5月19日	社会福祉法人どんぐり教職員研修会(於:社会福祉法人どんぐり「もり保育園」)	社会福祉法人どんぐり「そら保育園」「はな保育園」「うみ保育園」「もり保育園」の保育士並びに看護師、その他職員 40 名を対象に講演。タイトル「視力の問題と色覚異常を持つ園児の特徴について―園・家庭・社会・医療が連携する意義と園のよりよい環境構成のあり方について」にて、乳幼児の視機能の特性、心因性視力障害とその背後にある家庭の問題について紹介するとともに、色覚異常を有する乳幼児の特性と、園におけるよりよい環境構成(カラーユニバーサルデザイン)について説明した。また、特別な支援が必要な園児に対する指導や教育方法のあり方についても紹介した。
5)奈良市保育会【園長会】講演	単 独講演	令和 3 年 11 月10 日	奈良市保育会(Web 開催:社会福祉法人希望の会 こだま保育園	「奈良市保育会」の「園長会」において、奈良市内における認定こども園及び保育所の園長約 43 名を対象に講演。タイトル「子どもの視機能と今後の保育・教育課程編成及び環境構成のあり方について」にて、今後の保育におけるよりよい保育・教育課程編成や環境構成のあり方を、乳幼児の視機能に着目して説明した。そこでは、園におけるユニバーサルデザインについても紹介し、すべての園児がすごしやすく、わかりやすい環境を整備することの必要性について紹介した【講演の一例動画 URL: https://youtu.be/6uNFD7JXyJA 奈良市保育会より限定公開の了承済み】
6)奈良県「学校保健研修会」講演	単 独講演	令和4年3月17日	令和3年度奈良県学校保健研修会(奈良県教育委員会等主催。於:奈良県医師会館)	奈良県下の教員(養護教諭も含む)、医師、歯科医師、薬剤師等 115 名を対象に講演。タイトル「コロナ禍における子どもの視力の問題―学校における特別な配慮とよりよい環境構成のあり方とは」で講演を行う。通常学級における児童・生徒(幼児も含む)の眼の健康を保持するための指導方法、環境構成のあり方について説明しつつ、保護者も含めた啓発活動の重要性について紹介した(奈良県教育委員会、奈良県医師会、奈良県歯科医師会、奈良県薬剤師会主催)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

(芦屋市民公開講座関係) 1)芦屋大学公開講座での講演	単独講演	令和6年3月8日	芦屋市公民館、芦屋大学共催(於:芦屋市民センター)	「歴史を物語る学校資料－奈良女子高等師範学校附属小学校の資料に着目して」で芦屋市民を対象に講演をおこなう。同講演において、学校資料の特徴と魅力を、奈良女子高等師範学校附属小学校時代の文書資料に基づき紹介した。
2)芦屋市公民館「近現代史講座」での招待講演①	単独講演	令和6年7月13日	芦屋市公民館主催(於:芦屋市民センター)	同年3月の講演後、招待を受け「歴史を物語る学校資料①―奈良女子高等師範学校附属小学校の記録から(奈良空襲の記録に基づいて)」で芦屋市民を対象に講演をおこなう。奈良空襲の特徴を学校資料の記録に基づきさらに詳しく紹介した。
3)芦屋市公民館「近現代史講座」での招待講演②	単独講演	令和6年9月28日	芦屋市公民館主催(於:芦屋市民センター)	令和6年度「近現代史講座」第二弾として、「歴史を物語る学校資料②―奈良女子高等師範学校附属小学校の記録から(戦前の「特別学級」に着目して)」で芦屋市民を対象に講演をおこなう。戦前期における障害を有する子ども達の特徴とその教育のあり方を、学校資料に基づき紹介した。
4)芦屋市公民館「令和7年度みんなで考えよう『平和と人権』―人権文化をすすめる運動―」での招待講演	単独講演	令和7年7月25日	芦屋市公民館主催(於:芦屋市市民会館大ホール「ルネサンスクラシックス芦屋ルナ・ホール」)	「『青い目の人形』が伝える戦争と平和～甲南幼稚園所蔵の人形に着目して」のタイトルで講演。戦前期アメリカから日米友好のために贈られた「青い目の人形」が、当初は日本で歓迎を受けるが、戦争により翻弄された歴史を紹介。さらに、甲南幼稚園に現在も所在する「青い目の人形」に着目し、同人形が現在も「平和大使」として重要な意味を持つことを紹介した。講演と同時に、芦屋市公民館と共同で、7月16日(水)～7月24日(月)に戦前教科書や戦争に纏わる史料を紹介する展示会を開催(於:市民センター3階)。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　杉 島　威一郎

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ﾍﾟｰｼﾞ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
日本史概論 Ⅰ日本文化史研究 宗教学 社会概論	【著書】 1.和田神社と和田岬	単	平成 27 年 7 月	和田神社	131	本書は和田神社小史、和田岬の歴史と信仰、和田岬を訪れた人々の 3 章からなる。和田神社小史では和田神社が鎮座した年の推定、江戸時代の氏子論争、近代における神社の変容について考察した。和田岬の歴史と信仰と和田岬を訪れた人々では一般読者にわかりやすく郷土の歴史を紹介した。
日本史概論 Ⅰ日本文化史研究 宗教学 社会概論	2(歴史コラム) 神戸市における市民祭の成立と展開	単	平成 25 年 3 月	都市政策	2	公益財団法人神戸都市問題研究所に依頼を受け、研究所の季刊誌である『都市政策』に毎号連載されている歴史コラムに神戸市の市民祭について執筆した。昭和八年に誕生した神戸市の市民祭が戦前、戦中、戦後とどのような変遷を辿ってきたか要点をまとめた。

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　要
【その他(講演や発表)】 1 講演 「みなとの祭」について	単	平成 25 年 9 月	都市問題研究所	都市問題研究所が行っている定例の歴史研究会で、「みなとの祭」を中心に神戸市の市民祭や博覧会について時代背景を踏まえつつ、研究発表を行った。特に戦前の郷土意識の高まりと市民祭の誕生が密接な関係を持つことについて、指摘した。
2【研究発表】 神道にみられる渡来文化の影響～シルクロードの終着点、日本の視点から～	単	平成 29 年 11 月	関西学院大学シルクロード研究センター 国際シンポジウム	古代の神道において、主にシルクドードを経由して伝えられた文化に着目し発表した。日本独自の宗教と考えられる神道が成立期において外来文化の影響を受けていたことを指摘した。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

② 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日
氏 名 竹安 知枝

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
初等教科教育法Ⅸ(体育)	(著書) 1.『子どもの保健と安全』	共著	令和４年２月	教育情報出版	子どもの心身の健康(生理機能・運動機能の発達など)と保健(病気の予防と手当・感染症対策・保健指導)、安全管理等に関する事柄について記された書籍であり、「子どもの保健」関連科目の大学生用のテキストとして、複数の大学で2020年より採用されている。(全 192 頁)第1章3節と第6章1節の計4頁を担当。(高内正子編著、著者 竹安知枝他)
	(学術論文) 1. 児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共著(代表)	平成28年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 13 号)pp.37-41	児童期の遊びの好み(室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか)が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
	2. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響	単著	平成30年11月	芦屋大学論叢(第70号)pp.23-30.	大阪市内の女子短期大学生を対象に児童期の遊び(外遊びの頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能性が高い($p < 0.01$)という事が示唆された。
	(教育実践記録等) 1.小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について－女子大学生を対象に－	単著	平成26年6月	兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 36 号) pp.7-14	小学校時代に運動・体育が好きであったかどうかと、中学校・高校時代の運動の習慣との関連について検証し、また体育を好意的に捉えるために重要な要素について考察した。

	2. 児童期の遊びの好みがその後の運動に対する主観(好き・嫌い)に与える影響	単著	平成 29 年 6 月	兵庫教育大学嬉野体育研究会『健』(第 39 号) pp.5-9	児童期の遊びの好みが、その後の運動に対する好き嫌いにどのように影響を与えるかについて調査し考察した。
	3.ニュースポーツであるキンボールスポーツの実践が自律神経活動およびストレスホルモン, 口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 6 年 4 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 2023 (32) pp.3-6	キンボール(ニュイスポーツ)による実践が自律神経活動とストレスホルモンに与える影響と、口腔内免疫に与える影響について調査し考察した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・徳島実友香・織田恵輔・竹安知枝)
	4.バランス運動を取り入れた遊びが幼児の身体・運動機能に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(15 巻)1 号 pp.45-51	バランス運動を取り入れた運動・遊びが幼児の身体と運動機能に与える影響について調査し考察した。 (松尾貴司・永井伸人・辻慎太郎・竹安知枝・織田恵輔・臼井達矢)
児童体育	(著書) 1.『子どもの保健と安全』	共著	令和 4 年 2 月	教育情報出版	再掲のため、略
	(学術論文) 1. 児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共著 (代表)	平成 28 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 13 号) pp.37-41	再掲のため、略
	2. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響	単著	平成 30 年 11 月	芦屋大学論叢(第 70 号) pp.23-30.	再掲のため、略
	3. サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共著	令和 30 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 10 巻) pp.101-108. 査読あり	サッカースクール(週2回)に所属する幼児(その他のスポーツは実践していない)を対象に、足趾把持筋力が体力因子(スピード・静的バランス・反応性・敏捷性等)との関連性について調査した。その結果、足趾把持筋力とスピード・反応性・バランスに関する体力因子との関連性が認められた。(辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢)
	4. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い) に与える影響	単著	平成 30 年 11 月	芦屋大学論叢(第 70 号)pp.23-30. 査読あり	大阪市内の女子短期大学生女子 236 名を対象に児童期の遊び(外遊びの頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日し

					ている場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能性が高い(p＜0.01)という事が示唆された。
	5．障がい者(こども)のスポーツイベントの普及に向けて	単著	平成 31 年 3 月	日本産業科学学会　研究論叢 24 号 pp.51-56. 査読あり	障がい者スポーツの今後の普及・促進に向け、有効的なイベント・取り組み等を行っていくために重要とされる要素について検討した。障がい者スポーツ施設で実施された、障がい者(こども)のスポーツイベントにおいて 41 名を対象にアンケート調査を実施した。そして、アンケート結果について多角的な観点から考察し、今後の障がい者(子ども)スポーツのイベント開催に向けて、重要な要素と課題について示した。
	6．ニュースポーツであるキンボールスポーツの実践が自律神経活動およびストレスホルモン，口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 6 年 4 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 2023（32）pp.3-6	再掲のため、略
	7.バランス運動を取り入れた遊びが幼児の身体・運動機能に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	日本幼児体育学会　幼児体育学研究(15 巻)1 号 pp.45-51	再掲のため、略
子どもと健康・(旧:幼児体育)	(著書) 1.『子どもの保健と安全』	著書	令和 4 年 2 月	教育情報出版	再掲のため、略
	(学術論文) 1．遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察－年長児を対象に－	共著 (代表)	平成 28 年 4 月	日本幼児体育学会　幼児体育学研究(第8巻)pp.7-13	幼児期の遊びの好みが運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境(都市部と農村部)と体格との関連について考察した論文(原著)である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司
	2．都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児を対象に	共著 (代表)	平成 29 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 14 号)pp.81-84	都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施た。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)

	3. サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共著	令和 30 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 10 巻) pp.101-108. 査読あり	再掲のため、略
	4. 障がい者(こども)のスポーツイベントの普及に向けて	単著	平成 31 年 3 月	日本産業科学学会 研究論叢 第 24 号 pp.51-56. 査読あり	再掲のため、略
	5. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共著 (代表)	平成 31 年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 11 巻第2号) pp.1-7.	大阪市内の短期大学の1年生 236 名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み(外遊び・室内遊び)と、遊びがその後の人格形成(性格・社会性)や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
	6. ニュースポーツであるキンボールスポーツの実践が自律神経活動およびストレスホルモン, 口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 6 年 4 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 2023 (32) pp.3-6	再掲のため、略
	7.バランス運動を取り入れた遊びが幼児の身体・運動機能に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(15 巻)1 号 pp.45-51	再掲のため略
保育内容Ⅰ (健康)	(著書) 1.『保育・教職実践演習 ―わたしを見つめ、求められる保育者になるために―』	共著	平成 29 年 10 月	ミネルヴァ書房 (190 頁)	保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で(保育・教職実践演習の科目において)テキストとして採択されている。 保育内容「健康」の領域について(pp.20-21)担当した。(全頁数 190 頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著)
	2.『生活事例からはじめる－保育内容－健康』	共著	平成 30 年3月	青踏社 (222 頁)	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106(17 頁)を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全 222 頁。(近藤幹夫監修 著者竹安知枝 他)

	3.『子どもの保健と安全』	共著	令和2年3月	教育情報出版(192 頁)	再掲のため、略
	(学術論文) 1. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察－年長児を対象にー	共著(代表)	平成 28 年 4 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻)pp.7-13	再掲のため、略
	2. 都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児を対象に	共著(代表)	平成 29 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 14 号) pp.81-84	再掲のため、略
	3. サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	共著	令和 30 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第10 巻) pp.101-108. 査読あり	再掲のため、略
	4. 障がい者(こども)のスポーツイベントの普及に向けて	単著	平成 31 年 3 月	日本産業科学学会 研究論叢 第 24 号 pp.51-56. 査読あり	再掲のため、略
	5. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	共著(代表)	平成 31 年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第11 巻第2号) pp.1-7.	再掲のため、略
	6. ニュースポーツであるキンボールスポーツの実践が自律神経活動およびストレスホルモン，口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 6 年 4 月	令和 6 年 4 月	再掲のため、略
	7.バランス運動を取り入れた遊びが幼児の身体・運動機能に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	令和 6 年 1 月	再掲のため、略

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1.『子どもの保健と安全』	共著	令和 4 年 2 月	教育情報出版	子どもの心身の健康(生理機能・運動機能の発達など)と保健(病気の予防と手当・感染症対策・保健指導)、安全管理等に関する事柄について記された書籍であり、「子どもの保健」関連科目の大学生用のテキストとして、複数の大学で 2020 年より採用されている。(全 192 頁)第1章3節と第6章1節の計4頁を担当。(高内正子編著、著者 竹安知枝他)
【学術論文】 1. 児童における姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	共著	令和 3 年 4 月	大阪成蹊大学研究紀要第 7 号 P221-225	立つ動作や歩く動作時に必要とされる足趾把持筋力に注目し小学生 20 名の足趾把持筋力と姿勢制御能力の指標である重心動揺性を測定した。その 結果から足趾把持筋力と姿勢制御能力との関連について検討した。この結果より、姿勢制御能力向上のために、足趾把持筋力を強化することが有効であることが示唆された。(松尾貴司・辻慎太郎・永井伸人・織田恵輔・竹安知枝・臼井達矢
2. 女子大学生における低体重と口腔内局所免疫機能との関連	共著	令和 3 年 8 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 2021(30)pp.11-16	女子大学生の低体重と自律神経活動および心理社会的ストレスとの 関連, さらには口腔内局所免疫機能との関連について検討することを目的とした. その結果女子大学生において低体重の場合, 自律神経活動バランスの乱れや心理社会的ストレス の増大に伴い, 口腔内局所免疫機能である唾液 HBD-2 分泌量が低下していることが示された. (臼井達矢・竹安知枝・永井伸人・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
3. 要支援・要介護高齢者の運動機能改善に向けた RedcoRd 運動の効果につい	共著	令和 3 年 12 月	神戸医療福祉大学研究紀要 20 巻(1) pp.41-4	RedcoRd を用いた運動療法が要介護高齢者の運動能力に与える影響について検討した。調査方

てて				法は、41 名の要介護者 41 名を対象に1回 60 分の RedcoRd を用いた運動を週に2回1年間実施した。そして、介入前後に運動機能を評価した結果、この運動は運動機能の改善に効果的であることが示された。(辻慎太郎・織田恵輔・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢・涌井忠昭)
4. オンラインを用いた遠隔コミュニケーションでの会話がストレスホルモンおよび口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 4 年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会 31 巻 p.1-4 査読有り	フレイルの前段階として口腔機能低下(オー ラルフレイル)が見られることから, それらを防ぐことが健康寿命の延伸において重要となる。これまでの知見を基にオーラル フレイル予防に向けた身体活動および地域コミュニティの可能性について要約した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
5.オーラルフレイル予防に向けた身体活動および地域コミュニティの有効性	共著	令和 4 年7月	アレルギーの臨床 42(7) pp.549-552 査読あり	フレイルの前段階として口腔機能低下(オー ラルフレイル)が見られることから, それらを防ぐことが健康寿命の延伸において重要となる。これまでの知見を基にオーラル フレイル予防に向けた身体活動および地域コミュニティの可能性について要約した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
6.大学生におけるオンラインでのコミュニケーションがストレスホルモンに与える影響	共著	令和 4 年8月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 32 巻 査読あり	女子大学生の低体重と自律神経活動および心理社会的ストレスとの 関連, さらには口腔内局所免疫機能との関連について検討することを目的とした. その結果女子大学生において低体重の場合, 自律神経活動バランスの乱れや心理社会的ストレス の増大に伴い, 口腔内局所免疫機能である唾液 HBD-2 分泌量が低下していることが示され た. (臼井達矢・木下美依奈・辻慎太郎・松尾貴司・織田恵輔・竹安知枝・永井伸人)
7.オーラルフレイル予防に向けた身体活動および地域コミュニティの有効性性.Effects of physical activity and communication on oral immunity	共著	令和 4 年 11 月	アレルギーの臨床 42(11) pp.958-961 査読あり	フレイルの前段階として口腔機能低下(オー ラルフレイル)が見られることから, それらを防ぐことが健康寿命の延伸において重要となる。これまでに口腔内局所 免疫に着目し, 身体運動や地域コミュニティ, 健康増進活動の有効性について検討してきた。そこで今回はこれまでの知見を基にオー

				ラル フレイル予防に向けた身体活動および地域コ ミュニティの可能性について記した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
8. シニアテニス選手の運動継続に関わる実態調査	共 著 代表	令和 5 年3月	芦屋大学論叢(第 78 号) pp.159-166 査読あり	テニスに着目し、今後国内のスポーツ発展に向けた手がかりを得ることを目的とし調査した。その結果、今後の我が国における中・高年層のスポーツの発展に向けて、「楽しさ」「健康」「友達・仲間づくり」という要素を重視 し、各種イベントを企画・運営していくことが有効であることを示 唆した。(竹安知枝・青木敦英・ 臼井達矢・織田恵輔)
9. オーラルフレイル予防における身体活動および地域コミュニケーションの有効性	共著	令和 5 年7月	アレルギーの臨床 43(2)	口腔内局所免疫である唾液 HBD-2 に着目し, 運動や身体活動, 地域コミュニティの有効性について, これまでの知見を基にオーラルフレイル予防に向けた身体活動の可能性について要約した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
10.ニュースポーツであるキンボールスポーツの実践が自律神経活動およびストレスホルモン, 口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 6 年 4 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 2023(32)pp.3-6	キンボール(ニュイスポーツ)による実践が自律神経活動とストレスホルモンに与える影響と、口腔内免疫に与える影響について調査し考察した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・徳島実友香・織田恵輔・竹安知枝)
11.バランス運動を取り入れた遊びが幼児の身体・運動機能に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(15 巻)1 号 pp.45-51	バランス運動を取り入れた運動・遊びが幼児の身体と運動機能に与える影響について調査し考察した。 (松尾貴司・永井伸人・辻慎太郎・竹安知枝・織田恵輔・臼井達矢)
12.オーラルフレイル予防に向けた地域レクリエーション, 健康増進活動の可能性	共著	令和 6 年 1 月	Precision Medicine 7 巻 1 号 pp.78-81	地域のレクリエーションや健康増進活動が、オーラルフレイルの予防にどのように影響を与えるかについて調査し考察した。
13.オンラインを用いた遠隔での健康教室が口腔内免疫に与える影響	共著	令和 6 年 1 月	アレルギー臨床 44 巻 1 号 pp.42-45	オンラインによる遠隔での健康教室を実施しすることで、口腔内の免疫機能にどのように影響を与えるかについて調査し考察した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・徳島実友香・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)

14.オーラルフレイル予防に向けたオンラインでの地域健康支援の可能性	共著	令和 6 年 4 月	地域ケアリング 26 巻 6 号 pp.84-87	地域の健康支援に向けて、オーラルフレイル予防に向けたオンラインでの取り組みの可能性について、調査し考察した。(臼井達矢・辻慎太郎。松尾貴司・徳島実友香・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
15.中高齢者における日常生活のストレスと口腔内免疫との関連	共著	令和 6 年 9 月	アレルギー臨床 44 巻 9 号 pp.69-72	中高年者における日常生活のストレスと、口腔内の免疫機能との関連性について調査し考察した。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・徳島実友香・竹安知枝・織田恵輔)
【その他(講演や発表)】 (学会発表)				
1. 女子大学生における低体重と自律神経活動および口腔内局所免疫機能との関連	共著	平成 28 年6月	第 30 回関西臨床スポーツ医・科学研究会	女子大学生の低体重と自律神経活動および心理社会的ストレスとの 関連, さらには口腔内局所免疫機能との関連について検討することを目的とした. その結果女子大学生において低体重の場合, 自律神経活動バランスの乱れや心理社会的ストレス の増大に伴い, 口腔内局所免疫機能である唾液 HBD-2 分泌量が低下していることが示された. (臼井達矢・竹安知枝・永井伸人・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
2. シニアテニス国際大会の参加者における運 動継続に関わる実態調査	共 著 (代 表)	平成 28 年 8 月	日本体力医学会 第 74 回大会 予稿集 p.263.	テニスに着目し、今後国内のスポーツ発展に向けた手がかりを得ることを目的とし調査した。その結果、今後の我が国における中・高年層のスポーツの発展に向けて、「楽しさ」「健康」「友達・仲間づくり」という要素を重視し、各種イベントを企画・運営していくことが有効であることを示唆した。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
3.大学生におけるオンラインでのコミュニケーションが 自律神経活動および口腔内局所免疫に与える影響	共著	令和 4 年8月	教育医学第 68 号 p.103	学生 20 名(平均年齢 21.4±0.49 歳)を対象にオンラインでのコミュニケーションがストレスホルモン、自律神経活動および口腔内局所免疫に与える 影響について検討した。その結果、オンラインでのコミュニケーションは、交感神経活動の抑制、ストレスホルモンの軽減に 有効であり、ストレス負荷に伴う口腔内局所免疫の低下を抑制するのに有効であることが示された。(臼井達矢・木下美依

				奈・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・松尾貴司・織田恵輔）

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 1 日
氏 名 三浦(前川)正樹

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
教育心理学【中等】(単独)	(著書) 1.保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共	令和7年3月	ミネルヴァ書房	5 (408)	保育者をめざす人のための、保育・幼児教育にかんする基本的な人名・事項約 900 項目を収めた用語集。編著者:戸江茂博・隈元泰弘・広岡義之・猪田裕子編著。分担執筆者 63 名。心理検査(ウェクスラー式知能検査、内田・クレペリン精神作業検査)、カウンセリング(カウンセリング・マインド、クライアント、ストレス、適応)動機づけ(内発的動機づけ、外発的動機づけ)、人名(オルポート、クレッチマー、サイモンズ)の項目を担当(三浦正樹)。
	(学術論文等) 1.自我同一性および自己効力感が就職不安に及ぼす影響 ー中日の大学生を比較してー	共	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢、第 85 号 pp. 69-80	11 (12)	本研究は自我同一性と自己効力感が就職不安に及ぼす影響について中国の大学生と日本の大学生を対象として比較し、教育心理学の立場から調査を行い、研究したものである。その結果 4 年生の段階では日中の大学生とも自我同一性が就職不安に関連していて、自我同一性が確立されている者ほど就職不安が低減されることが示された。自我同一性が確立されていればより少ない不安で進路探索や就職活動に積極的に取り組むことが出来ると思われる。著者:陳雨阳、三浦正樹。論文全体を担当。
	2.日中大学生のキャリア形成と就職不安の実態 ー自我同一性地位に着目してー	共	令和7年7月	芦屋大学論叢、第 84 号 pp. 79-90	11 (12)	本研究では日中の大学生に自我同一性地位と就職不安について尋ね、両者の関係を見た。本研究で用いた尺度は、同一性地位尺度と就職不安尺度である。また、就職に関する不安について自由記述で回答してもらった。主な結果として、①就職に対する不安は中国の方が大きいことが示された。

	３．大学生の悩みの種類と対処法－日本と中国を比較して－	共	令和５年７月	芦屋大学論叢、第79号 pp. 113-123	11 (11)	これは就職不安尺度の比較結果と自由記述回答の内容から示されている。②自我同一性地位と就職不安の関係についてみると日中両国とも自我同一性の地位が確立している者の方が就職不安が少ないことが示された。著者:陳雨阳、三浦正樹。論文全体を担当。 本調査は日中の大学生を対象として、悩みの種類、対処法、相談先などについて尋ねたものである。悩みの種類については学業の悩み、人間関係の悩みが中国大学生の方が多かった。これは現在中国では学業への圧力や寮生活が多いことが背景にあると思われる。対処法を比較すると気晴らし方略をとる者は日本の方が多い。一方中国では時の解決を待つ(特に何もしない)という方略が日本より多い。悩みの多さと性格の関係をみたところ、日中で説明変数に違いが見られた。どちらの国でも神経症傾向と悩みの多さは関係していたが、日本では外向性因子が、中国では協調性因子が悩み得点と関係していた。著者:三浦正樹、于躍。論文全体を担当)
	4.感情の言語化についての心理学的考察(5)－心理教育プログラムと感情の言語化－	単	令和3年７月	芦屋大学論叢、第75号 pp. 71-82	12 (12)	筆者はこれまで一連の論文で、感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、教育場面に目を転じると児童生徒の社会性の育成のために感情の言語化と関係深いソーシャルスキルトレーニングや社会性と情動の学習(SEL)などの心理教育プログラムが盛んに行われている。今回の論文では「感情の言語化」の実践例として学校での心理教育プログラムについてみた。まず、心理教育プログラムについてまとめ、それらの中で感情の言語化はどのように取り扱われているか考察した。次に心理教育プログラムの現状や課題、効果の検証などについてまとめた。そして「感情の言語化」の観点からプログラムがより実効性を持つためにどのようにすればいいのか提言を行った。
	５．発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年７月	芦屋大学論叢、第71号 pp. 45-56	6 (12)	発達特性質問紙は、発達障害の４領域(注意欠陥障害、多動性障害、自閉症スペクトラム障害、学習障害)の重複およびスペクトラムを見る質問紙である。これまでに、臨床場面や教育場面で使用してきたが、今回、質問紙としての信頼性、妥当性について検討し

						た。因子分析の結果、4 因子構造が確認された。また信頼性も十分なものであった。論文ではいくつかの事例について検討した。ただし、項目として妥当でないものも見られたため、今後いくつかの項目を見直し、改訂版を作ることが課題となった。 (執筆担当部分:信頼性、妥当性の検討、因子分析について担当) 著者:林知代、三浦正樹)
	6. 感情の言語化についての心理学的考察(4)ー神経心理学の視点からー	単	平成30年3月	芦屋大学論叢、第69号 pp. 77-88	12 (12)	これまで感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、それらについてみる際、神経心理学的視点が必要になってくる。感情の理論はジェームズのはじめから生物学的色彩が濃かったが、近年の脳科学の発展により、かなり詳細なことがわかってきている。感情処理の神経メカニズム、あるいは感情と言語の相互作用のメカニズムについてみた。次に、言語化そのものの神経学的メカニズム解明のため、失語症を手がかりに言語化についてまとめた。さらに、左右半球機能差と言語・感情の関係について神経心理学的にみた。これらを通じて情動処理の認知モデルと神経心理学モデルを関係させながら、感情の言語化について考察した。
	7. 感情の言語化についての心理学的考察(3)ー再び感情心理学の視点からー	単	平成29年7月	芦屋大学論叢、第67号 pp. 35-46	12 (12)	本稿では、感情の言語化について、感情の理論、感情についての著作、最近の感情心理学のトピックから考察した。感情の言語化には、認知的側面から見た情動の情報処理モデル(情動処理モデル)がそのメカニズムの、感情制御研究がその機能・効果の解明に直接関わると思われる。感情の言語化の障害であるアレキシサイミアの神経心理学的仮説として、左右半球の連絡不全説がある。バックの総合理論でも、感情の認知的評価とラベルづけ過程の統合には 2 つの半球の統合が必要であると述べている。感情の言語化についての説明には「情動処理モデル」「神経心理学的感情理論」「左右半球の連絡モデル」が必要になってくるであろう。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

教育心理学【初等】(単独)	(著書) 1.保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共	令和7年3月	ミネルヴァ書房	5 (408)	(再掲のため、略)
	(学術論文等)					
	1.自我同一性および自己効力感が就職不安に及ぼす影響 ー中日の大学生を比較してー	共	令和8年3月	芦屋大学論叢、第85号 pp.	11 (12)	(再掲のため、略)
	2.日中大学生のキャリア形成と就職不安の実態 ー自我同一性地位に着目してー	共	令和7年7月	芦屋大学論叢、第84号 pp. 79-90	11 (12)	(再掲のため、略)
	3. 大学生の悩みの種類と対処法 ー日本と中国を比較してー	共	令和5年7月	芦屋大学論叢、第79号 pp. 113-123	11 (11)	(再掲のため、略)
	4.感情の言語化についての心理学的考察(5)ー心理教育プログラムと感情の言語化ー	単	令和3年7月	芦屋大学論叢、第75号 pp. 71-82	12 (12)	(再掲のため、略)
	5. 発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年7月	芦屋大学論叢、第71号 pp. 45-56	6 (12)	(再掲のため、略)
	6.感情の言語化についての心理学的考察(4)ー神経心理学の視点からー	単	平成30年3月	芦屋大学論叢、第69号 pp. 77-88	12 (12)	(再掲のため、略)
	7.感情の言語化についての心理学的考察(3)ー再び感情心理学の視点からー	単	平成29年7月	芦屋大学論叢、第67号 pp. 35-46	12 (12)	(再掲のため、略)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　伊藤 武徳

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
学校安全及び救急法	(学術論文) 1. 芦屋大学学生を対象にした「熱中症」に関する調査	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 第 74 号	10	本研究では、本学学生を対象とした熱中症についての意識調査を行い、1992 年の大学生を対象とした熱中症についての調査結果と比較するとともに、本学学生の熱中症に関する知識等の習得状況を確認し、本学における熱中症対策の課題を探り今後の指導における基礎的資料の収集を目的とした。得られた結果は以下の通りである。 (1)本学学生のほとんどが熱中症教育を受けていたが、その一方で熱中症になった経験があると回答した学生も 34%いた事から、熱中症の予防知識を実際に活かすようにすることが必要であると考えられた。 (2)熱中症の予防に関して基本的な知識の習得は伺えたが、暑熱順化などの知識が理解されていない可能性があると考えられた。 (3)暑熱環境下でのスポーツ対策について学生が熱中症の危険性について自主的に判断できるような指導体制が必要であると考えられた。 今後以上のことを踏まえ、本学での熱中症予防についてのより深い理解を学生に促す指導の必要性が示唆された。 著者:伊藤武徳
	2. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	(抽出不可) (10)	本研究は、芦屋大学の運動部に所属する学生200 名を対象に、スポーツ傷害の発生状況について種目または男女の性差が影響しているのかについて分析・検討をした。本学では教育学科にて、保健体育科の教員免許が取得できるだけでなく、スポーツ指導の資格について取得できる課程を整

						えているが、これら傷害の発生状況に関する知見を学生に還元することが最も重要である。専門外種目における傷害の知識や経験の把握。種目によって異なるスポーツ指導の安全上の留意点。これらの点を踏まえて、様々な種目についてのスポーツ指導ができる指導者を養成するという目的に調査を行った。得られた結果は以下の通りである。 1．スポーツ傷害の経験が 80%以上の学生あること。さらに小学校時から高校時にかけてスポーツ傷害の受傷割合が増加する傾向を示した。 2．球技系種目と格闘技系種目でのスポーツ傷害の内容を比較し、格闘技系種目では骨折、腱・靭帯損傷といった重傷な傷害の発生割合が球技系種目と比べて高くなっている傾向を示した。 3．男女別にスポーツ傷害の内容について比較したところ、男子の方が女子よりも骨折の割合が高く、女子では男子よりも捻挫の割合が高くなっていたが、受傷部位については大きな男女差はみられなかった。 今後の本研究で得られたスポーツ傷害の知見について詳細なデータを収集するとともに、スポーツ指導者を目指す学生に対して、少しでもスポーツ傷害の発生を防ぐこと、また練習時間や運動頻度などに留意してスポーツの指導に当たることを指導していくことが必要である。 著者：伊藤武徳、西光哲治、金相煥、別當和香、武田光平、石川峻、番平守、青木敦英（計 8 名）
武道B 剣道	（学術論文） 1．コロナ禍の部活動自粛による，競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	（抽出不可） (10)	本稿では本学の部活動禁止措置による長期間の部活動停止状況が、運動部所属学生の部活動へのモチベーションや自主トレーニングに、どのような影響を与えているのか調査を実施した。そしてこの分析結果から、長期間の部活動の活動停止においても選手個人の競技へのモチベーションやパフォーマンスに有用な対策を講じるための一助とすることを本研究の目的とした。

	2. 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢 第 67 号	(抽出不可)(12)	現代社会では、高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている。このような社会をより良く生き抜くためには、個々が内面的な充実感を高め、生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考える。本研究では、2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討をおこおない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後のの授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。 著者:西光哲治、金相煥、別當和香、 伊藤武徳、武田光平
	【教育実践記録等】 1.剣道の打突向上について～振り上げ動作の意識に関する指導法の一考察～	単	令和元年 5 月	日本産業科学学会関西部会	5	本研究では、剣道の振り上げ動作時に力みのある起こり(隙に繋がる)がある本学学生を対象に、異なるサイズのボールを活用しスムーズな振り上げ動作意識を構築する目的として調査を実施し た。そしてこの結果から、適度な柔軟さを保持しながら肘屈曲を可能にするには、テニスボール程度のサイズ・弾力が振り上げ動作と類似性があり、スムーズな振り上げ動作を意識させる指導場面での一助となることが考えられた。著者:伊藤武徳

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文) 1. 芦屋大学学生を対象にした「熱中症」に関する調査	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	(再掲のため、略)
2. 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	(再掲のため、略)
3. コロナ禍の部活動自粛による, 競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	(再掲のため、略)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

4. 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢第 67 号	(再掲のため、略)
【教育実践記録等】 1. 剣道の打突向上について ～振り上げ動作の意識に関する指導法の一考察一	単	平成 30 年 3 月	日本産業科学学会関西部会	(再掲のため、略)
【その他(講演や発表)】 1. 剣道の魅力・楽しさを伝える効果的な方法	単	令和 3 年 8 月	令和 3 年度 教員免許更新講習(芦屋大学)	前半は武道という素材を、授業で扱う教材に再構成する際のポイントを、武道の歴史や競技特性と関連付けながら解説した。後半は、武道における対人動作と簡易教材を使用して受講者に体験してもらった。
2. 武道(剣道)の効果的な指導	単	令和 2 年 8 月	令和 2 年度 教員免許更新講習(芦屋大学)	前半は武道の中で剣道を例にとり、初心者や苦手な児童、生徒でも取り組みやすい授業展開の工夫について解説した。後半は、を受講者に体験してもらった。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　西 光 哲 治

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
スポーツ演習Ⅳ(護身術・スポーツチャンバラ)	(学術論文) 1.格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」	共	平成26 年8 月	日本産業科学学会全国大会	10	格技は近世に入り欧米ではスポーツとして確立し身体能力を科学的に研究するという分野に着目し指導法と技術開発が成されてきた。しかし、我が国の格技は武道という精神文化が先行し、根性論や各指導者経験値から判断されてきた。そこで本研究は格技の技術の中で最初に指導される『撃ち技』で、『拳の撃ち出し速度』を生むために技術研究してきたことを実験検証のもと科学的論証行うことで今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
武道論2	(学術論文) 1.格技・日本拳法の指導技術研究論(その 2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者で比較し指導方法と技術解説の確立	共	平成 27 年 8 月	日本産業科学学会全国大会	6	前号(その 1)で「拳の撃ち出し速度」を上げるための技術について考察・検証し、指導方法を確立するための研究であった。我々が考察した指導方法を格技未経験者対象に検証を行った所、予想以上に拳の速さを生み出す結果が得られた。そこで本稿では、格技(ボクシング・空手・日本拳法)を対象として未経験者と同様の検証を行い、どのような結果が得られるかを知ることにより今後のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立つ知見を得ることを目的とした。
水泳実習(前期)及びスキー実習(後期)	(学術論文) 1.芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年7月	芦屋大学論叢第 67 号	8	近年、4 年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27 年度)からも年齢階級別で 20 歳代の運動習慣が最も低い割合となっており大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを

						目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学 1 年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は 2011 年から 2014 年の新体力ﾃｽﾄの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。
水泳実習(前期)及びスキー実習(後期)	(学術論文) 1.芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢 第 76 号		芦屋大学においては運動部所属学生の割合は多く、関西地区では上位を争う部活動もあり運動部の活動は盛んであるが、これまでに傷害発生状況についての調査がなされたことはない。そこで本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷に着目しスポーツ傷害の発生状況について調査を行い、クラブ活動での安全な指導や今後のスポーツ指導者を目指す学生への資料として゜と活用することを目的とした。

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1.芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について	共	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢 第 67 号	近年、4 年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27 年度)からも年齢階級別で 20 歳代の運動習慣が最も低い割合となっており大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学 1 年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は 2011 年から 2014 年の新体力ﾃｽﾄの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

【学術論文】 1.芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢 第 67 号	芦屋大学においては運動部所属学生の割合は多く、関西地区では上位を争う部活動もあり運動部の活動は盛んであるが、これまでに傷害発生状況についての調査がなされたことはない。そこで本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷に着目しスポーツ傷害の発生状況について調査を行い、クラブ活動での安全な指導や今後のスポーツ指導者を目指す学生への資料として、活用することを目的とした。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和　8年　5月　20日
氏 名　浅井 麻里

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
体育実技B	(研究資料) 1. A県中学校におけるダンス授業の実施調査(2020年)	共	令和3年3月	(公社)日本女子体育連盟学術研究(研究資料) 第37巻	(抽出不可) (9)	(茨城県小学校における表現運動授業の実態について執筆) 著者:寺山由美、河合史菜、屋代澪、金浦美咲、浅井麻里
	(研究報告) 1. 小学校における「表現運動」の学習を活かし、集団演技につなげる事例研究―体育授業から運動会、そして舞台発表へ―	共	令和7年3月	中京大学体育研究所紀要(研究報告) 第39巻	2(7)	著者:和光理奈、浅井麻里
	(学術論文) 1. 児童期の表現運動プログラムの検討―児童の発想を促す教材の工夫―	共	令和7年3月	中京大学教師教育論叢 第14巻	4(9)	著者:和光理奈、浅井麻里

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
【著書】				
【学術論文】 1. 「何かになる表現」における定型的な身体表現と自分なりの身体表現―身体表現があらわれるまでの内部過程に着目して―	共著	令和6年3月	(公社)日本女子体育連盟学術研究(原著論文)第40巻	17頁 著者:村瀬瑠美、浅井麻里
2. Individual physical expression from onomatopoeia in young Japanese children: the process from movements to images	共著	令和8年1月	Early Years: An International Journal of Research & Development	16頁 著者:村瀬瑠美、浅井麻里

【その他（講演や発表）】				

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 1 日

氏 名　武田 光平

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
武道 A (単独)	(学術論文等) 1 学校における柔道教育の在り方-体重の違いに着目して-	単著	令和 3 年 3 月	芦屋大学大学院修士論文	47 (47)	本研究では、学校における柔道指導の在り方を探るために、武道及び柔道教育の変遷について文献研究をおこなった。さらに学校管理下における柔道事故について分析を加え、柔道指導の安全性について明らかにした。また、柔道授業の指導経験者にインタビュー調査を行い、柔道授業の指導の現状についても明らかにした。そして、これらの文献研究、統計分析、調査から得られた知見をまとめ、柔道教育のあるべき姿について考察しまとめた。
	2 学校における柔道教育の在り方-安全性の問題に着目して-	共著	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢 第 76 号	9 (9)	武道必修化後も柔道事故が発生し続けており、武道では環境の整備と指導教員の養成、安全への配慮といったところに多く問題を抱えている。本研究では、学校における柔道教育の在り方を探るために、2014～2018 年の「中学校、高等学校における柔道の授業及び部活動の疾患を除く負傷事故に関するデータ」を元に統計分析を行い、そこから得られた知見から、新たな教材や指導方法の作成とその実践のための一助を示した。本人担当部分:立案、調査、分析、論文作成 共著者:武田光平、三浦正樹
スポーツ指導演習 B (武道型)(複数)	(学術論文等) 1 学校における柔道教育の在り方-体重の違いに着目して-	単著	令和 3 年 3 月	芦屋大学大学院修士論文	47 (47)	(再掲のため、略)
	2 学校における柔道教育の在り方-安全性の問題に着目して-	共著	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢 第 76 号	9 (9)	(再掲のため、略)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1 学校における柔道教育の在り方-体重の違いに着目して-	単著	令和 3 年 3 月	芦屋大学大学院修士論文	(再掲のため、略)
2 コロナ禍の部活動自粛による,競技に対するモチベーションへの影響に関する一考察	共著	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢　第75号 P.41～P.50	本研究では、コロナウイルス感染症に伴う、部活動停止期間が,運動部学生のモチベーションや自主トレーニングへの影響について,アンケート調査から得た自由記述回答についてテキストマイニング分析を実施した。その結果から,モチベーション維持ならびに自主トレーニングの有用な対策を検討するための一助を示した。 本人担当部分:立案、調査、分析、論文作成 共著者:武田光平、別當和香、伊藤武徳、金相煥、番平守、石川峻
3 学校における柔道教育の在り方-安全性の問題に着目して-	共著	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢　第76号 P.83～P.92	(再掲のため、略)
4 芦屋大学運動部所属学生のスポーツ傷害・外傷の発生に関する調査	共著	令和 4 年 3 月 24 日	芦屋大学論叢　第76号 P.21～P.29	本研究は芦屋大学の運動部に所属する学生の外傷やスポーツ障害の発生状況について調査し、今後のスポーツ指導の資料として活用することを目的とした。今後の部活動において本研究で得られた知見を生かして、少しでもスポーツ傷害の発生を防ぐこと、また練習時間や運動頻度などに留意してスポーツの指導に当たることが期待される。 本人担当部分:調査 共著者:伊藤武徳、西光哲治、金相煥、別當和香、武田光平、石川峻、青木敦英
5 コロナ禍における部活動自粛による体組織への影響	共著	令和 5 年 8 月 31 日	兵庫体育・スポーツ科学学会誌「体育・スポーツ科学」第 32 号 P.1～P.9	本研究では、COVID-19 に伴う、部活動禁止措置が大学柔道部員の身体に与えた影響ついて活動自粛前後の体組織の変化から明らかにすることを目的とした. また, 活動自粛中に部員個人が実施した筋力や体力の維持もしくは増進の為の行動を調査した. また, 体組織の変化差との関連に

6 研究資料)COVID-19 による大学生の健康意識と行動の変化に関する調査	単著	令和 7 年 3 月	日本運動・スポーツ科学学会「運動とスポーツの科学」第 30 巻 第 2 号 P.141～P.151	ついても調査し，自粛時に身体能力の低下を抑制するための適切な取り組みについて検討した。 本人担当部分:立案、調査、分析、論文作成 共著者:武田光平、三浦正樹 本研究では、COVID-19 による大学生の健康意識と行動の変化及び大学生の健康教育のあり方について検討することを目的とし，COVID-19 流行以前の大学生の健康意識と行動に関する先行研究との比較及び、学生がとらえている健康行動について調査を実施した.
【その他(講演や発表)】 1(発表)中学校・高等学校における柔道事故の現状 2	共著	令和 3 年 6 月 5 日	第 32 回兵庫体育・スポーツ科学学会	本研究では、柔道負傷事故の現状について明らかにすることを目的とし、中学校、高等学校における柔道の授業及び部活動の疾患を除く負傷事故件数を対象に分析をおこなった。その結果から、柔道事故の原因や特徴について明らかにした。 本人担当部分:立案、調査、分析、作成、発表 著者:武田光平　三浦正樹

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8年 4月 22日

氏 名 萩原 隆太

担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
日本国憲法(単独)	(著書) 香港の過去・現在・未来	共	令和元年6月	勉誠出版		本論文は、2016年に香港で発生した立法会選挙における出馬資格の剥奪やその後の就任宣誓にまつわる就任資格の剥奪、いわゆる「DQ風波」を題材に、中央政府の対香港政策について検討したものである。そこでは、中央政府の民主化に対する強硬姿勢の下、香港の核心的理念とも言える「法治」に中国的な「依法治国」の法概念が浸透するという、新たな変化を明示するとともに、香港の立憲主義への中国法的価値観の浸透を指摘した。 担当範囲:「香港における依法治国の浸透ー『参選風波』事件をめぐって」 共著者:倉田徹(編著者)、曽根康雄、萩原隆太他16名
	(学術論文等) 香港における社会運動と法の関係 :逃亡犯条例改正反対デモを手がかりに	単	令和2年2月	中国研究月報第75巻 第2号		本論文では、香港における社会運動と法の関係について、2019 年に発生した「逃亡犯条例改正反対デモ」の検討を通じて明らかにした。そこでは、抗議活動に対する行政・司法による制約・統制の強化を明らかにするとともに、「示威の自由」に関する日・香港比較を行い、憲法における「示威の自由」の意義と位置付けを明らかにした。
	Key Challenges facing the rule of law in Hong Kong	単	令和2年6月	Social Transformation in Chinese Societies vol.18 No.1.		本論文では、植民地香港と返還後香港の法制度とその実践を比較検討し、香港で謳われてきた「法治」の様相の変化を明らかにした。そこでは、現在追求されている香港のあるべき「法治」が「(中国共産)党の指導」を絶対とし、その下で「法と秩序 Law and Order」型の治安維持を徹底的に行うとする、中国で言うところの「法治(依法治国)」なのだ、ということを明らかにするとともに、比較憲法学的観点から、現代社会におけ

						る「法の支配」の意義を検討した。 本論文は、返還後の香港において核心的価値とされてきた「民主」「法治」といった英米法由来の法概念の受容と変容の過程を詳細に分析し、その現代における意味を明らかにしたものである。 2020 年の香港国家安全維持法の導入によって、治安維持と遵法精神を重視する中国式の法治、すなわち「依法治国」が重視される一方、「自由」やそれを下支えする「法治」概念の普遍性そのものが揺らぎつつあることを憲法学的視点から指摘した。
	香港司法・社会の視点から－国安法の下での自由と法治		令和3年2月	比較法研究第83号		
法律学概論Ⅰ Ⅱ (単独)	(著書) 香港と「中国化」:受容・摩擦・抵抗の構造	共	令和2年6月	明石書店	19	本論文では、2019年の抗議活動や2020年に制定された香港国家安全維持法を題材に、極度に政治化された香港社会による司法への批判の増大といった背景に着目し、香港の司法と社会にもたらされた緊張と対立の構造について明らかにした。本稿は、制度・法規の変容に加え、人々の法意識の変容にまで言及しており、法社会学的視点をも含むものである。 担当範囲:第5章(「香港における法治の様相:『司法の政治化』をめぐって」 共著者:倉田徹(編著者)、小栗宏太(編著者)、萩原隆太他10名
	(学術論文等) 香港における社会運動と法の関係 :逃亡犯条例改正反対デモを手がかりに	単	令和2年2月	中国研究月報第75巻 第2号	19	本論文では、香港における社会運動と法の関係について、2019 年に発生した「逃亡犯条例改正反対デモ」の検討を通じて明らかにした。そこでは、抗議活動に対する行政・司法による制約・統制の強化を明らかにするとともに、外国法の基礎的理解のフレームワークを明示し、概念法学・解釈法学的アプローチに基づき香港における社会運動の法的側面の問題点を指摘した。
	Key Challenges facing the rule of law in Hong Kong	単	令和2年6月	Social Transformation in Chinese Societies vol.18 No.1.	16	(再掲のため、略。)
	香港司法・社会の視点から－国安法	単	令和3年2月	比較法研究第83号	8	(再掲のため、略。)

	の下での自由と法治					
国際法Ⅰ(単独)	(著書) 香港と「中国化」:受容・摩擦・抵抗の構造	共	令和3年2月	明石書店	19	(再掲のため、略。)
	(学術論文等) 香港における社会運動と法の関係 :逃亡犯条例改正反対デモを手がかりに	単	令和2年6月	中国研究月報第75巻 第2号	19	本論文では、香港における社会運動と法の関係について、2019 年に発生した「逃亡犯条例改正反対デモ」の検討を通じて明らかにした。そこでは、抗議活動に対する行政・司法による制約・統制の強化を明らかにするとともに、抗議活動の端緒となった香港内での「逃亡犯条例」改正の動きとそれに伴う香港対諸外国の国際刑事司法協助の枠組みの変容について指摘した。
	香港司法・社会の視点から－国安法の下での自由と法治	単	令和3年2月	比較法研究第83号	7	本論文は、返還後の香港において核心的価値とされてきた「民主」「法治」といった英米法由来の法概念の受容と変容の過程を詳細に分析し、その現代における意味を明らかにしたものである。2020年の香港国家安全維持法の導入によって、香港における核心的価値は消失へと向かい、治安維持と遵法精神を重視する中国式の法治、すなわち「依法治国」といった概念への変容が明らかとなった。上述の検討をもとに、国際(慣習)法上の法的義務履行に関する中国・香港の外交姿勢および理論形成について解明した。
	国安法施行 3 年:香港における司法への影響	単	令和 3 年 8 月	東亜第 674 号	8	本論文では、香港国家安全維持法(以下、国安法)の施行状況を概観し、司法面にもたらされた国安法の影響について検討した。そこでは、①曖昧な犯罪定義と量刑、②保釈の厳格化、③裁判官の指定と外国籍裁判官の辞職、④陪審審理の除外、⑤裁判の非公開、⑥北京政府主導による国安法の解釈、⑦域外適用、⑧公職資格の制限、⑨国家安全教育の強化といった制定当初から懸念された問題の検討から、刑事手続上の無罪推定及び公正な裁判を受ける権利への侵害といった点が明らかとなった。以上の状況から、国際慣習法の義務履行をめぐる中国香港対欧米の対立

						構造と香港における教育行政の課題について解明した。

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 香港と「中国化」:受容・摩擦・抵抗の構造	共著	2022 年 3 月	明石書店 第 5 章『香港における法治の様相:「司法の政治化」をめぐって』(PP. 116-134)	倉田徹・小栗宏太(編著)、曽根康雄、萩原隆太他 10 名
【学術論文】 1 Key Challenges facing the rule of law in Hong Kong. (査読付)	単著	2021 年 6 月	Social Transformation in Chinese Societies vol. 18 No. 1. (PP. 88-103)	Ryuta Hagiwara.
2 香港司法・社会の視点から－国安法の下での自由と法治 (査読付)	単著	2023 年 2 月	比較法研究第 83 号 (PP. 149-155)	萩原隆太
3 国安法施行 3 年 : 香港における司法への影響	単著	2023 年 8 月	東亜第 674 号 (PP. 18-25)	萩原隆太
1 香港国家安全維持法下における『法治』の姿:香港司法・社会の観点から	-	2022 年 6 月	比較法学会:第 85 回総会シンポジウムセッション(一橋大学)	萩原隆太
2 返還 25 年目の香港研究:法からみる統制と摩擦の諸相		2022 年 10 月	日本本現代中国学会:第 72 回全国学術大会シンポジウムセッション(立教大学)	萩原隆太
3 Does the Rule of Law create happiness: The relation between Society and Judiciary in Hong Kong.		2024 年 12 月	The GASP-EES International Symposium (Tohoku University)	Ryuta Hagiwara.
4 香港的司法與社會: 普遍價值與國家安全的兩難境地		2024 年 12 月	香港研究研討會「新形勢下的全球香港研究」(立教大學)	萩原隆太
5 「国家安全」と「法治」の交錯:2026 年「香港国家安全白書」が示すもの		2026 年 5 月	日本現代中国学会:第 70 回全国学術大会(明治大学)	萩原隆太

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4月 1 日

氏 名　　石田(住本)愛子

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
器楽 Ⅰ Ⅱ	(著書) 1. 大学生活入門 ～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版	6 (75)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のための、大学生活の心構え、一般教養、実習関連、免許状取得までのプロセスについてまとめた指南書。(執筆担当部分:Ⅰ心構え、Ⅲ実習に向けて)第Ⅲ章において、ピアノ実技についてどのような事前準備が必要か、楽譜の取扱いや選曲のポイントなどを解説した。 著者:笠原清次、渡康彦、石田愛子(編著)、竹安知枝、他、全 11 名
	(教育実践記録等) 1.《研究ノート》 学生の主体的な学びを支える指導 ーピアノ個別指導の場合ー	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	(抽出不可) (10)	ピアノ演奏実技の習得には日々の練習が不可欠であり、教員免許取得希望学生には授業時間外の主体的な練習が求められる。ピアノ学習経験が乏しい学生に対して、主体的な取り組みを促すには何が必要か、どのような指導が効果的か。「器楽」履修学生の実態と、「器楽」担当教員 7 名による指導の工夫、日々の具体的な指導方法や学生とのコミュニケーションの取り方について紹介し、望ましい個別指導のあり方について考察した。 著者:石田愛子、稲葉修子、井上邦子、岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三宅澄子
	2.《実践報告》 オンデマンドによるピアノ実技指導の試みーLMS「Pholly」を用いてー	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	8 (10)	コロナ禍における教職課程のピアノ実技指導として、動画によるオンデマンドレッスンを総括し、その効果と問題点を考察した。隔週での対面レッスンと併用とした場合との比較、学生の意識調査等を通して、学生の主体的な取り組みを促す点において、動画のやりとりによるオンデマンドレッスンにも一定の効果が期待できることが確認された。しかし、対面でなければ指導が難しいケースも多く、特に初心者に対しては、初期段階での対面指導が非常に重要であることが明らかになった。(執筆担当部分:第 1、2、4～6 章) 著者:石田愛子、稲葉修子、岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三宅澄子
	3.《研究ノート》 グループレッスンと個人レッスンを併用	単	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第 85 号	12	ピアノ実技は大学入学前の学習経験の有無による個人差が大きいことから,個人レッスンが最も望ましいと考えられ

	したピアノ実技指導の試み					るが，2025 年度，グループレッスンと個人レッスンの併用を試みた「器楽Ⅰ」「器楽Ⅲ」「器楽Ⅱ」において履修学生を対象にアンケート調査を実施した結果，学生の満足度，到達度ともに一定の成果が認められた。ピアノ実技指導において，適正な人数のクラスであれば，グループレッスンと個人レッスンの併用は，それぞれのメリットを活かし，デメリットを補完し合うことができることが示された。
初等教科教育法Ⅵ(音楽)	(学術論文) 1．小学校音楽科指導のための「望ましい範唱」についての一考察－歌唱共通教材における実践を通して－	単	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	10	小学校で音楽の授業を行う際、教師による範唱や範奏は欠かせない。令和5年度の「初等教科教育法(音楽)」で試みた歌唱共通教材の「正確な歌唱」と「表現の工夫」のための実践を通して、「望ましい範唱」のあり方について考察した。自らの練習の目的や方法、手順を知ることは、指導法を理解することにつながること、また、その過程で、子どもたちに伝えたいことについて明確な思いや意図を持つこと、よりよく歌うための具体的な方法を言語化すること、曲のよさを感じ、生き生きと表現できるようになることが、「望ましい範唱」につながることが示唆された。
保育内容Ⅵ(表現-音楽リズム)	(著書) 1.大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版	6 (75)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1．幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	8 (11)	鍵盤ハーモニカは、鍵盤により音高や音階を視覚的に把握・理解しやすく、気鳴楽器であるため歌の呼吸を活かして演奏でき、複数の音を同時に鳴らすことができるため和音を演奏できるなど、器楽の導入に適した特長を多く備えている。本稿では、芦屋大学附属幼稚園での実践を通して、年長児が鍵盤の並び方の規則性や、息を吹き込むことで音が鳴る仕組みに気づく過程、身の回りの音を自分なりに表現したり工夫したりして楽しむ姿を、鍵盤ハーモニカによる「豊かな感性と表現」の育ちについて考察した。(執筆担当部分:第 1、3～5 章) 著者:石田愛子、安藝雅美
	2．幼稚園における課外活動についての一考察－鍵盤ハーモニカ指導の場合－	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	8 (11)	芦屋大学附属幼稚園での鍵盤ハーモニカ指導について2019年と2020年の実践結果を比較し、変更点である教材の選び方や指導の工夫、外部講師と幼稚園教員の連携、課外活動と日常の保育の関連づけ等について効果を検証した。息のコントロールによる強弱の変化に気づくこ

						とで、遠くの音・近くの音などイメージがより豊かになり、あそびを通して変化を聞き取る力、自分なりに工夫して音を表現しようとする力が養われた。また、子どもたちが日常的に楽器に親しむようになったことも示された。(執筆担当部分:第1、3〜6章) 著者:石田愛子、安藝雅美
	3. 保育における「劇あそび」に関する一考察ー劇のための音楽づくりに着目してー	共	令和6年7月	芦屋大学論叢第82号	5 (11)	「劇あそび」は、子どもたちが主体的に取り組む表現活動の集大成として、多くの幼稚園で実施されている。「劇あそび」は幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿、保育5領域と深く関わっている。202X年度 N 幼稚園における「劇あそび」の実践例を通じ、指導のプロセス、音楽づくり、音楽表現の工夫、「劇あそび」における音楽の役割と効果について考察し、保育者には「観察力」「応用力」「表現力」が求められることを明らかにした。(全体構想、執筆担当部分:第1、2、4、5章) 著者:稲葉修子、石田愛子、薬谷佳苗
	(教育実践記録等) 1.《授業実践》 実践的な音楽力を養うために ー「保育内容Ⅵ(表現-音楽リズム)」での試みー	単	平成29年12月	芦屋大学論叢第68号	11	子どもは、歌を歌ったりリズムに合わせて身体を動かしたりすることを通して、ことばを覚え、リズム感を養い、季節や行事への興味や関心を持ち、イメージをふくらませ、友だちとの一体感を味わう。幼児の「表現」活動は、言葉や環境、人間関係や健康といった領域にも密接に関連していることを踏まえ、子どもたちの音楽表現活動を豊かにするために保育者に求められる音楽スキル、季節や行事にふさわしい歌と関連づけられる製作やあそびの融合と模擬保育を実践し、本学学生の到達度と実態, 課題と今後の指導のあり方について考察した。
	2.《研究ノート》 子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力についてー幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通してー	共	令和5年3月	芦屋大学論叢第78号	8 (11)	子どもたちの「表現」活動を支える保育者には、ピアノ演奏だけでなく「歌うこと」、それも子どもと共にという視点を持ち、子どもが表現したいという気持ちを援助、指導していく能力が求められる。本学学生が幼稚園教育実習においてどのような学びを得てきたかを把握することにより、子どもたちの感情を豊かにする「歌」と「歌の伴奏」についての指導方針を明確にし、子どもたちの活動を導き出す「リズム活動のピアノ」を習得するための具体的な指導法を提案した。(執筆担当部分:第1〜3、5章) 著者:石田愛子、稲葉修子、薬谷佳苗

子ども音楽	(著書) 1.大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版	6 (75)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－	共	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢第 71 号	8 (11)	(再掲のため、略)
	2. 幼稚園における課外活動についての一考察－鍵盤ハーモニカ指導の場合－	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	8 (11)	(再掲のため、略)
	3. 保育における「劇あそび」に関する一考察－劇のための音楽づくりに着目して－	共	令和 6 年 7 月	芦屋大学論叢第 82 号	5 (11)	(再掲のため、略)
	(教育実践記録等) 1.《授業実践》 実践的な音楽力を養うために －「保育内容Ⅵ(表現-音楽リズム)」での試み－	単	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	11	(再掲のため、略)
	2.《研究ノート》 子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力について －幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通して－	共	令和 5 年 3 月	芦屋大学論叢第 78 号	8 (11)	(再掲のため、略)

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1. 小学校音楽科指導のための「望ましい範唱」についての一考察－歌唱共通教材における実践を通して－	単	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	(再掲のため、略)

2.保育における「劇あそび」に関する一考察－劇のための音楽づくりに着目して－	共	令和 6 年 7 月	芦屋大学論叢第 82 号	(再掲のため、略)
【教育実践記録等】 1.《実践報告》 オンデマンドによるピアノ実技指導の試み － LMS「Pholly」を用いて－	共	令和 3 年 7 月	芦屋大学論叢第 75 号	(再掲のため、略)
2.《研究ノート》 子どもの「表現」活動を支える保育者の音楽力について－幼稚園教育実習後の学生アンケートと指導法の検討を通して－	共	令和 5 年 3 月	芦屋大学論叢第 78 号	(再掲のため、略)
3.《研究ノート》 グループレッスンと個人レッスンを併用したピアノ実技指導の試み	単	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第 85 号	(再掲のため、略)
【その他(講演や発表)】 (演奏会、学会等における演奏)				
1. 第 43 回北区母親コーラスジョイントコンサート	共	令和 4 年 9 月	すずらんホール	女声コーラスの伴奏ピアニストとして出演。
2. 藤原台コール・カリヨン 36 周年記念コンサート	共	令和 4 年 11 月	ありまホール	女声コーラス「藤原台コール・カリヨン」36 周年記念コンサートにおいて全プログラムのピアノを担当。第 3 部ではソプラノ独唱の伴奏のほか、メンデルスゾーン、ショパンを独奏。企画・演出にも参画した。 出演者:藤原台コール・カリヨン、島村泰子(指揮、ソプラノ)、石田愛子(ピアノ)
3. 第 60 回モーヴ・ガレット交歓会	共	令和 4 年 12 月	神戸文化ホール中ホール	女声コーラスの伴奏ピアニストとして出演。
4. クリスマスコンサート Vol.12	共	令和 4 年 12 月	ありまホール	女声コーラスの伴奏ピアニストとして出演。
5. ザ・ハープシコード・カンパニー コンサート No.24	共	令和 5 年 3 月	川西市みつなかホール文化サロン	ザ・ハープシコード・カンパニー第 24 回コンサートで、デュフリ《クラヴサン曲集》より〈La de Belombre〉〈La de Vaucanson〉〈La Pothouin〉を独奏。曲目解説も執筆した。 出演者:石田愛子(チェンバロ)、ほか 10 名
6. 第 44 回北区母親コーラスジョイントコンサート	共	令和 5 年 7 月	すずらんホール	女声コーラスの伴奏ピアニストとして出演。
7. 全国大学音楽教育学会関西地区学会「設立 40 周年記念演奏会」	共	令和 6 年 3 月	全国大学音楽教育学会関西地区学会主催、兵庫県立芸術文化セン	全国大学音楽教育学会関西地区学会「設立 40 周年記念演奏会」において、ショパン《ノクターン第 8 番》を演奏した。

			ター神戸女学院小ホール	出演者:石田愛子(ピアノ)、ほか25名
8. ザ・ハープシコード・カンパニー コンサートNo.25	共	令和6年4月	豊中市立文化芸術センター多目的室	ザ・ハープシコード・カンパニー第25回コンサートで、バッハ《パルティータ第5番》を独奏。曲目解説も執筆した。 出演者:石田愛子(チェンバロ)、ほか13名
9. 島村泰子リサイタル～小さな歌曲とお話～	共	令和6年10月	ベジキッチンとんこ	ソプラノ独唱による日本歌曲の伴奏のほか、チャイコフスキー《四季》より〈五月の夜〉〈秋の歌〉を独奏した。出演者:島村泰子(ソプラノ)、石田愛子(ピアノ)
10. 第49回三田市合唱祭	共	令和6年11月	三田市合唱連盟主催、郷の音ホール大ホール	女声コーラスの伴奏ピアニストとして出演。
11. 藤原台コール・カリヨン39周年コンサート	共	令和7年6月	ありまホール	女声コーラス「藤原台コール・カリヨン」39周年コンサートにおいて全プログラムのピアノを担当。第3部ではソプラノ独唱による日本歌曲の伴奏のほか、メインプログラム「女の愛と生涯」(合唱編曲版)に関連づけたシューマンのピアノ曲を独奏。企画・演出にも参画した。 出演者:藤原台コール・カリヨン、島村泰子(指揮、ソプラノ)、石田愛子(ピアノ)
12.全国大学音楽教育学会関西地区学会 令和7年度前期研究会	単	令和7年9月	大阪キリスト教短期大学講堂	シューマンの歌曲「献呈」の原曲と、リストによるピアノ編曲版の「献呈」を比較、研究演奏発表を行った。 共演者:桐山由香(ソプラノ)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 23 日
氏 名　大谷 彰子

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
子どもと人間関係(単独)	(著書) 1.『新しい幼児教育方法・指導法』第2版	共	令和4年12月	ミネルヴァ書房	6 (197)	(再掲) 学生や保育者を対象にした幼児の教育方法についてのテキストである。 子どもが、遊びを通して自己と他者の違いに気づき、友達とのかかわりの中で、思いやりや自立、自律を学んでいけるような援助や保育方法について解説している。
	2.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和4年4月	北大路書房	12 (169)	(再掲) 子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。 個性ある子どもたちが、同じ目的のために協同することで、得意な力を出し合い、自分の気持ちを収めたり、葛藤を乗り越え、感情を共有して個性(差異)を認め会う関係を構築していく姿を、動画を視聴できるQRコードを付し解説している。 (全13章)以下の項目を執筆。第2章　子どもの育ちに驚き、保育内容との関係性を学ぶ。第1節～第3節　共著者:森真理、猪田裕子、大谷彰子　他7名
	(学術論文) 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力ー保護者アンケートによる既存園との比較よりー	単	令和3年3月	芦屋大学論叢 第74号	15 (15)	森のようちえんでの自然保育で、学びに向かう力の育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもは、既存園より祖父母、兄弟、親戚など多様な人間関係の中で育っている。また、社会情動的スキルの《がんばる力》《自己主張》に優れているが、人の気持ちを汲み取り，自身の気持ちを調整し相手に合わせる力《協調性》《自己抑制》に課題が認められた。
	2. 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因ー園での生活経験	単	令和4年3月	芦屋大学論叢 第76号	12 (12)	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因を検証した。友達との関係を築くための「協調性」が向上する要因として、「遊びに自分なりの工夫」を加えるといった【遊び込む経験】や「友達のいいところや得意なこと

	と保護者のかかわりに焦点を当てて― (学会発表) 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和4年5月	日本保育学会第75回大会研究発表論文集	2 ⑵	を知る」といった【共同的な活動】に有意な相関が認められた。 森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。子どもの人間関係に影響を与える「協調性」を育てる保育者のかかわりとして、「子どもの気持ち受容」「子どものやりたいことを尊重」「しようとすることを最後まで手を出さずやらせる」といった【意思の尊重】や【見守る】かかわりに有意な相関が認められた。
子どもと環境(単独)	(著書) 1.『新しい幼児教育方法・指導法』第2版	共	令和4年12月	ミネルヴァ書房	6 (197)	(再掲) 学生や保育者を対象にした幼児教育方法や指導法についてのテキスト。 保育現場における保育の環境や幼児教育方法の理論と保育の展開を分かりやすく解説している。子どもが自発的・積極的に関わりたくなる環境や子ども同士の関わりが深まる環境やその構成について言及している。(全12章) 以下の項目を執筆。第2章保育方法の本質。1節保育の方法とは何か。 共著者:広岡義之、大谷彰子他5名
	2.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和4年4月	北大路書房	12 (169)	(再掲) 子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。子どもたちは環境に能動的に関わり、試したり工夫することで探究心を養うと学びの姿を具体例を交え解説している。また、遊びこみや探求につながる保育環境や保育所等の「子どもに最もふさわしい生活の場」としての環境を保障することの責務等についても言及している。
	(学術論文) 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力―保護者アンケートによる既存園との比較より―	単	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	15 (15)	森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力の特性を既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちが優れている非認知能力の《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森(自然)を主たる生活の場所とし1日4時間以上身を置く場合に育まれており、園舎がないことで、逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	2. 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因―園での生活経験と保護者のかかわ	単	令和4年3月	芦屋大学論叢第76号	12 (12)	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちと、その育ちに影響を与える要因を「園での生活経験」と「母親のかかわり」の観点から明らかにした。森のようちえんは自然環境のなかでの自由活動が8割以上を占め、既存園と比較し社

	りに焦点を当ててー 3. 森のようちえんの学びに向かう力の育ちに影響を与える要因 ー園での経験、保育者のかかわりに焦点を当ててー	単	令和5年6月	自然保育学研究第5号	10 (10)	会情動的スキルが高い。その要因として、玩具などのない自然環境で「遊びに自分なりの工夫を加える」や「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」といった経験が挙げられた。 森のようちえんの子どもの、学びに向かう力の育ちに影響を与える要因について検証を行った。育ちには、「遊びこむ経験」と「友達を肯定的に理解しようとする経験」との相関が強い。一方、「設定的な活動」では、好奇心、自己主張に負の相関が認められた。保育者のかかわりでは、子どもの「意思を尊重」し「見守る」かかわりが相関が強く、「教化的なかかわり」は好奇心、協調性、自己主張の育ちに負の影響を与える可能性が認められた。
	(学会発表) 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和4年5月	日本保育学会第75回大会研究発表論文集	2 (2)	森のようちえんの保育者の意識が子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの保育者が一番重視していることは「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから、自然体験を通して主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、協調性のある子どもを育てることに力を入れている。
子どもと言葉(単独)	(学術論文) 1. 学生・赤ちゃん相互の言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験ー母親・学生の子ども理解の視点比較からー	単	平成31年3月	芦屋学園短期大学紀要45号	21 (21)	乳幼児ふれあい体験を通し、学生の非言語メッセージ理解の深化と、赤ちゃんの母親以外の人とのふれあいが、言葉の育ちに繋がるのかを検証することであった。赤ちゃんは、学生と関わる際、信用できる人かを母親の様子を見て、相手を見極めている。そして、目を合わせ、学生に働きかけを促すきっかけ行動、誘いかけをおこない、非言語メッセージを意図的道具性として使用し、そのサインに学生との間で通用する協約性を感じ、その子独自の原言語を使用し、共感し、愛着・安心できる関係を築いている。
	2. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力ー保護者アンケートによる既存園との比較よりー	単	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	15 (15)	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちの言葉に関する育ちについて、挨拶やお礼を言える力、自分がしたいことや、してほしいことを大人に頼める力、人の話を聞く力、言葉遊びの力、自分の言葉で順序立ててわかりやすく話す力に優れ、文字を書いたり読んだりする力に弱さがあることが明らかとなった。
	(その他)学会発表	単			2	乳幼児ふれあい体験を通して、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを学生と母親

	1.言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験		平成 30 年 5 月	日本保育学会 第 71 回発表要旨集	(2)	はどのような視点で「聞き」理解しているのか検証した。学生は非言語メッセージを丁寧に読み取り、赤ちゃんの「笑顔」を目指して不安な感情に共感、代弁し言葉の育ちの基礎としての心の通い合いが認められた。しかし、笑顔になることを目標とした課題解決型の援助になっており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は赤ちゃんが親以外の他者との関係を成長と捉え喜びとしている。 (執筆担当部分:研究目的、研究方法、結果、考察。企画、データ収集、執筆を担当し、内容の検討、考察を共同研究として行った。) 共著者:大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予
保育内容総論(単独)	(著書) 1.『教職を目指す人のための教育用語・法規』	共	平成 25 年 3 月 (改訂平成 29 年 3 月)	成 25 年 3 月 (改訂平成 29 年 3 月)	4 (297)	(再掲) 教員志望者等の学生・一般が対象であるため平易な用語解釈を基本とする教育に関する法規とそれに関する用語解説書である。資料として、「教育ニ関スル勅語」や日本および西洋の教育史年表等も巻末に掲載されている。 保育者としての基本用語である以下の用語を解説した。「保育士」「児童福祉法」「児童権利宣言」「幼保一元化」「保育制度」「平和教育」について、解説している。 共著者:広岡義之、猪田裕子、大谷彰子計 17 名
	2.『新しい幼児教育方法・指導法』第2版	共	令和4年 12 月	ミネルヴァ書房	6 (197)	(再掲) 学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 子どもを主体者とした保育のねらいや目標、保育者の姿勢について触れ、子ども観や保育観を構築できるよう解説している。また、保育方法の歴史的変遷について、日本初の幼稚園誕生の時期からの保育内容の変遷を概観し、これからの多様な子どもの個性や差異を尊重し、保育者も含めた育ち合う共同体を築いていく保育の方法について言及している。 (全 12 章) 以下の項目を執筆。 第 2 章 保育方法の本質 1 節 保育の方法とは何か 共著者:広岡義之、大谷彰子他 5 名
	3.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和 4 年 4 月	北大路書房	12 (169)	(再掲) 子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。保育者として子どもを理解する心持ちやまなざし、保

						育は子どもからはじまるという基本原則について言及している。また、子どもの発達や生活に即した保育内容、遊びこみや探求につながる保育内容、生きる力を育む保育内容、差異を認め合い育ち合う保育内容について、実例をあげ解説している。動画の QR コードを付け子どもの遊びを通した学びについてグループワーク等で検証できるよう工夫している。 (全 13 章) 以下の項目を執筆。 第 2 章　子どもの育ちに驚き，保育内容との関係性を学ぶ 第 1 節～第 3 節 共著者:森真理、猪田裕子、大谷彰子他 7 名
	(学術論文) 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－保護者アンケートによる既存園との比較より－	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	15 (15)	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは,《がんばる力》《自己主張》に優れ,《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は，自然環境に関わる時間に影響を受け，森(自然)を主たる生活の場所とし 1 日 4 時間以上身を置く場合に育まれており，園舎がないことで，逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	2. 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因－園での生活経験と保護者のかかわりに焦点を当てて－	単	令和 4 年 3 月	芦屋大学論叢第 76 号	12 (12)	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちと、その育ちに影響を与える要因を「園での生活経験」と「母親のかかわり」の観点から明らかにした。森のようちえんは自然環境のなかでの自由活動が 8 割以上を占め、既存園と比較し、社会情動的スキルが高い。その要因として、玩具などのない自然環境で「遊びに自分なりの工夫を加える」や「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」といった経験と保護者の子どもの意思を尊重し、受容的に関わることが挙げられた。
	(その他)学会発表 1. 森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和 4 年 5 月	日本保育学会第 75 回大会研究発表論文集	2 (2)	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの保育者が保育で重視していることの 1 位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育み、自然体験を通して主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることに力を

						入れている。
保育内容Ⅳ言葉(単独)	(学術論文) 1. 学生・赤ちゃん相互の言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験－母親・学生の子ども理解の視点比較から－	単	平成 31 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 45 号	21 (21)	乳幼児ふれあい体験を通し、学生の非言語メッセージ理解の深化と、赤ちゃんの母親以外の人とのふれあいが、言葉の育ちに繋がるのかを検証することであった。赤ちゃんは、学生と関わる際、信用できる人かを母親の様子を見て、相手を見極めている。そして、目を合わせ、学生に働きかけを促すきっかけ行動、誘いかけをおこない、非言語メッセージを意図的道具性として使用し、そのサインに学生との間で通用する協約性を感じ、その子独自の原言語を使用し、共感し、愛着・安心できる関係を築いている。
	2. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力－保護者アンケートによる既存園との比較より－	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢第 74 号	15 (15)	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちの言葉に関する育ちについて、挨拶やお礼を言える力、自分がしたいことや、してほしいことを大人に頼める力、人の話を聞く力、言葉遊びの力、自分の言葉で順序立ててわかりやすく話す力に優れ、文字を書いたり読んだりする力に弱さがあることが明らかとなった。
	(その他)学会発表 1.言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験	単	平成 30 年 5 月	日本保育学会 第 71 回発表要旨集	2 (2)	乳幼児ふれあい体験を通して、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを学生と母親はどのような視点で「聞き」理解しているのか検証した。学生は非言語メッセージを丁寧に読み取り、赤ちゃんの「笑顔」を目指して不安な感情に共感、代弁し言葉の育ちの基礎としての心の通い合いが認められた。しかし、笑顔になることを目標とした課題解決型の援助になっており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は赤ちゃんが親以外の他者との関係を成長と捉え喜びとしている。 (執筆担当部分:研究目的、研究方法、結果、考察。企画、データ収集、執筆を担当し、内容の検討、考察を共同研究として行った。) 共著者:大谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予

芦屋大学

保育内容指導法Ⅰ	(著書) 1.『新しい幼児教育方法・指導法』第2版	共	令和4年12月	ミネルヴァ書房	6 (197)	(再掲) 学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 子どもを主体者とした保育のねらいや目標、保育者の姿勢について触れ、子ども観や保育観を構築できるよう解説している。また、保育方法の歴史的変遷について、日本初の幼稚園誕生の時期からの保育内容の変遷を概観し、これからの多様な子どもの個性や差異を尊重し、保育者も含めた育ち合う共同体を築いていく保育の方法について言及している。 (全12章) 以下の項目を執筆。 第2章 保育方法の本質 1節 保育の方法とは何か 共著者:広岡義之、大谷彰子他5名
	2.『子どもの権利との対話から学ぶ保育内容総論』	共	令和4年4月	北大路書房	12 (169)	(再掲) 子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。保育者として子どもを理解する心持ちやまなざし、保育は子どもからはじまるという基本原則について言及している。また、子どもの発達や生活に即した保育内容、遊びこみや探求につながる保育内容、生きる力を育む保育内容、差異を認め合い育ち合う保育内容について、実例をあげ解説している。 (全13章) 以下の項目を執筆。 第2章 子どもの育ちに驚き,保育内容との関係性を学ぶ 第1節～第3節 共著者:森真理、猪田裕子、大谷彰子他7名
	(学術論文) 1. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力ー保護者アンケートによる既存園との比較よりー	単	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	15 (15)	森のようちえんの自然を通した保育方法での、子どもの生活習慣や学びに向かう力などの育ちの特性を、既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは,《がんばる力》《自己主張》に優れ,《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は,自然環境に関わる時間に影響を受け,森(自然)を主たる生活の場所とし1日4時間以上身を置く場合に育まれており,園舎がないことで,逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。
	(その他)学会発表 1. 森のようちえんの保育者意識が子	単	令和4年5月	日本保育学会第75回大会研究発表論文集	2 (2)	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの子どもは、既存園の子

	どもの育ちに与える影響					どもと比較し非認知能力の育ちに優れている。その森のようちえんの保育者が保育で重視していることの 1 位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育むことをねらいとした保育を行っており、主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることを重視した保育を行っている。

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1『新しい保育・幼児教育方法』第 2 版	共	令和3年12月		学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキストである。 2018（平成 30）年の幼稚園教育要領・保育所保育指針等の改定に伴い、内容を再検討し再度執筆を行った。今回の改定で加筆された、保育を通して「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した保育内容や保育計画についても記載し、現状にあった保育の本質や保育の方法について、これからの多様な子どもの個性や差異を尊重し、保育者も含めた育ち合う共同体を築いていく保育の方法について言及している。 （全 12 章） 以下の項目を執筆。 第 2 章　保育方法の本質 1 節　保育の方法とは何か 共著者：広岡義之、大谷彰子他5名
2『子どもの権利との対話から学ぶ　保育内容総論』	共	令和4年4月	北大路書房	子どもの権利を保障する保育内容について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。 個性ある子どもたちが、同じ目的のために協同することで、得意な力を出し合い、自分の気持ちを収めたり、葛藤

				を乗り越え、感情を共有して個性（差異）を認め会う関係を構築していく姿を、動画を視聴できるQRコードを付し解説している。 （全13章）以下の項目を執筆。第2章　子どもの育ちに驚き、保育内容との関係性を学ぶ。第1節～第3節　共著者：森真理、猪田裕子、大谷彰子他7名
3『保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規』	共	令和７年３月	ミネルヴァ書房	保育者をめざす人のための、保育・幼児教育に関する基本的な人名・事項約 900 項目を収めた用語集。最新の法制度、保育所保育指針等に対応した内容を掲載し、こども基本法をはじめとする最新の動向や関連する主要な法規類も記述されている。 保育者としての基本用語である「発達段階」「個人情報保護」「健康（領域）」「ナースリ・スクール（保育学校)」など 21 の用語を解説した。 共著者：戸江茂博、隈元泰弘、広岡義之、猪田裕子、大谷彰子他
4『子どもの権利との対話から学ぶ　保育原理』	共	令和８年３月	北大路書房	子どもの権利を保障する保育の原理について、多角的な視点から保育の面白さと奥深さを探究するテキスト。 「第７章　保育の計画と学びの可視化」を担当し、「今を生きる子ども」の育ちを保障し、保育の質を深めていく指導計画や記録、評価について、目の前の子どもを共感的に理解することの大切さと、子どもの育ちを可視化することの意義について解説した。子どもの魅力や育ちに驚き、その学びや気づきを共有しながら、子ども、保育者、保護者が育ち合うドキュメンテーションや、保育の質向上につながる指導計画や記録、評価の循環についても解説した。 共著者：森真理、猪田裕子、大谷彰子、上垣内伸子・木戸啓絵・井上知香他６名
【学術論文】 1 森のようちえんの園児の社会情動的スキルの育ちに影響を与える要因	単	令和４年３月	芦屋大学論叢第 76 号	森のようちえんに通う子どもの社会情動的スキルの育ちと、その育ちに影響を与える

ー園での生活経験と保護者のかかわりに焦点を当ててー				要因を「園での生活経験」と「母親のかかわり」の観点から明らかにした。森のようちえんは自然環境のなかでの自由活動が8割以上を占め、既存園と比較し社会情動的スキルが高い。その要因として、玩具などのない自然環境で「遊びに自分なりの工夫を加える」や「好きなことや得意なことをいかして遊ぶ」といった経験が挙げられた。
2 森のようちえんの学びに向かう力の育ちに影響を与える要因 ー園での経験、保育者のかかわりに焦点を当ててー	単	令和5年6月	自然保育学研究第5号	森のようちえんの子どもの、学びに向かう力の育ちに影響を与える要因について検証を行った。育ちには、「遊びこむ経験」と「友達を肯定的に理解しようとする経験」との相関が強い。一方、「設定的な活動」では、好奇心、自己主張に負の相関が認められた。保育者のかかわりでは、子どもの「意思を尊重」し「見守る」かかわりが相関が強く、「教化的なかかわり」は好奇心、協調性、自己主張の育ちに負の影響を与える可能性が認められた。
3 森のようちえんの社会情動的スキルと認知的スキルの育ちと要因 ー縦断調査3年目（年少から年長）の検証ー	単	令和6年3月	芦屋大学論叢第81号	森のようちえんの年長児を対象に，社会情動的スキル、認知的スキルの年少から年長への育ちの経過を既存園と比較し、育ちの要因について、遊びの経験と保護者の援助の観点から明らかにした。認知的スキル・社会情動的スキル，両方の育ちに有効な経験は、「遊びに自分なりの工夫を加える」「友だちと関わる中で，友だちのいいところや得意なことを知る」であった。遊びこみ試行錯誤する経験と友達を肯定的にみる視点を育むことは，認知的スキル・社会情動的スキルの両方を育む要因であることが示唆された。
4 森のようちえん卒園児の学びに向かう力の育ちと要因 ー学習態度，学習習慣に着目してー	単	令和7年7月	芦屋大学論叢第84号	森のようちえん卒園児の就学後の学びに向かう力の育ちの特性とその成長要因を，一般の就学前施設の卒園児と比較することで検証した。森のようちえんでの【遊びこむ経験】【共同的な活動】と，保護者の【意欲の尊重】【意欲の尊重】【思考の促し】の援助が，【がんばる力】などの社会情

				動的スキルを育み，その【がんばる力】が【知的好奇心と主体的な学びの育ち】につながっている。一方，指示された課題やルーティンをこなすことが苦手で，約7人に一人が小学校に楽しく通えていない結果であった。【自己抑制】【がんばる力】を幼児期に育むことが，充実した児童期を迎えることにつながることが示唆された。
【その他(講演や発表)】 1森のようちえんの保育者意識が子どもの育ちに与える影響	単	令和4年5月	日本保育学会第75回大会研究発表論文集	森のようちえんの保育者の意識を検証し、子どもの育ちに与える影響を、既存園の保育者との比較から明らかにした。森のようちえんの保育者が保育で重視していることの1位は「自然と触れ合う」であり、「遊びの中で興味を持ったものやこと」などから「豊かな情操や感性」「健康な身体」「人への思いやり」を育み、自然体験を通して主体者としての子どもを育てることに力を入れている。一方、既存園では、「基本的な生活習慣」を身につけ、「友だちを大事に協力」するといった集団の中で協調性のある子どもを育てることに力を入れている。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 3 月 31 日
氏 名　福山恵美子

1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
特別支援教育総論【初等】【中等】(単独)	(学術論文) 1. 特殊教育から特別支援教育への転換ーその歴史的背景と近年の動向ー	単著	平成 29 年3月	大阪総合保育大学紀要第 11 号	22	第Ⅰ章では、ノーマライゼーションの理念でニィリエのノーマライゼーションの思想と国連及び日本におけるノーマライゼーション実現のための動向について述べた。第Ⅱ章では、国際連合及び日本における障害者施策について述べた。第Ⅲ章では、障害の概念の変遷として、ICIDH から ICF への転換の経緯、ICF の要素について述べた。第Ⅳ章では、教育の場に注目しながら特別支援教育に至るまでの歴史的経緯について述べた。
	2.「特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通してー」	単著	平成 30 年3月	大阪総合保育大学紀要第 12 号	21	第Ⅰ章では、T・T の定義と歴史を述べた。第Ⅱ章では、知的障害特別支援学校の T・T の課題について先行研究等を通して考察した。第Ⅲ章では、先行研究から T・T の長所を検討した。第Ⅳ章では、先行研究及び授業分析を通して、AT の支援評価表作成の経緯について述べた。
	3. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画している T・T の実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えた T・T のあり方を探った。
	4. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー	単著	令和 2 年 12 月	生涯発達科学会	15	高等教育における障害学生支援に関する先行研究では、当事者の課題、家庭や地域社会の課題等を挙げ、大学においても適切な支援の提供や対応が今後の課題であると指摘してい

				発達人間学研究第 20 巻第 2 号		る。このことを踏まえ、本研究では先行研究から見出された支援を、「支援する者」「支援のあり方」「支援の場」に整理し、障害学生支援について検討した。特に私立小規模大学においては、小規模ならではの細やかで顔が見える支援の実施が明らかになった。さらに多様な学生一人一人の教育的ニーズに応えるべく、大学も変わっていかなければならないことを明らかにした。
	5.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	15	生きづらさの定義を述べ、それをもたらした社会構造を明らかにした。生きづらさを抱えている人たちへの居場所の類型の検討を行った。保護司へのインタビューでは，犯罪や非行をした人の背景には発達障害や家庭環境の課題があり，特別支援教育と更生保護を担う人たちとの連携の必要さを認識するとともに，生きづらさを抱えている人たちにとっての居場所は人とのつながりがあってこそ、居場所として意義のあることを明らかにした。
	(著書) 6. 大学生活入門〜幼・小・特支教員・保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン〜	共著	令和元年 4 月	開成出版株式会社	6	大学生として必要な心構え、一般常識、実習に向けて及び教員として働くための基礎知識を簡潔に記載している。筆者は特別支援学校での教育実習、現場で使える用語について担当した。 監修:笠原清次,渡康彦 編者:石田愛子,竹安知枝 著者:安藝雅美,大江まゆ子,大谷彰子,木下隆志,種田香,丹下秀夫,福山恵美子
	(著書) 7. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	抽出不可	1 項目あたり400字程度で，カンファレンス，育児相談，家庭崩壊，過保護，居宅訪問型保育事業，虚構遊び，協働保育所，肢体不自由，障害児保育，精神保健，地域福祉，要保護児童対策地域協議会，ADHD の 13 項目を分担執筆した。(執筆者 63 名) 戸江茂博・隈元泰弘・広岡義之・猪田裕子(編)
	(教育実践記録) 8. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例	単著	平成 30 年 2 月	生涯発達科学会第 18 巻第 1	17	聾重複児のコミュニケーション指導をテーマに、ことばの発達、発達の観点、聾重複児のコミュニケーション指導とは、ティーム・ティーチング、聾重

				業　発達人間学研究		複児の実際のコミュニケーション指導を通して考察した。
	(学術論文) 9. 地域共生社会に向けた課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著	令和 8 年3月	芦屋大学論叢第85号	12	本研究は, C 市における 3 事業所の管理者へのインタビューを通して, 就労継続支援事業所が当事者の社会参加の重要な接点となっていること, ボランティア活用については, 各事業所がそれぞれの方針や考え方に基づいて取り組んでいることが明らかになった。また, 制度の狭間にある人たちへの支援の入り口として, 手帳を持たない人を市役所や相談員につなぐなどの適切な対応がなされていること, 就労継続支援事業所が当事者にとって安心して関われる「居場所」として機能している可能性が示唆された。今後は, 制度間の接続や支援体制の整備に加え, 当事者がその人らしく他者とつながり続けられる「居場所」を, 地域住民や支援者がどのように支え合いながら育てていくかという視点が重要な課題となる。
聴覚障害児の教育	(学術論文) 1. 特殊教育から特別支援教育への転換ーその歴史的背景と近年の動向ー	単著	平成 29 年3月	大阪総合保育大学紀要第 11 号	22	(再掲のため, 略)
	2.「特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通してー」	単著	平成 30 年 3 月	大阪総合保育大学紀要第 12 号	21	(再掲のため, 略)
	3. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	4. 高等教育における障害学生支援ー先行研究か	単著	令和 2 年12月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)

	ら見出された支援に着目してー 5.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー 6. 大阪市におけるNPO法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー (著書) 7. 大学生活入門〜幼・小・特支教員・保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン〜 (教育実践記録) 8. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例 (著書) 9. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	単著 単著 共著 単著 共著	令和 6年3月 令和 7年4月 令和元年4月 平成 30年2月 令和 7年3月	芦屋大学論叢第81号 芦屋大学論叢第83号 開成出版株式会社 生涯発達科学会第18巻第1業　発達人間学研究 ミネルヴァ書房	15 13 6 7 抽出不可	(再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略)
重複障害教育の理論と実際	(学術論文) 1. 特殊教育から特別支援教育への転換ーその歴史的背景と近年の動向ー 2.「特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特	単著 単著	平成 29年3月 平成 30年3月	大阪総合保育大学紀要第11号 大阪総合保育大学紀要第12号	22 21	(再掲のため, 略) (再掲のため, 略)

	別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通してー」					
	3. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	4. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー	単著	令和 2 年 12 月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)
	5.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号		(再掲のため, 略)
	6. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー	単著	令 和 7 年 4 月	芦屋大学論叢第 83 号	13	(再掲のため, 略)
	(教育実践記録) 7. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例	単著	平成 30 年 2 月	生涯発達科学会第 18 巻第 1 業 発達人間学研究	7	(再掲のため, 略)
	(著書) 8. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	抽出不可	(再掲のため, 略)

芦屋大学

知的障害児の教育ⅠⅡ	(学術論文) 1.「特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長所項目表と AT の支援評価表作成を通して―」	単著	平成 30 年 3 月	大阪総合保育大学紀要第 12 号	21	(再掲のため, 略)
	2. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究―共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探って―	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	3. 高等教育における障害学生支援―先行研究から見出された支援に着目して―	単著	令和 2 年12月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)
	4.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察―再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあてて―	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	15	(再掲のため, 略)
	5. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察―「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目して―	単著	令 和 7 年 4 月	芦屋大学論叢第 83 号	13	(再掲のため, 略)
	(著書) 6. 大学生活入門～幼・小・特支教員・保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～ (教育実践記録)	共著	令和元年 4 月	開成出版株式会社	6	(再掲のため, 略)

	7. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例 (著書) 8. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規 (学術論文) 9. 地域共生社会に向けた課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著 共著 単著	平成 30 年 2 月 令和 7 年 3 月 令和 8 年 3 月	生涯発達科学会第 18 巻第 1 業　発達人間学研究 ミネルヴァ書房 芦屋大学論叢第85号	7 抽出不可 12	(再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略)
障害児臨床	1. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー 2.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー 3. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー (教育実践記録) 4. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例 (著書) 5. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	単著 単著 単著 単著 共著	令和 2 年 12 月 令和 6 年 3 月 令和 7 年 3 月 平成 30 年 2 月 令和 7 年 3 月	生涯発達科学界 発達人間学研究第 20 巻第 2 号 芦屋大学論叢第 81 号 芦屋大学論叢第 83 号 生涯発達科学会発達人間学研究第 18 巻第 1 号 ミネルヴァ書房	21 15 13 抽出不可	(再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略) (再掲のため, 略)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

聴覚障害者の心理・生理・病理	(学術論文) 1. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	2. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー	単著	令和 2 年12月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)
	3.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	15	(再掲のため, 略)
	4. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー	単著	令 和 7 年 4 月	芦屋大学論叢第 83 号	13	(再掲のため, 略)
	(教育実践記録) 5. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例	単著	平成 30 年 2 月	生涯発達科学会第 18 巻第 1 業　発達人間学研究	7	(再掲のため, 略)
	(著書) 6. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	抽出不可	(再掲のため, 略)
	(学術論文) 7. 地域共生社会に向けた課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第85号	12	(再掲のため, 略)

病弱者の心理・生理・病理	(学術論文) 1. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	2. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー	単著	令和 2 年12月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)
	3.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	15	(再掲のため, 略)
	4. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー	単著	令 和 7 年 4 月	芦屋大学論叢第 83 号	13	(再掲のため, 略)
	(著書) 6. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	抽出不可	(再掲のため, 略)
	(学術論文) 7. 地域共生社会に向けた課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第85号	12	(再掲のため, 略)
特別支援教育実習	(学術論文) 1.「特別支援教育におけるティーム・ティーチングに関する一考察―知的障害特別支援学校におけるティーム・ティーチングの長	単著	平成 30 年 3 月	大阪総合保育大学紀要第 12 号	21	(再掲のため, 略)

	所項目表と AT の支援評価表作成を通してー」					
	2. 特別支援教育におけるティーム・ティーチングの多様化に関する研究ー共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探ってー	単著	平成 31 年 3 月	大阪総合保育大学大学院博士学位論文	271	(再掲のため, 略)
	3. 高等教育における障害学生支援ー先行研究から見出された支援に着目してー	単著	令和 2 年12月	生涯発達科学会発達人間学研究第 20 巻第 2 号	15	(再掲のため, 略)
	4.「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	15	(再掲のため, 略)
	5. 大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー	単著	令 和 7 年 4 月	芦屋大学論叢第 83 号	13	(再掲のため, 略)
	(著書) 6. 大学生活入門〜幼・小・特支教員・保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン〜	共著	令和元年 4 月	開成出版株式会社	6	(再掲のため, 略)
	(教育実践記録) 7. 聾重複障害児のコミュニケーション指導事の事例	単著	平成 30 年 2 月	生涯発達科学会第 18 巻第 1 業　発達人間学研究	7	(再掲のため, 略)
	(著書) 8. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	抽出不可	(再掲のため, 略)

	(学術論文) 9. 地域共生社会に向けた課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第85号	12	(再掲のため, 略)

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1. 保育職・教職をめざす人のための保育用語・法規	共著	令和 7 年 3 月	ミネルヴァ書房	(再掲のため, 略)
【学術論文】 2. 「生きづらさ」を抱える人たちへの支援に関する一考察ー再犯防止のための「居場所」と「人とのつながり」に焦点をあててー	単著	令和 6 年 3 月	芦屋大学論叢第 81 号	(再掲のため, 略)
3.　大阪市における NPO 法人の支援活動に関する一考察ー「生きづらさ」を抱える人たちへの支援活動に着目してー	単著	令和 7 年 3 月	芦屋大学論叢第83号	(再掲のため, 略)
4.　地域共生社会に向けての課題と可能性ーC 市の障害者就労継続支援事業所への調査を通してー	単著	令和 8 年 3 月	芦屋大学論叢第 85号	(再掲のため, 略)
【その他(講演や発表)】 1 2				

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和8年4月1日

氏 名　毛利 康人

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
生活概論(単独)	(著書) 1. 奈良市副読本「奈良と自然」	共5名	平成 17 年3月	奈良市教育委員会	34 (67)	奈良市小学校で配布する副読本(総合的な学習や生活科・理科で使用)。 奈良の身近な自然・生き物や奈良のまちの紹介を執筆。 共著(毛利康人 崎山泰彦 梅田真寿美 竹原康彦 森下良介)
	2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」	共14名	令和 7年4月改定	奈良市教育委員会	18 (76)	奈良市立学校で使用する副読本(総合的な学習や生活科・理科で使用)。奈良の身近な自然や生き物、奈良の地域、文化、文化財の紹介を執筆。 共著(河合摩香 大西浩明 勝谷征彦 菊山清美 本車田達郎 森井祐幸 西口美佐子 関東利幸 的場宏純 深澤吉隆 水上雅裕 上田喜彦 毛利康人 中澤静雄)
	(学会誌) 1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習(奈良市版 ESD)	単	平成 23 年6月	理科の教育 日本理科教育学会	3 (71)	理科の教育 2011/06/Vol.60/No.707 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立学校で推進している ESD の全体構想について執筆。
	2. SDGS 達成のためのESD ー小学校における実践例—	単	令和元年 10月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (65)	理科の教育 2019/10/Vol.68/No.807 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立飛鳥小学校における SDGs達成のための具体的な学習実践事例(生活科・理科・社会科・総合的な学習の時間)について執筆。
	(教育実践記録) 1. 博報賞受賞報告	単(団体代表)	令和2年10月	博報堂教育財団	1 (20)	奈良市立飛鳥小学校で取り組んでいる「ESDの視点を踏まえた世界遺産学習 ・地域学習」の実践報告。小学校6年間の学習計画を学習内容と SDGs の達成目標を関連づけた指導計画を作成 。生活科、理科、社会科、総合的な学習の時間を中心として、地域の豊かな自然やまちの様子、文化財などを主体的に調べる学習。6 年生は飛鳥地域から世界をより良くするために自分たちに

						できることを考え実行する、「飛 鳥 スマイル・キッズ（ボランティア活動）」を6年間の学習の総仕上げとしている。
初等教科教育法Ⅳ【理科】（単独）	（著書） 1. 奈良市副読本「奈良と自然」	共5名	平成17年3月	奈良市教育委員会	34（67）	再掲（生活科概論）
	2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」	共14名	令和7年4月改定	奈良市教育委員会	18（76）	再掲（生活科概論）
	3. 令和6年小学校理科検定教科書「新しい理科」	複数	令和6年	東京書籍	複数	小学校 3 年生～6 年生の全ページの研修を行った。
	（学会誌） 1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習（奈良市版 ESD）	単	平成 23 年6月	理科の教育 日本理科教育学会	3（71）	再掲（生活科概論）
	2. SDGS 達成のためのESD －小学校における実践例―	単	令和元年 10 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (65)	再掲（生活科概論）
	3. 令和時代の教育のスタンダード －1人1台タブレット先行実施の最先端の教育状況―	単	令和3年8月	理科の教育 日本理科教育学会	4 （70）	理科の教育 2021/08/Vol.70/No.829 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 GAGA スクール構想により小学校に 1 人1台のタブレットが配置され、令和時代の教育は大きく変革した。タブレットを活用した最先端の教育状況について報告。
初等教科教育法Ⅴ【生活】（単独	（著書） 1. 奈良市副読本「奈良と自然」	共5名	平成 17 年3月	奈良市教育委員会	34（67）	再掲（生活科概論）
	2. 奈良市副読本「奈良大好き世界遺産学習」	共14名	令和7年4月改定	奈良市教育委員会	18（76）	再掲（生活科概論）
	（学会誌）					

	1. ESDを視野に入れた奈良市世界遺産学習(奈良市版 ESD)	単	平成 23 年6月	理科の教育 日本理科教育学会	3 (71)	再掲(生活科概論)
	2. SDGS 達成のためのESD ー小学校における実践例ー	単	令和元年 10 月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (65)	再掲(生活科概論)
	(教育実践記録) 1. 博報賞受賞報	単	令和2年10月	博報堂教育財団	1 (20)	再掲(生活科概論)
教職論【初等】(単独)	(著書) 1. 教職入門	共著 9名	令和4年	建帛社	13 (113)	第4章 教員の身分と服務(11ページ) 法規をもとに教員の身分と服務について解説。 第4章 コラム いじめ問題対応(1ページ) 学校でいじめが起こったときにどのように対応するかを解説。また、いじめが起こらないようにするにはどうしたらよいかを解説。共著者(住本克彦 門原眞佐子 新川 靖 野崎洋司 元根朋美 森一弘 山下敦子 毛利康人)
	2. 生徒指導・進路指導論	共著 16 名	令和 7 年	建帛社	10 (136)	第7章 校則・懲戒・体罰(9ページ) 生徒指導提要・関係法規をもとに校則・懲戒・体罰について解説。 第7章 コラム ブラック校則(1ページ) 社会問題となってやるブラック校則・校則の見直しについて解説。 共著者(住本克彦 新井 肇 伊藤美加 伊藤美奈子 井上直子 井上浩史 清水克博 竹村景生 田中達也 仁八 潔 橋本雅子 長谷川誠 平野 修 松田 修 安田従生 山下敦子 毛利康人)
	(教育実践記録・研究紀要) 1. 平成 27 年度奈良県小・中学校研究紀要	単	平成27年	奈良県小中学校長会	3 (53)	管理職として、教育の今日的な課題を踏まえ、教員の専門性を効果的に活かした校務を分担し、チームとして組織的な学校運営実践、学校が校外の専門家や家庭、地域とより連携するために、法的根拠のある学校運営協議会(コミュニティ・スクール)設置し、「地域とともにある学校づくり」の実践を執筆。
	2. 第 72回全国小学校長会研究協議会京都大会	単	令和2年	全国連合小学校長会研究協議会	4 (209)	変化が激しい社会、Society5.0 の社会で求められる学校像・教師像を追求し、学校長として取り組んでいる特色ある教育(小中一貫教育、コミュニティ・スクール、世界遺産学習・地域学習、キャリア教育)、そして、誰もが経験したことのない非常事態(新型コロナウイルス禍)における学校運営についての実践研究。
	(学会誌)					

	1.令和時代の教育のスタンダード －1人1台タブレット先行実施の最先端の教育状況―	単	令和3年8月	理科の教育 日本理科教育学会	4 (70)	理科の教育 2021/08/Vol.70/No.829 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 GAGA スクール構想により小学校に 1 人1台のタブレットが配置され、令和時代の教育は大きく変革した。タブレットを活用した最先端の教育状況について報告。
	(教育誌) 1.特色ある教育の推進と奈良市小学校校長会 ～奈良で学んだことを誇らしげに語る子どもの育成を目指して～	単	令和3年10月	奈良県教育振興会 やまと	5 (40)	やまと 513 号 奈良市立小学校長会長として、コロナ禍における教育、学校経営の在り方について提言。
	2. 「これからの学校教育 ～令和の日本型学校教育におけるICT活用と「子供の学び」～ 」	単	令和5年	奈良県教育振興会 やまと	4 (32)	やまと 521 号 令和の日本型学校教育とICT 活用における子供の学びの姿をかりやすく解説
	3.「これからの学校教育 今日的な教育課題「いじめ 不登校等 ～最新の文部科学省調査結果から～」	単	令和7	奈良県教育振興会 やまと	4 (31)	やまと 532 号 文部科学省 令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果から、喫緊の教育課題である「いじめ・不登校」について考察
	4.「子どもの将来と子育て」	単	令和7年	奈良県教育振興会 やまと	3 (31)	やまと 532 号 これからの変化の激しい時代、子どもの将来を見据え、どのように子育てをしていくとよいかをまとめた

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

生徒指導の理論と方法(初等・中等)	1. 生徒指導・進路指導論	共著16名	令和 7 年	建帛社	10 (136)	第7章 校則・懲戒・体罰(9ページ) 生徒指導提要・関係法規をもとに校則・懲戒・体罰について解説。 第7章 コラム ブラック校則(1ページ) 社会問題となってやるブラック校則・校則の見直しについて解説。 共著者(住本克彦 新井 肇 伊藤美加 伊藤美奈子 井上直子 井上浩史 清水克博 竹村景生 田中達也 仁八 潔 橋本雅子 長谷川誠 平野 修 松田 修 安田従生 山下敦子 毛利康人)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 教職入門 2生徒指導・進路指導論	 共著9名 共 著 16 名	令和 4 年 令和 7 年	建帛社 建帛社	第 4 章　教員の身分と服務(P11) p91 第7章　校則・懲戒・体罰(P9)
【学術論文】 1 2				
【その他(講演や発表)】 教育講演会 1. 家庭教育講座 2. PTA 講演会 3. PTA 講演会 34学童保育保護者研修 5. 小学校出前授業 6. 教育講演会 7. 教員研修会 8. T キャリア教育講演会」 9. 小学校出前授業 10.教育講演会 11.小学校出前授業 12.大阪市教員研修 13.講演会 14.キャリア教育講演会 15.キャリア教育講演会 16.幼稚園出前授業 17.キャリア教育講演会 18.キャリア教育講演会 19.教育講演会 20.小学校出前授業 21.小学校出前授業 22.キャリア教育講演会 23.キャリア教育講演会 24.キャリア教育講演会 25.小学校出前授業 26.小学校出前授業 27.幼稚園出前授業 28.小学校出前授業	 単	 令和2年12月 令和3年 令和 3 年 令和3年5月 令和3年 令和4年 令和4年 令和4年 令和4年 令和 4 年 令和 4 年 令和 4 年 令和 5 年 令和6年 令和 6 年 令和 6 年 令和 6 年 令和 6 年 令和 6 年 令和6年 令和 6 年 令和 6 年 令和7年 令和 7 年 令和 7 年 令和 7 年 令和 7 年 令和 7 年 令和77年	 奈良県教育振興会主催 奈良市立飛鳥幼稚園主催 奈良市立二名幼稚園主催 学童保育保護者会主催 愛知県みよし市立天王小学校 芦屋市民センター 奈良県広育振興会 大阪府立箕面東高校 沖縄県国頭村安波小学校 橿原市教育委員会 大阪市立磯路小学校 大阪市立磯路小学校 三宅町教育委員会 大阪市立西淡路小学校 三田松聖高等学校 名護市立屋部幼稚園 名護市立真喜屋小学校 大阪府立箕面東高等学校 奈良県教育振興会 石垣市立吉原小学校 大阪市立高津小学校 愛知県みよし市立天王小学校 大阪府立箕面東高校 奈良県立奈良商工高等学校 鶴舞小学校 鶴舞小学校 名護市立屋部幼稚園 国頭村安波小学校	 「未来を見据えた子育て」 「子どもの学び」 「子どもの学び」 「子どもの成長を楽しもう！」 「奈良の世界遺産」 「SDGsについて考えてみよう」 「令和の日本型学校教育」 「みなさんに伝えたいこと」 「世界遺産の復興」 「令和のサザエさん一家と地域コミュニティ」 「SDGsってなあに？」 「SDGsと人権教育」 「令和のサザエさん一家と地域コミュニティ」 「無限の可能性を秘めた西淡路小学校のみなさんへ」 「皆さんに伝えたいこと」 「どんぐりのお話」 「真喜屋から世界に羽ばたこう」 「皆さんに伝えたいこと」 「子どもの将来像と子育て」 「石垣にあるすばらしいもの」 「SDGsを学習し、最高学年になるみなさんに伝えたいこと」 「天王小学校から世界へ羽たこう」 「皆さんへ伝えたいこと」 「夢や目標を実現させませんか」 「どんぐりの話」 「どんぐりの話」 「どんぐりのおはなし」 「やんばるにある素晴らしいもの」

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

29.キャリア教育講演会	単	令和 7 年	奈良県立奈良商工高等学校（定時制）	「こえからの生き方を考えよう」
30.小学校出前授業	単	令和 7 年		SDGS を学んだみなさんへ伝えたいこと」
31.キャリア教育講演会	単	令和 7 年	みよし市立天王小学校	「天王小から世界に羽ばたこう
32.キャリア教育公園課	単	令和年	令和さくら学院	「これからの生き方を考えよう」」

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 20 日

氏 名 藤 本 光 司

教職課程における担当授業科目に関する研究業績等 2016 年（平成 28 年）4 月～2026 年（令和 8 年）3 月

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
中等教科教育法【技術】	（著書）				
	『アクティブラーニングに導く 教学改善のすすめ』	編著	2020.3（令和 2 年）	ぎょうせい	教育学を学ぶ学生、教職に従事している教員に対して、これからの「教学」を考え、その在り方、道筋を示すために教育方法学的な側面から執筆した。全 252 ページ編著
	『技術科教材論』	共著	2021.4.26（令和 3 年）	竹谷書房	問題発見と課題設定の教材化，インストラクショナルデザインを活用した技術科の授業， ADDIE モデルと ARCS モデルによる授業設計，魅力的な授業を提供するための授業設計，チームビルディングなど執筆
	『技術・家庭科技術分野（テクノロジーに夢をのせて）』 ※ 文科省検定教科書	共著	2021.4（令和 3 年）	開隆堂出版株式会社	内容 A の「材料と加工の技術」に関する領域を編集 pp22-93
	『技術・家庭技術分野（テクノロジーに夢をのせて）』 ※ 文科省検定教科書	共著	2025.4（令和 7 年）	開隆堂出版株式会社	内容 A の「材料と加工の技術」およびガイダンスに関する領域を編集 pp6-105
	『技術・家庭技術分野_学習指導書_指導解説編（A・B 編）』	共著	2025.4（令和 7 年）	開隆堂出版株式会社	内容 A の「材料と加工の技術」およびガイダンスに関する領域を編集 pp5-106
	『教育技術の理論と実践（教員志望者のための教育技術入門）』	共著	2026.4（令和 8 年）	デザインエッグ社	大学の教職課程履修者を主な対象として、教育技術を理論と実践の両面から体系的に学べるテキスト。教育技術の基礎的理解、学習理論、授業設計、学習評価、具体的な指導技術、ICT や教育データの活用に至るまで全プロセスを段階的に学べる構成とした。pp1-242

	(学術論文)				
	藤本光司、他 15 名：「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1)～(6)	共著	平成 26 年 3 月～28 年 3 月	情報コミュニケーション学会 研究報告 CIS（2014～2018)	工業高校の特色を活かし、チーム学習、ものづくりを通して、コミュニケーション能力や表現能力を身につけさせることを目的に授業内容や学習の効果と課題、評価方法について 5 年間の取組を論述した。第 13 回全国大会にて優秀発表賞を受賞
	(教育実践記録等)				
	（学術論文）「中学校技術科における材料加工分野の研究(1) ― 木工具に視点をおいた教材の考察 ―」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	材料加工分野についての基礎研究として、平成 28 年度から使用される文部科学省検定済の『技術・家庭科(技術分野)』の 3 社に記載された木材加工の「木工具」について比較調査した。その結果、多様に掲載されているものの各社かなりの差が見受けられた。
	「「主体的･対話的で深い学び」に挑む技術科教育の研究(1) ― 兵庫県中学校技術･家庭科教育の研究と試行的取組からの学び ―」	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回年会論文集	次期学習指導要領を教育現場で実践するために，県内の教科部会との共著で投稿した。主に技術科としての「見方・考え方」について，生物育成の内容の授業実践を含めて論述した。
	教員採用試験における専門分野への対応 ― オリジナル問題集の制作と学生調査による評価 ―	共著	2020.2.29（令和 2 年）	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	地方自治体が実施する教員採用の 5 都市を対象に調査研究を行った。採用試験の教職問題や各教科に関する問題を分析し，院生と採用試験問題集を制作した。さらに，本学学生に調査を実施して採用試験に関する課題や展望を整理した。
	中学校技術科における SDGs と STEAM 教育との関連(1) ― 理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて ―	共著	2020.2.29（令和 2 年）	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	持続可能な開発目標（以下，SDGs）は，昨今，国際的な行動規範として産官学のビジョンに位置づけられている。本稿では，大学教育における教学面での SDGs への方策について，他大学の先進的な取り組みと，本学的に実施できる活動や取り組みを紹介した。

	技術科教育としての異校種連携におけるカリキュラムマネジメント（1） ― エネルギー変換分野における試作モデルの評価と課題 ―	共著	2020.2.29 （令和 2）	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	教科間連携や異校種連携（幼少中など）などカリキュラムマネジメント（CM）を取り入れた教育活動が注目されている。技術科教育のさらなる可能性を探るためにCMを導入することによって得られる成果を探り，これらの理論背景を整理した。また，技術科教育と他教科との関連性や異校種連携の事例紹介と今後の課題並びに評価を述べた。
総合的な学習時間の指導方法	（著書）				
	『教育技術の理論と実践（教員志望者のための教育技術入門）』	共著	2026.4 （令和 8 年）	デザインエッグ社	大学の教職課程履修者を主な対象として、教育技術を理論と実践の両面から体系的に学べるテキスト。教育技術の基礎的理解、学習理論、授業設計、学習評価、具体的な指導技術、ICT や教育データの活用に至るまで全プロセスを段階的に学べる構成とした。pp1-242
	（学術論文）				
	「エコマテリアルと環境にやさしいものづくり ～SDGs につながる炭づくり体験学習～」	共著	2024.3 （令和 6 年）	芦屋大学論叢 第 81 号	環境に配慮した素材であり，持続可能な社会を構築するために重要な役割を持つ，「エコマテリアル」に焦点を当て，環境に配慮した行動をとるための知識や技能を身に付けさせることを目的とした「炭づくり体験学習」の成果と課題について示し，持続可能な社会を構築するための教育の意義や在り方について述べた。pp133-139

	「家庭科における金融教育に関する研究　－　昭和22年発行の学習指導要領からさぐる　－」	共著	2024.3 （令和6年）	芦屋大学論叢第81号	日本の家庭科における金融教育を探るため、昭和22年学校教育法が制定された年の中学校家庭科を調査した。金融教育の概念については,金融庁の示す「お金や金融のはたらきを理解し,暮らしや社会について考え,生き方や価値観を磨きながら,より豊かな生活やよりよい社会づくりに向けて,主体的に行動できる態度を養う教育」を参考に「生涯にわたり生きるために必要なお金の知識」と定義して論述する。pp83-92
	「各国における金融教育開始年齢の国際比較と日本の課題」	共著	2026.3 （令和7年）	情報コミュニケーション学会 第23回全国大会発表論文集（大手前大学）	日本及びイギリス、ドイツ、オーストラリア、シンガポールの金融経済教育に関する教授内容の調査研究を実施した。結論として、日本の金融教育は後進であり、企業（銀行や証券会社）と連携して進めることが金融教育のすそ野を広げられる可能性があることを導いた。pp132-135
	「バレエ教育における個人特性に適応した配役の在り方　―　FFS理論を活用した役割適応の分析に関する試み　―」	共著	2026.3 （令和7年）	情報コミュニケーション学会 第23回全国大会発表論文集（大手前大学）	ダンスやバレエを指導する際の学習者の役割分担のエビデンスとして個人特性を調査した。理論としては、FFS理論を活用した学生の自己分析に基づき配役を決める際の条件整理を実施した。pp54-55
	（教育実践記録）				
	「バレエ実技のオンライン授業に関する研究 － リアルタイム型授業による調査結果と今後の課題 －」	共著	令和3年8月	日本教育情報学会 第37回年会論文集（岐阜女子大学）	実技科目を履修する学習者への指導方法として、リアルタイム型のオンライン授業の展望と課題を報告した。pp404-405
	「グローバル教育の実践に向けて － イギリス中等教育の教育事情の考察 －」	共著	令和3年8月	日本教育情報学会 第37回年会論文集（岐阜女子大学）	総合的な学習の時間に対して、生徒の国際感覚の育成や教育のグローバル化に対する教育実践について、イギリスの教育現場での取り組みを紹介した。pp390-391
	「バレエ教育の情意面に着目した指導方法の研究（1）」	共著	令和4年3月	情報コミュニケーション学会 第19回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	舞台芸術の側面で学習者の情意的側面の変容について自己肯定感から述べた。特にバレエ芸術の分野において、学習者への指導方法のメリットとデメリットを整理した。pp78-79

	「アーツマネジメントの課題と展望を探る（１）」	共著	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	舞台芸術において、製作する演目や技術スタッフの活動など、アーツマネジメントの側面より県立劇場におけるマネジメントを紹介した。pp80-81
	高等学校家庭科の新しい単元「金融教育」に関する研究(2) ―　日本と諸外国の金融教育の比較による一考察　―	共著	2024.3 （令和 6 年）	情報コミュニケーション学会 第 21 回全国大会発表論文集（園田学園女子大学）	高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）の家庭科に加えられた金融教育に着目して、諸外国の金融教育について調査を行った。その結果、欧米等で先行して金融教育に取り組んでいる国が多い中、約 10 年で成果をあげたエストニアの金融教育について述べた。pp24-27
	「技能実習生の日本語学習の動機づけに関する研究 ― ミャンマー人技能実習生に対する調査と分析(2) ―」	共著	2024.3 （令和 6 年）	情報コミュニケーション学会 第 21 回全国大会発表論文集（園田学園女子大学）	昨今、政府を筆頭に技能実習生に対する日本語教育の重要性が提言されている一方、技能実習生の日本語学習に対する意欲が低いとの指摘が多いことから、動機づけにおいても外発的であることが予想された。だが、筆者が行った調査では、内発的動機づけにより、日本語学習に取り組んでいることが明らかになった。そこで本研究では、ミャンマー技能実習生を対象に、日本語学習に対する動機づけの調査と分析を行い、その結果を報告した。pp20-21
	「放課後デイサービス（支援を必要とする子ども）におけるものづくりの活動報告」	共著	2024.3 （令和 6 年）	情報コミュニケーション学会 第 21 回全国大会発表論文集（園田学園女子大学）	特別支援学級の子どもに、ものづくり実践を行い、心情の変化を観察した。その結果をもとに、支援を必要とする人に対して中学校技術科の授業で、どのような授業展開をすれば、子どもたちの将来への役立ちや、より良い成長につながるかを追究した。本内容では 3 種類のものづくり実践を行い、子どもたちの心情の変化をもとに、子どもの状態と階層から実態を明らかにした。pp30-31

教育の方法と技術（中等）	（著書）				
	『アクティブラーニングに導く　教学改善のすすめ』	編著	2020.3 （令和 2 年）	ぎょうせい	教育学を学ぶ学生、教職に従事している教員に対して、これからの「教学」を考え、その在り方、道筋を示すために教育方法学的な側面から執筆した。全 252 ページ編著
	『教育技術の理論と実践（教員志望者のための教育技術入門）』	共著	2026.4 （令和 8 年）	デザインエッグ社	大学の教職課程履修者を主な対象として、教育技術を理論と実践の両面から体系的に学べるテキスト。教育技術の基礎的理解、学習理論、授業設計、学習評価、具体的な指導技術、ICT や教育データの活用に至るまで全プロセスを段階的に学べる構成とした。pp1-242
	（学術論文）				
	大学生の学修成果に影響を与える要因 －　追跡調査による実証研究　― Factors Affecting the Learning Outcomes of University Students －　Empirical Research Using Follow-up Surveys　－	共著	2026.3 （令和 8 年）	日本教育享保学会誌「教育情報研究」第 41 巻第 2 号・3 号　20 合併号 2026	単一大学における組織的な IR 活動の一環として，大学生活と GPA の関連を検討したものである．2019 年度から 2021 年度までの 3 年間のパネルデータを用い，固定効果モデルによる分析を行った．分析の結果，学業への取り組みと教員への相談が，GPA に対して統計的に有意な正の影響を与えることが明らかとなった．一方，部活動やアルバイトなどの課外活動は，GPA と有意な関連を示さなかった．固定効果モデルを用いることで，観察されない個人特性をコントロールした上で，これらの知見が得られた点に本研究の方法論的特徴がある．単一大学の事例研究ではあるものの，同一学生の継続的な追跡データを用いた分析により，教学マネジメントに直接活用可能な示唆を提供している．pp25-32

	(教育実践記録)				
	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) －ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて －	共著	2017.3.4 (平成 29 年)	情報コミュニケーション学会 第 14 回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は，教科の歴史的経緯を理解し，学習指導要領の読み解き，授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では，ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。
	対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究 － 多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響 －	共著	2018.8.24 (平成 30 年)	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	「教育と方法の技術［中等教育］」は，多人数授業であるが対話的で深い学びを展開している。本授業で，形成的に評価した 12 回分のレポート成績をカテゴリ別に分析するとともに自由記述の階層的クラスタ分析を行った。その結果，自己調整学習の理論に示された「書き行動方略」の指導段階で第 4 段階まで到達していることが判明した。
	8. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ― 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 ―	共著	2018.3.10 (平成 30 年)	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表論文集	技術科の「材料と加工に関する技術」領域では，設計→試作→検討→製作という新しい授業プロセスが示されている。特に「試作→検討」は，主体的で対話的な深い学びを推進するためのコミュニケーションの単元とも考える。本稿ではインストラクショナルデザインを意識した授業モデルを検討した。

	(著書) 『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』	編著	平成 28 年 4 月	ぎょうせい	本著は、知識基盤社会を生き抜く力の学生の学びについて主に教職履修の学生を対象とした著書である。構成主義や行動主義、ガニエの 9 教授事象など基礎・基本的な学習理論を網羅しつつ、アクティブラーニング型授業の設計プロセス(ADDIE モデルやロジックツリーなど)について、これから求められている 21 世紀型能力のキーコンピテンシーを軸に展開している。また、ICT を活用した反転授業や情報モラルの指導方法など、最新の ICT 活用の実践も掲載している。全 238 ページを編著
	(学術論文) 『学習情報研究(2007、3 月号)』、特集:国際交流学習の成功の秘訣、「国際理解教育における成功の秘訣」	共著	平成 19 年 3 月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	国際社会では自己を確立し、人権感覚を育み、広い視野で異文化を吸収し、違った立場や違う国の人との共生をめざした資質や能力を育成する必要がある。本稿では、日本人学校や国際協力の教育活動(JICA)について社会教育を軸に論述した。林徳治との共著、pp.9-13、
	(教育実践記録) 「中学校技術科教育におけるエネルギー変換に関する教材研究(1) ー ESD の観点から LED 教材の一考察 ー」	共著	平成 26 年 11 月	情報コミュニケーション学会 研究報告 CIS Vol.11、No4	中学校技術科において、持続可能な開発のための教育(ESD)の観点からエネルギー変換の領域で扱う教材について考察した。pp14-15
	「中学校技術科における自尊感情育成の研究(1) ー 電子黒板の効果的活用法 ー」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	授業に参加できない生徒の中には「意欲」に問題があるのではなく「発達障害」が原因であると推定される者も少なくない。これらの生徒に対する「合理的配慮」についても検討していく必要がある。本稿では、電子黒板(スマートボード)を活用した授業実践について報告した。pp24-27
	「教員免許更新講習の必修領域に関する実践と評価 ー 教育方法学の講座内容を通した異校種間交流と事後調査分析の報告	共著	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会 第 37 回年会論文集(岐阜女子大学)	教職課程で実施している教育方法論について、教員免許更新講習の必修領域で実施した教材内容の実践と評価を検証した。また、講座内容を通した異校種間交流と事後調査分析の報告を行った。p378-379

	ー」				
ICT 活用の理論と実践	(学術論文) 「技術科教員養成課程の学生を対象とした技術分野「D:情報の技術」の指導に関する調査研究」	共著	2024.3 (令和 6 年)	芦屋大学論叢 第 81 号	「D：情報の技術」の学習内容について、技術科の教科書と中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説技術・家庭編と照らし合わせて作成したアンケートを用いて、技術科教員養成課程の 1 年生～4 年生の学生が有する指導に対する自信の程度を調査した。さらに、学生の指導観を向上させて教員としての資質を育成するための手掛かりについて検討した。pp83-92
	(教育実践記録) 協働的な学びを取り入れた教職科目の授業設計 ー　教職新科目「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の開設に向けて　ー」	共著	2022.8 (令和 4 年)	日本教育情報学会 第 38 回年会論文集	教職コアカリキュラムが改訂され，「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。)」は，「教育の方法及び技術（2 単位)」と「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法（1 単位または 2 単位)」に分割または包括した形での実施［1］となる。本稿では，対面授業で実施した 2019 年度とコロナ禍のオンライン授業で対応した 2021 年度の授業アンケートより検証し，今後の新科目設置への対策について検討した。pp68-71
	「デジタル・シティズンシップ教育への取り組み　―共通必履修科目「情報Ⅰ」における情報モラル教育を通して ―」	共著	2022.8 (令和 4 年)	日本教育情報学会 第 38 回年会論文集	情報科の共通必履修科目「情報Ⅰ」が今年度から開始された。情報と情報技術を活用して問題の発見・解決に向けて科学的に考える力の育成が重視され、情報モラルの内容が減少している。情報モラルをより幅広くとらえたデジタル・シティズンシップ教育を推奨する先行研究をもとに、「情報Ⅰ」での情報モラル教育について検討した。pp334-335

	「新設「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の対応と課題」	共著	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	令和 4 年度から新設される教職科目、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に関する全国的な対応状況を調査してシラバス内容を検討した。pp82-83
	「高等学校情報科における効果的な VC 教材の開発と授業実践の研究（目に特性を抱えた生徒を対象として）」	共著	令和 4 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 19 回全国大会発表論文集（青山学院大学 相模原キャンパス）	情報教育における指導の留意恬として、目に特性を抱えた生徒が 5%存在している。本稿では、それらの生徒への対応として、VC 教材を開発して支援を行う際の教材の提案を行った。pp84-85
	ネット社会の新たな概念 Web3.0 の教材化に関する研究(1)－ ブロックチェーン・DAO・NFT・DeFi・メタバースの学生認知度と検定教科書の調査－	共著	2023.8（令和 5 年）	日本教育情報学会 第 39 回年会論文集（岐阜女子大学）	Web2.0 時代から GAFAM などのプラットフォーム企業を中心に展開する構造である。そんな中央集権的な構造に Web3.0 という概念が現れたが、未だ不透明な部分が多い。本稿では、情報 I の全教科書（6 社 12 冊）を調査した結果，3 社にブロックチェーンの記述があった。pp151-154 学生調査では，Web3.0 に関するキーワードについて，ほとんど認知されてない状態であった。
教職実践演習（中等）	（著書）				
	『必携！相互理解を深める　コミュニケーション実践学（改訂版）』	共著	平成 22 年 3 月	ぎょうせい	心理学カウンセリング手法の「アサーション」や地図的概念法（ＫＪ法、強制連結法）など、２１の教材コンテンツ。全教材が 90 分のグループ演習とし、学習者がＰＤＣＡサイクルマネージメントによる振り返り学習が可能な学習者参加型教材。教員が学級経営や授業作りに活用できる配布プリント教材も全ての編に揃えている。林徳治、沖裕貴監修、pp1-186
	（学術論文）				
	『教育への扉』、「寄稿インストラクシ	単著	2023 年 12 月（令和 5 年）	竹谷出版学術ジャーナル第 3 巻第	GIGA スクール構想によって，一人 1 台端末が整備されたことや学校現場の DX

	ョナルデザインを活用した授業設計」			3 号、ISSN2436-4959、竹谷出版	（デジタルトランスフォーメーション）が進むことで，教育のパラダイムシフトに期待が寄せられている。学習管理システムの活用は，教務情報の管理、チャットでのコミュニケーション，自動採点機能、懇談日程の予約などがある。これらにより教育活動の幅も広がり，履歴情報から学習内容を点検して教育の質保証につなげている。本稿では，授業で勝負するための授業設計に有効なインストラクショナルデザインならびにオンライン授業の手法の一つである反転授業を紹介した。pp30-31
	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み―小学校学習指導要領改訂において―	共著	2019 年 2 月（平成 31 年）	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	中教審答申（2008）は思考する手順に焦点を当てた思考スキルが注目され，新学習指導要領でも各教科等の特質に応じて，「プログラミング的思考」の育成が求められる。そこで本研究ではプログラミング的思考に関する思考スキルを教科ごとに整理することで，各思考力がどの教科で身に付く機会があるのかを分析し報告した。
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望（1） － 全国の動向と本学の現状について －」	共著	2019 年 8 月（平成 31 年）	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	中等教科教育法（技術科）における教員養成において，本稿では，本教科としての教員養成の課題を概観するとともに，今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望（2）－ 教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について －	共著	2020 年 8 月（令和 2 年）	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し，本コースの免許状取得状況（2011-2018）や採用試験の合否，採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では，筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果，定期試験の成績別では採用試験の合否によって有意差が表れた。

	家庭科教育の住生活分野における地域とのつながりを意識した学習活動の研究 ー　学校周辺の住環境調査を通して誰もが快適な暮らしを考える　ー	共著	2020.8.29 （令和 2 年）	日本教育情報学会 第35 回年会論文集	工業高校での「創造基礎」の授業で取り入れていた自主性尺度や FFS 理論を取り入れて，チーム分けや生徒自身の成長度を確認した。本稿は，「プロゼロ」を学んだ生徒たちがゼミとは違う授業の中で，その手法をどのように活用し実践しているかを家庭科の授業を通して得た成果を報告した。
	グローバル人材育成を視野に入れた授業の研究（1）ー「主体的・対話的で深い学び」を主眼においた海外研修の考察 ー	共著	2020 年 8 月 （令和 2 年）	日本教育情報学会 第35 回年会論文集	主体的・対話的で深い学びを教育現場で具現化し，グローバル人材の育成を実践可能なものにするための研究として，グローバル人材に求められる資質を考察した。芦屋学園高等学校・中学校が，これまで実践してきた海外研修を振り返り明らかになった課題を提起した。また，海外の授業実践例もふまえたうえで，今後の海外研修が担うべき役割を考察した。
	「協働的な学びを取り入れた教職科目の授業設計　ー　教職新科目「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の開設に向けて　ー」	共著	2022 年 8 月 （令和 4 年）	日本教育情報学会 第38 回年会論文集	教職コアカリキュラムが改訂され，「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」は，「教育の方法及び技術（2 単位）」と「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法（1 単位または 2 単位）」に分割または包括した形での実施となる。本稿では，対面授業で実施した 2019 年度とコロナ禍のオンライン授業で対応した 2021 年度の授業アンケートより検証し，今後の新科目設置への対策について検討した。pp68-71
	教職課程における「闇バイト」防止に関する授業実践 ―効果的な教材及び授業方法の開発について―	共著	2025 年 8 月 （令和 7 年）	日本教育情報学会 第41 回年会論文集	社会経験の少ない若年層に拡大する「闇バイト」による匿名・流動型犯罪が社会問題化しており，教育現場における防止・啓発授業の重要性が指摘されている．本稿では教職課程履修者を含む大学生を対象とした「闇バイト」に関する意識調査をもとに，教育現場において防止・啓発授業を行うための教材及び効果的な授業方法の開発と授業実践について考察した。

	大学における自主性尺度の汎用的な活用方法 ― 学校種別のデータ比較と日本人学生と留学生の尺度分析の結果 ―	共著	2025 年 8 月（令和 7 年）	日本教育情報学会 第 41 回年会論文集	これまで，自主性尺度を開発して中高生の得点分布ならびに学業成績や個人の諸条件との関連性を分析し本学会（2005～2014 年）で報告してきた．本稿では，大学生を対象とした自主性尺度の授業活用により，ひとつに教職科目における自己分析とこの尺度を利用した教材化，ふたつに初年次教育におけるクラス編成での活用，さいごに留学生と日本人学生の因子比較した．これらの結果，自主性尺度の構成概念が文化を超えて一定の普遍性を持つ可能性が示唆された．
	(教育実践記録)				
	『学習情報研究（2009、3 月号）』「Ｗｅｂ活用によるフォトランゲージ手法　～　情報を構造化する力の育成　～」	単著	平成 21 年 3 月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	Web 上に発信された情報を学習教材として活用する場合、その情報の信憑性を精査しなければならない。言語情報の整合性を確認するのは容易であっても、視覚情報が与える影響は意図に反した解釈がなされる場合もある。フォトランゲージ（Photo Language）手法に応用し、授業実践で得た視覚情報の取り扱いに関する知見について述べた。pp1-2
	(学術論文記録)「職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) ― ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて ―」	共著	平成 29 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 14 回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、15 回の授業を通したアクティブラーニングの実施と技術科教員に必要な知識と実践力を対話的かつ主体的に身に付け、深化できる能力を求め、インストラクショナルデザインの知見を取り入れ実践を重ね知識と実践力を効果的に身に付けさせたいと考えた。本稿では、特に ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。pp28-29

	「教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ― 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 ―」	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表論文集	中学校技術科の教職科目において，授業設計を行うための授業デザインを論述した。特に，次期学習指導要領に掲載された，設計と試作について，学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について述べた。pp149-149
教育実習【技術】	(学術論文記録)「教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討 ― SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて ―」	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会 第 32 回年会論文集	教育実習は、実習生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である。一方で、多くの実習生は教育実習に対して様々な期待とともに悩みや疑問を抱いていることが多い。教育実習用 SNS を通じて様々なコミュニケーション活動を行い、実習生をはじめ 3 回生においても成果が得られた。教育実習支援モデルについての概要とその成果について報告した。pp24-27
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望（1） ― 全国の動向と本学の現状について ―」	共著	2019.8.24（平成 31 年）	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	中等教科教育法（技術科）における教員養成において，本稿では，本教科としての教員養成の課題を概観するとともに，今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望（2）― 教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について ―	共著	2020.8.29（令和 2 年）	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し，本コースの免許状取得状況（2011-2018）や採用試験の合否，採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では，筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ（前期）・Ⅳ（後期）」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果，定期試験の成績別にみると，採用試験の合否によって有意差が表れた。
	各教科の指導内容比較による技	共著	2026.3（令和 7 年）	芦屋大学論叢 85 号	調査できた先行研究からは，技術科を含めた中学校

	術科で優先して育むべき「資質・能力」の考察 ― 形態素解析を用いた学習指導要領（平成 29 年告示）解説の分析 ―				で指導する全教科について生徒に育ませる「資質・能力」を把握し，比較する事例が確認できなかった． 本研究では各教科の学習指導要領解説の比較を行うが，各教科を比較する際に属人性の影響を減らすべく，一定のアルゴリズムで処理する形態素解析を用いることを検討した．本研究では形態素解析が行える TM ツールを用いて，学習指導要領解説から抽出した語句より技術科で育ませる「資質・能力」とする語句を決め，出現回数を集計し，その語句の出現回数の多さを統計的手法（カイ二乗検定，調整済み残差）で比較することにより，他教科に比べて技術科で育ませた方が良い「資質・能力」と技術科で優先して指導すべきことについて考察した． Pp11-22

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書
教 育 研 究 業 績 書
令和 08 年 04 月 01 日 氏 名 池田 聡 ㊞

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1				
【その他(講演や発表)】 1 2				
【著書】1 (著書) 環境教育	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元:㈲神戸商大サービス 印刷・製本:㈱サンエー出版	小学校単位の取り組みを通じて、身近な環境教育を、地域性を踏まえ考えた。その例として学校園内に作られた「学校ビオトープ」を取り上げる。環境教育には、自然にふれ、人にふれることによって、他をおもいやる優しい心をもった心豊かな子どもたちが増えてくれることが重要である。本著では、ビオトープを通じての環境教育をまとめている。
【著書】2 (著書) 環境教育とエコツーリズム	単	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元:㈲神戸商大サービス 印刷・製本:㈱サンエー出版	エコツーリズムの定義には、様々な分野、機関、団体(観光、自然保護、地域振興、旅行業等)の考え方があり、明確な定義がないのが現状である。しかし、文献を調べる内にエコツーリズムの定義や目的を考える上で外すことのできない重要な定義事例や目的事例が見つかった。本著では、幾つかの定義例を紹介し、自分なりの解釈をしている。そして、修学旅行での実施の可能性を追究している。
【著書】3 (著書) 内発的動機づけによる大学教育	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元:㈲神戸商大サービス 印刷・製本:㈱サンエー出版	今日的な消費者志向の時代を受けた必然的な結果で、大学経営は困難な状況にあると言われている。 消費者志向を完全に受け入れるのか、それとも従来の教育サービスを提供するのかを問題に実例を挙げての定義をおこなって
【著書】4 (著書) チャレンジショップ教育 ーイベント的活動を中心にー	共	平成 19 年 3 月 31 日	現代社会と教育 出版元:㈲神戸商大サービス 印刷・製本:㈱サンエー出版	チャレンジショップ教育を実施している大学を例に挙げ現状の問題と今後、予想される問題の打開策をまとめている。
【著書】5 (著書) ラウンドワンと複合型店舗	共	平成 20 年 3 月 31 日	流通・マーケティング―1 つの契機として― 出版元:株式会社一灯館 印刷・製本:藤成印刷㈱	近年の多様化する娯楽産業の中からボーリング業界に焦点を絞り、業界最大手の「ラウンドワン」にテーマを絞り込んだ。 その歴史と複合型店舗の可能性及び今後の発展性をまとめている。

【著書】6 (著書) 温暖化対策とエコツーリズム	共	平成 20 年 5 月 30 日	地域経済と民族文化 日本民族経済学会編 出版社:現代図書	地球温暖化の原因を考察し、その対策に「エコツーリズム」を選択した。「エコツーリズム」には、その効果においての即効性は望めないが、実施の方法によっては持続的な効果を得ることができる。そのための人材育成の充実を中心に、教える側と教わる側の環境認識についての考察をおこなった。
【著書】7 (著書) 大学生の基礎教養	編著	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社一灯館 印刷・製本:藤成印刷株式会社 編著者:池田聡	昨今の大学教員には研究だけではなく、教育も重要な課題となっておりまた、テキスト作成に係わる業績も問われるようになった。この様な状況の中で他大学の教員や民間有識者の協力の下、様々な分野から大学生の基礎教養を考えてもらい、一冊にまとめている。
【著書】8 (著書) 環境問題と教育の重要性について	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社一灯館 印刷・製本:藤成印刷株式会社 編著者:池田聡	メディアを通して報道される環境問題は正しい知識を持っていなければ誤った解釈をしかねない。そのためには、学校での環境教育が重要となり、各年代に合わせた教育も重要となる。このような考えから学校教育における体験型の教育を考察している。
【著書】9 (著書) 学校教育における旅行型環境教育	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社一灯館 印刷・製本:藤成印刷株式会社 編著者:池田聡	実践型の環境教育であるビオトープの重要性について学校教育を通して考え、得た知識をいかに教育的効果が高い修学旅行に活かせるのかを考察している。
【著書】10 (著書) 心配り・心遣いを学ぶ	単	平成 22 年 4 月 1 日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社一灯館 印刷・製本:藤成印刷株式会社 編著者:池田聡	人間関係の希薄化が影響でコミュニケーション能力の低下が問題となっている。学生時代にはこの問題を解決する絶好の機会である。大学生活での気配り・心遣いを考察している。
【著書】11 (著書) 継承 ― 夢へのスタート ―	単	平成 24 年 3 月 10 日	芦屋大学卒の事業家たちの教え 出版元:株式会社晃洋書房 発行者:上田芳樹 印刷者:藤森秀夫 編者:芦屋大学経営教育学部 芦屋大学ビジネス研究 センター	芦屋大学で学び卒業後に事業家として活躍する数名をピックアップし、在学生に講義の一環として体験談を語ったものであり、本著は山陽企業株式会社の代表取締役である吉岡一博氏の経営哲学や経営方針をインタビュー形式でまとめたものでる。
【学術論文】1 (修士論文) 地球の砂漠化の現状と原因に関する一考察 ー中国大陸を中心としてー	単	平成 14 年 3 月 31 日	芦屋大学大学院	中華人民共和国山西省大同における植林作業を通して、中国の一般的な農民の生活と水質源の枯渇の深刻さを身近に感じた。また食糧問題と砂漠化の現状の根底は同質であるとの視点から、特に植林の重要性について考察した。
【学術論文】2 (学術論文) 環境教育に関する一考察 ー中学生の環境認識ー	単	平成 18 年 3 月 31 日	芦屋大学論叢 第 43 号	以前に中学生を対象に実施したアンケートを基に生徒とその家族の環境問題についての認識と今後の環境教育についてのあり方について考察している。

【学術論文】3 (学術論文) 環境教育とエコツーリズム ー学校教育を中心としてー	単	平成 20 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 13 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社荒川印刷	平成 19 年度 8 月に名古屋学院大学にて行われた日本産業科学学会全国大会にて報告したテーマをまとめた著書。内容としては、昨今、問題になっている温暖化対策のひとつの打開策としてエコツーリズムを取り上げて、学校教育、特に修学旅行においての実施の可能性と問題点の提議をおこなっている。
【学術論文】4 (学術論文) 環境初年度における国際会議と温暖化対策 ― エコツーリズムを中心として ―	単	平成 21 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 14 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社荒川印刷	気候変動枠組み条約第 3 回締約国会合(COP3)で採択されている「京都議定書」では温室効果ガスの排出量を 2008 年度から 2013 年の 5 年間で各国とも規定の数量を削減することが決定している。この影響を受け、2008 年度はメディアを通して環境問題に対する様々な対策が報道され国民の環境に対する認識も高まっている。 2008 年度を環境初年度と位置づけ、国際会議のあり方を考えエコツーリズムを中心とした環境対策について考察している
【学術論文】5 (学術論文) 児童虐待の現状と防止対策 ―富山県を中心として―	共	平成 22 年 12 月 12 日	芦屋大学論叢 第 54 号	児童虐待の現状を中心に、虐待の種類、母親の育児負担、その問題の原因を考察し、現場の最前線で問題に直面している児童福祉司・子育て支援職員等の人物にヒアリング調査し、富山県を中心に考察している。
【学術論文】6 (学術論文) 長期宿泊における体験型環境教育 ―青少年の現代的課題を中心として―	単	平成 25 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 18 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社荒川印刷	長期集団体験活動において体験型環境教育の意義と目的について青少年の現代的課題と問題点を中心に今後の活動についての考察をしている。
【学術論文】7 (学術論文) 発育期における子どもの現代的運動課題について	共	平成 26 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 19 号 発行所:日本産業科学学会(本部事務局) 出版所:株式会社荒川印刷	生活環境の変化に伴い子どもの発育と運動能力、健康問題を課題とし、あそび・レクリエーション・自然活動を通して問題解決を考察している。
【学術論文】8 (学術論文) ケース・メソッド教育とキャリア教育	共	平成 27 年 3 月 31 日	高田短期大学紀要 第 33 号	ケース・メソッド教育を用いた実践的なキャリア教育について事例を参考に今後の発展性を考察している。
【学術論文】9 (学術論文) スポーツツーリズムの現状と課	単	平成 27 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 20 号 発行所:日本産業科学学会 出版所:株式会社荒川印刷	これまで技術大国・物づくり大国として国際社会の中で不動の位置を確立してきた我が国は、東日本大震災による原発事故以降第 3 次産業に着目してきた。2007 年観光立国基本法が施行されさらなる方向性の変化が急速に進みつつある。本研究はスポーツに特化した旅行形態である「スポーツツーリズム」の現状と課題を主題とし、2020 年に東京で開催が決定したオリンピック・パラリンピックの波及効果についても今後の研究としている。
【学術論文】10 (学術論文) 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2) ―5 年間の「大学生活入門」を通した省察―	共	平成 28 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 32 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。

【学術論文】11 (学術論文) 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	単	平成 29 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第 22 号 発行所:日本産業科学学会 出版所:株式会社荒川印刷	人間社会から考察する環境の構成を明確にし、地球規模での環境変動と時系列、産業革命以降の環境問題、地球温暖化を中心に見解を考察している。
【学術論文】12 (学術論文) 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) ―運用マネジメントおよび学習活動の質的評価に関する考察―	共	平成 29 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 33 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。(2)の継続研究。
【学術論文】13 (学術論文) スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめた内容でスマート化社会を大学生がどの様に捉えているかの調査をまとめたものである。
【学術論文】14 (学術論文) 地域環境と安全教育 ―社会性昆虫とその特性―	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめたものである。社会性昆虫の中からハチにテーマを絞り、その危険性、習性等対策と駆除についてまとめたものである。
【学術論文】15 (学術論文) 「中学校技術科の教材開発におけるSDGsとの関連(1) ―理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて―」	共	令和2年 3 月 1 日	情報コミュニケーション学会 第 17 回全国大会 発表論文集	
【学術論文】16 (学術論文) 江戸時代と現代の環境問題に関する考察	単	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会 第 36 回年会誌	現代の大量消費型社会とは大きく異なり、わずかなエネルギーしか消費しなかった江戸時代に注目しており、自然的起因と人為的起因の内訳は人為的起因を中心に述べ、省エネに貢献したであろう当時の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について考察している。
【学術論文】17 (学術論文) 江戸時代の循環型社会―衣類と灰その中心的人物―	単	令和 3 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第	人為的起因の視点から現在とは異なり、循環型社会が構築できていた江戸時代を中心に、衣類における最終形態とも呼べる「灰」に注目し、この循環型社会構築の中心となった人物を中心に論じている。
【学術論文】18 (学術論文) 持続可能な会社経営についての一考察 - 経営者アンケートを中心として-	単	令和 3 年 8 月 22 日	日本教育情報学会 第 37 回年会誌	持続可能な社会の実現を目指し、近年多くの企業が積極的にSDGsを取り入れている。 会社経営者 30 名からのアンケートを元に CSR など企業の社会的責任についての考え方や今後の会社経営について多様な業種の経営者からその方向性についての考え方をまとめたものである。
【学術論文】19 (学術論文) 商人の精神と理念についての一考察 ー『日本永代蔵』を中心としてー	単	令和 4 年 3 月 31 日	芦屋大学論叢 第 75 号	持続可能な会社経営について、井原西鶴の『日本永代蔵』を参照しながら論じている。そこに登場する江戸時代の代表的な商人の中から、三井八郎右衛門高平をモデルとした「昔は掛算今は当座銀」(巻一ノ四)と富山家をモデルとした「才覚を笠に着る大黒」(巻二ノ三)を比較している。どちらのモデルになった商人も伊勢商人であり、江戸を代表する豪商で同じ伊勢を地盤として、木綿を商品として扱いながら，現在も継続する企業と残念ながらそうはならなかった企業の違いは何なのかを明確にし、持続可能な会社経営における手掛かりを考察している。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

【学術論文】20 (学術論文) 企業倫理についての一考察 ―倫理と資本主義―	単	令和4年 8月20日	日本教育情報学会 第38回年会誌	江戸時代から現代まで継続している企業と残念ながら継続できなかった企業について、その代表的な企業倫理や経営倫理を比較研究することを目的とした。また、商人のあるべき姿を唱えた代表的な人物とこの考えに比較的近い現代の考えをまとめ、今後の企業のあるべき姿を考察している。
【学術論文】21 (学術論文) 商人の倫理教育 ー石門心学を中心としてー	単	令和5年 8月26日	日本教育情報学会 第39回年会誌	江戸時代の思想家である石田梅岩(1685～1744年)が唱えた心学(石門心学)について『都鄙問答』を中心に梅岩の求道者(くどうしゃ)としての生涯を中心にまとめている。現在では、(石門心学)を元に(商人道徳の考え方を中心として)日本的資本主義の祖との位置づけがなされる事も多く、『都鄙問答』から商人の倫理教育と現在につながる日本的経営倫理学を論じている。
【学術論文】22 (学術論文) 石門心学と商人倫理ー『都鄙問答』を中心としてー	単	令和6年 8月25日	日本教育情報学会 第40回年会誌	石田梅岩の講義や教えを整理・編纂して問答形式に纏めたものが『都鄙問答』である。今日的見解として梅岩は商人道徳を説いた人物として一般的に知られているが、それだけではない。梅岩がこれまで培ってきた思想体験を中心に「孝」の道をはじめ,医師・武士・僧・学者といったあらゆる階層の倫理道徳についても論じられている。梅岩が唱えた論に対する考察をしている。
【学術論文】23 (学術論文) 日本の為政者の倫理観―江戸時代の随筆にみる正直と質素・倹約―	単	令和7年 8月30日	日本教育情報学会 第41回年会誌 P306～P307	江戸時代の随筆とは、江戸時代を生きた幅広い広い人々の見聞・述懐・紀行・考証をまとめたもので,筆者の意見や感想といったものは述べられていないものが多く、客観的な視点から当時あった事柄をまとめたものである。第一期二十三巻、第二期二十四巻、第三期二十四巻の中から正直と質素・倹約に該当するものを選別し、統治者であった江戸時代の為政者(いせいしゃ)の質素・倹約について考察する。
【学術論文】24 (博士学位論文) 持続可能な企業経営の思想的基盤―日本的企業倫理の源流―	単	令和8年 3月19日	―	昨今の国際情勢は、持続可能な社会の実現に向けて大きく動き出している。特に、気候変動をはじめとする環境問題は、人類全体で取り組むべき課題として広く認識されている。このような背景のもと、温室効果ガスの排出を実質ゼロにする「2050年カーボンニュートラル」の実現は、日本および世界経済の長期的な成長を支える原動力となるとの見方が広がっている。このように、持続可能な社会を目指すにあたっては、CSR(企業の社会的責任)を本質的に捉え直すことが重要である。本論では、CSRの根幹にある持続可能な企業経営の理念の原点を、江戸時代の日本的商人倫理に見出し、現代企業に求められる社会的責任のあるべき姿を模索することを目的とした。上記の課題意識に基づき、個人の取り組みにとどまらず、企業や組織といった社会の中核をなす存在に焦点を当てている。具体的には、井原西鶴の『日本永代蔵』に描かれた商人の思想、商人・商家のあるべき姿を説いた石田梅岩の心学、そして江戸時代の随筆に見られる倫理観に着目し、当時の商人や為政者に求められた倫理的価値観を考察した。さらに、近代における渋沢栄一の『論語と算盤』に表れた「道徳経済合一説」や、近年マルクス・ガブリエルが提唱する「倫理資本主義」との関連性についても比較検討を行う。こうした視点から、江戸時代の日本的商人倫理に立ち返り、日本的経営倫理の根幹を探ることで、現代における持続可能な企業経営のあり方を考察している。
【その他(講演や発表)】2 (学会報告) 中学生を中心とした環境認識に関する調査 「大阪・神戸の中学校を対象として」	―	平成17年 10月1日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	環境問題に対する認識調査を大阪と神戸の中学校に通う2年生(200名)を対象に実施した。調査の結果で得たものを今後の学校教育に取り入れていかに実践的な環境教育を教育現場で実施できるかの学会報告。

【その他(講演や発表)】3 (学会報告) 環境教育に関する一考察 (大阪・神戸の中学校を対象として)	―	平成 18 年 5 月 6 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:追手門学院大学	教える側である教師と教わる側である生徒の環境問題に対する認識を高めなければ実践的な環境教育を行うことは不可能である。現状の問題と今後の課題についての報告。
【その他(講演や発表)】4 (学会報告) 学校教育におけるエコツーリズムの可能性	―	平成 18 年 9 月 30 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋市上宮川文化センター	環境と観光の両分野を含むエコツーリズムを学校教育の現場で実施するための問題点を例に挙げての学会報告。
【その他(講演や発表)】5 (学会報告) 学校教育とエコツーリズム ― 修学旅行での実施の可能性 ―	―	平成19 年 3 月 17 日	日本産業科学学会 中部・関西合同部会 開催場所:追手門学院大学	近年の修学旅行は数年前に比べると教育的意味合いや目的も変化しており、また多様化している。この修学旅行でのエコツーリズム実施の可能性についての部会報告。
【その他(講演や発表)】6 (学会報告) 環境教育とエコツーリズム －学校教育を中心として－	―	平成 19 年 7 月 28 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:名古屋学院大学	昨今、メディアを通じて報道されている環境に関する諸問題を例に挙げ、問題解決の一つの方策としてエコツーリズムに注目した。日本産業科学学会全国大会での
【その他(講演や発表)】7 (学会報告) 温暖化対策とエコツーリズム	―	平成 19 年 12 月 15 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	平成 20 年度 3 月に出版予定の著書「温暖化対策とエコツーリズム」についての報告であった。環境に関する諸問題を正しい方向に進めていくために人材育成の重要性を中心に報告している
【その他(講演や発表)】8 (研究ノート) ≪研究ノート≫ 実践的商業教育の取り組み	共	平成 20 年 6 月 16 日	芦屋大学論叢 第 48 号	某大学における実践学習の成果と反省点を 1 つのモデルとして、商業実践に関連する教育サービスの拡大と他大学での実施の不可を学習の意義を含めてその教育成果について考察している。
【その他(講演や発表)】9 (学会報告) 温暖化対策とエコツーリズム －環境初年度における国際会議を中心として－	―	平成 20 年 8 月 23 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:芦屋大学	「京都議定書」で採択された温室効果ガス排出量削減が始まる 2008 年～2012 年における各地の対策また、2013 年以降の目標について国際会議を中心にその対策としてエコツーリズムを導入した場合の効果についての学会全国発表
【その他(講演や発表)】10 (講演) マーケティング調査と環境問題	―	平成 21 年 11 月 18 日	開催場所:三重短期大学	―

【その他(講演や発表)】11 (研究ノート) 児童虐待の現状と防止対策	共	平成 22 年 6 月 12 日	芦屋大学論叢 第 53 号	児童虐待により、悲惨な報道がされる昨今において、その傾向を中心に考察している。また、事例を加えながらその対策についても考察している。
【その他(講演や発表)】12 (研究ノート) エコツーリズムにおける環境教育の現状と課題	単	平成 23 年 6 月 14 日	芦屋大学論叢 第 55 号	エコツーリズムの現状とツアーで実施される内容にどうのような教育的効果があるのか。世界的な視点から日本の現状を考察している。
【その他(講演や発表)】13 (学会報告) 長期宿泊における体験型環境教育	―	平成 24 年 4 月 21 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:高田短期大学	学校教育における体験活動の現状と青少年の現代的課題を中心に文部科学省が平成 23 年に位置づけた「長期集団体験活動」の取組みについての部会報告である。
【その他(講演や発表)】14 (学会報告) 長期宿泊における体験型環境教育 ―青少年の現代的課題を中心として―	―	平成 24 年 8 月 26 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:芦屋大学	平成 24 年 4 月 21 日実施の関西部会において報告した長期宿泊における体験型環境教育に青少年の現代的課題と実施の問題点を中心とした学会報告である。
【その他(講演や発表)】15 (学会報告) 体験型環境教育から考察した 子どもの現代的課題について	―	平成 25 年 4 月 20 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	体験型環境教育を実施するにあたり、子どもの成長段階において必要な運動能力と精神機能についての生体リズムを「スキャモンの発達・発育曲線を参考に報告している。
【その他(講演や発表)】16 (学会報告) 観光立国におけるスポーツツーリズム	―	平成 26 年 4 月 12 日	人材活用研究会 関西部会 開催場所:近江八幡商工会議所	2007 年に観光立国宣言をした我が国におけるスポーツツーリズムの発展と今後の展開についての報告をしている。
【その他(講演や発表)】17 (学会報告) スポーツツーリズムについて	―	平成 26 年 4 月 19 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学大阪キャンパス	過去 10 年間の訪日外客数を調査し、その目的と希望を考察している。また、国際大会等のイベントを調査し 2020 年、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでの訪日外客者数増の可能性についての学会報告。
【その他(講演や発表)】18 (学会報告) 地域の特性を活かしたスポーツツーリズム	―	平成 26 年 8 月 23 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:青森公立大学	地域に特化したスポーツツーリズムの現状と課題を考察し継続的なスポーツツーリズムの在り方についての学会報告であった。

【その他(講演や発表)】19 (学会報告) 環境の構成と保全管理	―	平成 28 年 5 月 13 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:大阪産業大学	環境の構成を明確化し、地球規模での気候変動及びその影響による生命の変化について現状の生命体の中で高度な知能を持つと考えられる人間(ホモサピエンス)の観点から環境保全管理を考察している。
【その他(講演や発表)】20 (学会報告) 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	―	平成 28 年 8 月 21 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:大阪産業大学	環境の構成と人間社会の関わり合いを明確にし、地球に与える影響を人為起因と自然起因と線引きし、その関わり合いについて全国大会での報告であった。
【その他(講演や発表)】21 (新聞記事掲載) 教育学術新聞 「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援、芦屋大学『大学生活入門』基礎演習Ⅰpp3」	―	平成 29 年 3 月 8 日	教育学術新聞 平成 29 年 3 月 8 日掲載	本学で実施している1回生の講義「基礎演習」を取り上げた新聞掲載。少人数教育を活かしたコミュニケーション能力向上を目的とする講義内容に関連させた記事である。
【その他(講演や発表)】22 (学会報告) ファッション業界を支える職人 ※ゼミ生指導報告	―	平成 29 年 12 月 16 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大学	ファッション業界の現状と日本の産地と文化について実地調査を踏まえての学会報告となっている。(指導教員として)
【その他(講演や発表)】23 (学会報告) 日本における社会性昆虫による年間被害と損害	―	平成 30 年 9 月 1 日	日本人間関係学会 第 59 回関西地区大会 開催場所:大阪体育大学同窓会館(アネックス)	社会性昆虫に襲われる危険性は、ある一定の割合で毎年必ず確認されており、最悪の場合は死亡に繋がるケースも珍しくない。その種類及び習性、活動時期、襲われる危険を伴う行動等、その対策と駆除、また損害賠償等を含めた内容についてのハチを例としての報告。発表者の体験例及び法律と判例の解説を加え、毎年のハチによる死に至るケースを含め被害があること、行政の対応は地域により異なること、ハチの駆除には経済的負担と危険が伴うこと、私有地にあるハチの巣による被害が発生した場合損害賠償責任の可能性があることを結論とした。
【その他(講演や発表)】24 (研究ノート) 女性の雇用問題と政策に関する一考察 ―女性を取り巻く社会環境―	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢第 70 号	女性の社会進出増加により、雇用者全体に占める女性比率も上昇傾向にあり、現在では約 4 割を占めるに至っている。現代の働く女性の労働環境及び子育て等の問題点を考察し、法整備を含めた今後の展開を研究目的としている。
【その他(講演や発表)】25 (学会報告) 地域環境と安全教育 ―社会性昆虫とその特性―	―	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会 開催場所:岡山理科大学	社会性昆虫の中からテーマをハチに絞りその危険性、種類、習性、活動時期、襲われる危険性を伴う行動等、その対策と駆除についての報告。
【その他(講演や発表)】26 (学会報告) 江戸時代の循環型社会―古着屋・紺灰業を中心として―	―	令和 2 年 8 月 29 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:リモート	江戸時代の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について報告した日本教育情報学会第 36 回年会の中から古着屋・紺灰業を中心に考察することを目的として述べている。

【その他（講演や発表）】27 （公開講座） SDGs（持続可能な開発目標）から考える次世代に伝えること	—	令和３年 ２月 22 日	芦屋大学公開講座 開催場所：芦屋市立公民館	貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が豊かさを享受できる持続可能な社会を 2030 年までに実現するという統一目標（SDGs）が国連で採択され数年となり、その考え方や取組は徐々に浸透してきている。生物間・世代間・世代内倫理の観点から次世代に伝えることを考える。
【その他（講演や発表）】28 （雑誌掲載） 環境問題と江戸の循環型社会	単	令和３年 ３月 31 日	中部大学大学院 GLOCAL2021	昨今問題となっている温暖化や砂漠化などの多様な環境問題は、産業革命以降に浮き彫りとなってきた、我々に直接ないし間接的に影響がある問題である。本論では、現在とは異なり、循環型社会が 構築できていた江戸時代に焦点を絞り人為的起因からの視点で論じている。
【その他（講演や発表）】29 （学会報告） 灰循環の比較研究	—	令和３年 ３月 14 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所：大阪学院大学（zoom 対応）	地球に与える人為的起因の視点から江戸時代に注目し、完全な循環型社会を構築していた当時の時代背景及び灰の循環についての見解を述べた報告。
【その他（講演や発表）】30 （学会報告） 持続可能な会社経営についての一考察 - 経営者アンケートを中心として-	—	令和３年 ８月 29 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：岐阜 （zoom 対応）	企業（会社）と SDGs・企業の社会的責任（CSR）・持続可能な会社経営を経営者はどの様に考えているのかを経営者の考えとしてまとめている。また、日本で SDGsは今後も浸透していくのかについての見解を述べた報告。
【その他（講演や発表）】31 （学会報告） 企業の社会的責任（CSR）についての一考察 - 地域連携を中心として-	単	令和３年 10 月２日	日本世代間交流学会 第 12 回全国大会 開催場所：追手門学院大学	会社・企業に関連させその創業理念、経営方針などを中心に、CSR（企業の社会的責任）について現役の会社経営者の考えを知るべく2021年6月に実施したアンケートの調査結果、井原西鶴の『日本永代蔵』に登場する商人などの思想等、江戸時代に商人・商家のあるべき姿を説いた石田梅岩の心学や、近江商人の「三方よし」などの経営哲学から持続可能な経営に関して現代まで受け継がれているその思想に関連させた報告。
【その他（講演や発表）】32 （学会報告） 企業倫理についての 一考察 ―倫理と資本主義―	—	令和４年 ８月 21 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：十文字学園女子大学	持続可能な企業経営を意識し、『日本永代蔵』を中心とした商人の代表例を比較、現代にも通じる経営者の企業倫理に関する報告。
【その他（講演や発表）】33 （学会報告） 商人の倫理教育 －石門心学を中心として－	—	令和５年 ８月 27 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：神戸国際大学	石田梅岩の石門心学を『都鄙問答』を中心に商人の倫理教育と現在につながる日本的経営倫理学との関連性について述べることを目的とした報告。
【その他（講演や発表）】34 （学会報告） 心学と商人倫理 －『都鄙問答』を中心として－	—	令和６年 ８月 25 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：青山学院大学	石田梅岩がこれまで培ってきた思想体験を中心に「孝」の道をはじめ，医師・武士・僧・学者といったあらゆる階層の倫理道徳についての報告。
【その他（講演や発表）】35 （学会報告） 江戸時代の随筆にみる正直と質素・倹約	—	令和７年 ８月 30 日	日本教育情報学会 全国大会 開催場所：大阪教育大学	江戸時代における正直と質素・倹約について、江戸時代の随筆に用例を見いだし、正直と質素・倹約が、当時どのように捉えられていたのかという視点からの報告であった。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　齋 藤　　治

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 昆虫高速応答計測装置での移行システム検討 ～Pokeys57E 導入検討での事前評価～	単	令和 7 年 3 月	芦屋大学論叢 83 号	8 (8) P81-88	筆者が経年変化を迎えた芦屋大学環境生理学実験室で使用している観測 PC の後継システムとして、PLC 装置と同等の機能を有する性能の検証を行った。エネルギー変換領域での実用的な代替システム検討導入での実践的応用事例。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 自動車用鉛式 Battery への常時補充電システム導入-常時トリクル充電状態を保つ-	単	令和 5 年 3 月	芦屋大学論叢 78 号	12 (12) P49-60	筆者が、近年での自動車用鉛バッテリー短命化防止のための補充電装置導入にあたり、実用的な充電装置開発概要事例を紹介。エネルギー変換領域での実用的かつ産業用装置への具体的改善装置を開発していく上での実践的な教材事例を紹介。スイッチング電源装置を用いた実用的応用事例。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ 小学校理科教育における活動記録措置の導入報告～簡易ミニ電卓を用いた計測カウンタの教員免許状更新講習講座での利用事例～	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	4(6) P119-124	齋藤治、黒木出、渡康彦 齋藤治がベースの昆虫行動観測装置を開発した接続端末に、簡易ミニ電卓を用いたインターフェイスの導入を実施した記録。エネルギー変換領域での具体的な実践教材事例を紹介。ミニ電卓のイコールキーをカウントアップカウンタとして格安の計測装置の作成事例を紹介した。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	(抽出不可) (2)	齋藤治、森嵜功、森下博行 ハンダを用いず、電子回路図から実体配線を展開学習する際に有用となる教材の考え方を述べている。エネルギー変換分野での電子回路実習教材のコア的教材論を述べた。電子部品回路接続にハンダを使わず、再利用可能な教材として構築しているのが特徴。
電気電子工学Ⅰ	＜学術論文＞ 演習用合成抵抗ボードを用いた電気配線構築力育成の考察	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会	(抽出不可) (2)	森嵜功、齋藤治、渡康彦 電気回路配線技術の基本習得となる合成抵抗計算と実習に関する論述。エネルギー変換分野での基礎コア領域教材となる考察である。電気抵抗の計算の基本は合成抵抗接続回路にあり、その実習教材の展開を学習者自身が理解するための実用教材。

芦屋大学

電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ アクトグラフを用いたタマネギバエの自然条件下での歩行活動の記録	共	平成 27 年 7 月	芦屋大学論叢第 63 号	1(10)	渡康彦、齋藤治、田中一裕 筆者らが持つ専門電子技術およびソフトウェアが特異な生物学研究分野での装置作成と実務運用に帰する論文の紹介。(執筆担当部分:実用的専門的計測装置の紹介と開発過程の記述が、エネルギー変換分野においての応用電子装置の紹介(p34-35)となる。
Ⅰ 電気電子工学Ⅰ実験実習	＜学術論文＞ 齋藤治、C++MFC によるアクトグラムソリューションの移植構築	単	平成 26 年 1 月	芦屋大学論叢第 60 号	9(9)	筆者の持つシステムエンジニアリング技術、C++言語にて電子応用装置であるアクトグラム装置の全移植構築をした記述内容。エネルギー変換分野では、実務、応用電子分野での開発過程を論述している箇所に有意性がある。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	＜学術論文＞ ブレッドボード配線方式による電子回路作成の技術教育	共	平成 25 年 8 月	日本産業教育学会第 56 回全国大会(山口)	(抽出不可) (1)	齋藤治、渡康彦、藤本光司 筆者の教育現場で実演しているハンダ付けを必要としないブレッドボードによる電子回路学習作製状況を発表。エネルギー変換分野での電子回路論理の理解と配線技法修得に学習者の躓き易いポイントを提示、紹介(P41)した。

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 【学術論文】				
＜学術論文＞ 昆虫高速応答計測装置での移行システム検討 ～Pokeys57E 導入検討での事前評価～	単	令和 7 年 3 月	芦屋大学論叢 83 号	筆者が経年変化を迎えた芦屋大学環境生理学実験室で使用している観測 PC の後継システムとして、PLC 装置と同等の機能を有する性能の検証を行った。エネルギー変換領域での実用的な代替システム検討導入での実践的応用事例。
＜学術論文＞ 自動車用鉛式 Battery への常時補充電システム導入-常時トリクル充電状態を保つ-	単	令和 5 年 3 月	芦屋大学論叢 78 号	筆者が、近年での自動車用鉛バッテリー短命化防止のための補充電装置導入にあたり、実用的な充電装置開発概要事例を紹介。エネルギー変換領域での実用的かつ産業用装置への具体的改善装置を開発していく上での実践的な教材事例を紹介。
＜学術論文＞ 小学校理科教育における活動記録措置の導入報告～簡易ミニ電卓を用いた計測カウンタの教員免許状更新講習講座での利用事例～	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	齋藤治、黒木出、渡康彦 齋藤治がベースの昆虫行動観測装置を開発した接続端末に、簡易ミニ電卓を用いたインターフェイスの導入を実施した記録。エネルギー変換領域での具体的な実践教材事例紹介。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8年 3月 11日

氏 名 中 村 宏 敏

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1 2				
【その他(講演や発表)】 1 学生拳法リーダーズ研修会 1996～2026 年	単独	1996 年,1997 年 1998 年,1999 年 2000 年,2001 年 2002 年 2003 年 2004 年 2005 年 2006 年 2007 年 2008 年 2009 年 2010 年 2011 年 2012 年 2013 年 2014 年 2015 年 2016 年 2017 年 2018 年 2019 年 2020 年 2021 年 2022 年 2023 年 2024 年 2025 年 2026 年 毎年 3 月実施	全日本学生拳法連盟 於いて ラマダホテル 大阪キャッスルホテル	学生拳法におけるデータ整理と伝達方法について、ホームページをどう活用するか、メールのマナーなどを各大学の主将や主務に毎年講演
2.「協働的な学びを取り入れた教職科目の授業設計 ー 教職新科目「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の開設に向けてー」	共	令和 4 年 8 月 20-21 日	日本教育情報学会 第 38 回年会論文集(十文字学院大学)	教職コアカリキュラムが改訂され,「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を 含む。)」は,「教育の方法及び技術(2 単位)」と「情報通信技術を活用した教育の理論及び方 法(1 単位または 2 単位)」に分割または包括した形での実施[1]となる。本稿では,対面授業で実施した 2019 年度とコロナ禍でオンライン授業(筆者の実践では,遠隔授業と記載する)で対応した 2021 年度の授業アンケートより検証し,今後の新科目設置への対策について検討した。
3.「新設「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の対応と課題」	共	令和 4 年 8 月 20-21 日	情報コミュニケーション学会第 19 回全国大会	昨今、中央教育審議会(中教審)を中心にして、Society5.0 や AI 時代に対応した教員養成に対する 提言や答申が頻繁に出されている。確かに次の時代に対応できる教員養成カリキュラムの開発や整備・制度は喫

				緊の課題と考える。本稿では、新しい教員養成コアカリキュラムへの対応と課題について報告する。

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和８年４月１日

氏 名　森 下 博 行

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　要
芦屋大学卒の事業家たち	共著	2006 年 9 月	晃洋書房 (pp133～151)	芦屋大学を卒業し、会社の経営者として活躍されている0Bたちに、大学時代の想い出や現在の会社現況などについて、複数の教職員によるインタビュー記事。 共著者:政岡勝治、森下博行、他7名 本人担当部分:「第8章」を単著。 本学を卒業し、現在、会社の経営者として活躍されている 0B に学生時代の思い出や経営者としての苦労話、学生達へのメッセージ等について纏めたもの。
芦屋大学卒の事業家たちの教え	共著	2012 年 3 月	晃洋書房 (pp130～145)	「芦屋大学卒の事業家たち」の続編として、本学を卒業し、事業継承者や起業をしている卒業生たちにインタビューした記事。 共著者:政岡勝治、森下博行、他10名 本人担当部分:「第9章」を単著。 学生時代の思い出や会社の経営者として活躍されている 0B たちに、大学時

				代の想い出学生時代の思い出や経営者としての苦労話、学生達へのメッセージ等について纏めたもの。
日本語ワープロ検定試験操作マニュアル	単著	2002 年 3 月	芦屋大学情報処理研究室 (pp1～31)	情報機器および情報処理の授業を受講する学生に効率よく操作技術が身につくように独自に作成編集した操作マニュアル。
【学術論文】 附属高等学校の生徒におけるパソコンに対する意識調査研究(その 1) (査読付)	単著	1997 年 3 月	芦屋大学論叢 第 26 号 (pp63～74)	前回(芦屋大学論叢第 40 号で報告)の結果をふまえて芦屋大学付属高等学校の生徒に対し、パソコンに対して性別や興味・関心度について、クロス集計した結果を考察した。
Longitudinal Study Of The Ability To Choose Methodically Among Occuppations By Women Senior High School Students －Nine Year Study(1987～1996) － (査読付)	共著	1997 年 11 月	芦屋大学論叢 第 27 号 (pp25～36)	神戸の女子高等学校で、1987～1989の3カ年にわたり、選職能力テストを実施した。卒業後の1996年に再度テストを行い、過去のデータと照らし合わせ、就いた職業に変更があったかどうかについて考察した。 本人担当部分:オフコンでのデータ処理および抽出 共著者:西田泰和、吉田孝夫、塚本邦昭、中村宏敏、森下博行
操作技術に終始しない情報処理教材の開発実践研究(その 1) －文化系女子短期大学における LAN/Visual Basic プログラミング教育の実践研究－ (査読付)	共著	1998 年 3 月	芦屋大学論叢 第 28 号 (pp45～58)	芦屋女子短期大学の学園祭で、コンピュータ学群の展示作品として、「イントロクイズ大会」を開催した。その時に使用したソフトウェアの開発手順や、実際のコンピュータの稼働画面、反省点などについて考察した。 本人担当部分:Visual Basicでのプログラミングおよびデバッグ 共著者:魚崎裕之、竹田直之、森下博行
文化系大学における情報教育の内容構成に関する基礎的研究(その 1) －情報教育の体系化と資格の位置づけ－ (査読付)	共著	2004 年 3 月	芦屋大学論叢 第 40 号 (pp1～16)	芦屋大学及び芦屋女子短期大学学生、大学院生らに対して、これまでのコンピュータの操作経験、興味・関心、コンピュータ関連資格に関する考え方などについて考察した。 本人担当部分:アンケート調査によるデータ分析 共著者:魚崎裕之、森下博行

高等学校普通教育における「情報科」の課題 －高校生のコンピュータに対する意識調査から－ （査読付）	共著	2005 年 3 月	芦屋大学論叢 第 41 号 （pp67～82）	京阪神の某私立高等学校に通う1年生から3年生を対象に、主にホームルームの時間を利用してコンピュータに関する意識について調査し、その結果について考察した。 本人担当部分：アンケート調査によるデータ分析 共著者：森下博行、魚崎裕之、東健一
自己表現についての一考察 －本質・方法・教育の視点から－ （査読付）	単著	2007 年 6 月	芦屋大学論叢 第 45 号 （pp79～90）	近年、自己表現能力の向上が求められている。就職難から自分自身をより良くアピールすることの重要性や、成果主義の浸透に伴い分かる形で表現する必要性が出てきたからである。このような社会的ニーズに対応するために大学教育にも自己表現の導入が必要だと考え、その育成方法について考察した。
初等教育における情報教育の考え方 （査読付）	単著	2015 年 1 月	芦屋大学論叢 第 62 号 （pp83～92）	近年の教育を取り巻く環境を構成する種々の要素の中で、最も変化・進化の度合いが著しいものの一つに「情報」がある。日本では平成元年以降、インターネット利用の一般化に歩調を合わせるように携帯電話が普及してきた。同時にインターネットの発展は学校に通う児童生徒にさえ危険を与えるに至ってしまっている。初等教育においての情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。
ICT 教育についての一考察 （査読付）	単著	2016 年 1 月	芦屋大学論叢 第 64 号 （pp61～70）	大学教育にICTを導入すべく考察した。初等教育においての情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。
ICT 環境における自己表現力の育成について －児童・生徒への情報機器を用いた自己表現方法－ （査読付）	共著	2016 年 7 月	芦屋大学論叢 第 65 号 （pp91～98）	近年、自己表現能力の向上が求められており、社会的なニーズや大学教育にも自己表現力の導入が求められている。その育成方法として、ICTの活用を前提とした表現力の育成について考察した。 本人担当部分：講義の中で実践演習として取り入れその成果を調査した

				共著者:塚本邦昭、森下博行
教授法が大学を変える「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援　芦屋大学、大学生活入門、基礎演習Ⅰ」	共著	2017 年 3 月	教育学術新聞 第 2678 号 (新聞紙面)	本学の初年次教育において、コミュニケーション実践のための教授法について探求。実際に講義での実習を通してコミュニケーションスキルの向上研究についてまとめた。 本人担当部分:講義の中で実践演習として取り入れその成果を調査した 共著者:藤本光司、森下博行、池田聡、若杉祥太
【その他(公演や発表)】				
日本学生支援機構厚生補導研究協議会 ー学生サービスー	単著	2006 年 9 月	日本学生支援機構厚生補導研究協議会報告書 (pp148～149)	平成 18 年度厚生補導研究協議会の班別協議として、芦屋大学が行っている学生サービス、キャリア支援、大学における危機管理について現況と今後の対策等について発表。
日本学生支援機構厚生補導研究協議会 ー学生サービスー	単著	2006 年 11 月	日本学生支援機構厚生補導研究協議会報告書 (pp70～84)	平成 18 年度全国学生指導研究集会の分科会として、芦屋大学が組織した学生サービスの一環として立ち上げた「芦屋学園コミュニケーションセンター」についての詳細と経緯、活動内容、また 3 つのセンター(国際交流センター、ビジネス研究センター、教職教育支援センター)の徙割等について発表。
コミュニケーション力向上のためのプレゼンテーション技法についての考察	単著	2022 年 3 月	日本産業教育研究会 第 1 回キャリア教育部会報告	コミュニケーション能力を身につける手段として、プレゼンテーションを繰り返し行うことでコミュニケーション力の向上に効果があったのか考察した。
大学生の学習意欲と報酬の関連性について	共著	2023 年 2 月	大阪観光大学ゼミ発表会報告	学習意欲の向上は、与えられる報酬によって変化があるのかについて、複数の大学生に対して実験を行い、その成果と対策について考察した。 本人担当部分:アンケート調査とコンピュータ分析 共著者:森下孝明、森下博行
大学生の学習意欲と報酬の関連性について(追加報告)	共著	2023 年 8 月	日本産業教育研究会 第 3 回キャリア教育部会報告	学習意欲の向上は、与えられる報酬によって変化があるのかについて、複数の大学生に対して実験を行い、その成果と対策、およびその後の追加調査結

				果について考察した。 本人担当部分:アンケート調査とコンピュータ分析 共著者:森下孝明、森下博行
自己表現について ー本質論、方法論、教育論の観点からー	単著	2023 年 8 月	日本産業教育研究会 第 3 回キャリア教育部会報告	自己表現を確立するためには、まず自己分析が必要である。 ソーシャルスキルトレーニング、アサーションスキルトレーニングを取り入れた教授法について考察した。
ICT を活用した授業展開の一考察 ー教育の質と学習者主体性の向上に向けてー	単著	2025 年 8 月	日本産業教育研究会 第 5 回キャリア教育部会報告	ICT を活用した授業展開の背景や意義、実践例、効果と課題について幅広く考察し、今後の展望を考察した。
マルチメディア技術を活かした授業展開の一考察 ー効果的な自己表現力の育成に向けてー	共著	2025 年 8 月	日本産業教育研究会 第 5 回キャリア教育部会報告	マルチメディア技術を活用した授業構成の理論的基盤と実践モデルを提示し、教育現場における「自己表現力の育成」と「情報モラルの確立」の両立について考察した。 本人担当部分:撮影データに基づくコンテンツ試作 共著者:森下博行、山中果奈
「白書」				
経営教育学部・経営教育学科 2009 年度活動報告	共著	2010 年 6 月	芦屋大学論叢 第 53 号 (pp127～134)	本学、経営教育学部経営教育学科にて平成 22 年度に実施した、学部・学科の運営、教育活動、FD 活動、社会貢献活動、研究活動等について紹介・開設した報告書。 本人担当部分:学科主任としての実績と年間計画立案、そしてその効果について纏めた。 共著者:魚崎裕之、森下博行
芦屋大学自己点検評価委員会 2016 年度上半期活動の軌跡	共著	2017 年 1 月	芦屋大学論叢 第 66 号 (pp51～61)	本学が本年受審した大学機関別認証評価の報告書を編纂及び作成する過程をまとめたものである。ワークフローを開示することで、7年後の受審に向けての準備の一助としたい。 本人担当部分:全体的な図表、写真挿入画像等含めたページレイアウトや構成 共著者:河村繁、齋藤治、猪田裕子、森下博行、石田愛子、青木敦英、中村

				卓司
「国内学会発表」				
文科系女子短期大学・学生における情報処理に対する意識調査研究	単著	1994 年 12 月	日本産業教育研究会報告 (pp1～4)	芦屋女子短期大学コンピュータ学群を履修している学生の入学時に実施した、コンピュータに対する意識調査について考察した。
附属高等学校におけるパソコンに対する意識調査研究Ⅰ－パソコンに対する興味・関心度要因との関連について－	単著	1996 年 12 月	日本産業教育研究会報告 (pp1～15)	芦屋大学附属高等学校の生徒に対し、パソコンに対する興味・関心度がもたらす影響についての調査研究。
パソコン LAN システム導入による情報処理教育の成果	共著	1998 年 5 月	情報処理学会内「コンピュータと教育」分科会報告 (pp1～6)	阪神淡路大震災において多大な被害を受けた後、再建された芦屋大学校舎のコンピュータ教室で、ネットワーク型教育システムを導入し、インターネットや電子メールなどのマルチメディア教育環境が整った。これらのシステムを使用した教育実践について考察した。 本人担当部分:ネットワーク構築に伴う実践実習 共著者:塚本邦昭、中村宏敏、森下博行
高等学校での情報教育の履修と大学教育への期待	共著	2006 年 11 月	教育システム情報学会報告 (pp1～6)	これからの大学情報教育カリキュラムを検討する上で、現在の高等学校で行われている教育状況を把握する必要があるため、本学に入学した学生に対して調査を行った。その調査結果に基づいた分析結果を報告。 本人担当部分:アンケート調査によるデータ分析 共著者:塚本邦昭、森下博行、吉田祐治
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2)	共著	2016 年 8 月	日本教育情報学会第 32 回年会 (pp58～61)	本学の初年次教育「大学生活入門」について、研究経緯と授業内容、実践例についてまとめた。 本人担当部分:アンケート調査によるデータ分析 共著者:藤本光司、森下博行、池田聡、若杉祥太

初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)－運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察－	共著	2017 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会報告 (pp1～2)	本学の初年次教育「大学生活入門」について、研究経緯と授業内容、実践例について纏めた。 本人担当部分:アンケート調査によるデータ分析 共著者:藤本光司、森下博行、池田聡、西藤治、井村薫子、成瀬優享、若杉祥太
ブレッドボード電子回路実習教材研究	共著	2017 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会報告 (pp304～305)	複数電子部品の相互接続配線において電子回路図から実体配線までの教材開発等の立場から考察した。 本人担当部分:電子回路の設計図から電子部品の組み立て 共著者:斉藤治、森下博行、森嵜功
新設「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の対応と課題	共著	2022 年 3 月	情報コミュニケーション学会第 19 回全国大会報告 (pp1～2)	中央教育審議会(中教審)を中心にして、Society5.0 やAI 時代に対応した教員養成に対する提言や答申が頻繁に出されている。それに対応する教員養成カリキュラムの開発や整備・制度、新しい教員養成コアカリキュラムへの対応と課題について報告した。 本人担当部分:授業にて方法論を実践しその効果がどの程度あったのか検証した。 共著者:藤本光司、森下博行、中村宏敏 林泰子
協働的な学びを取り入れた教職科目の授業設計 －教職新科目「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」の開設に向けて－	共著	2022 年 8 月	日本教育情報学会第 38 回年会報告 (pp68～71)	教職コアカリキュラムが改訂され、「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む。)」は「教育の方法及び技術(2単位)」と「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法(1単位または2単位)」に分割または包括した形での実施[1]となる。対面授業で実施した2019年度とコロナ禍によりオンライン授業(筆者の実践では遠隔授業記載する)で対応した2021年度の授業アンケートより検証し、今後の新科目設置への対策について検討した。 本人担当部分:カリキュラムの策定と立

				案。 共著者:藤本光司、林 泰子、中村宏敏、 森下博行

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 15 日

氏 名 盛谷 亨 (印)

※1 認定を受けようとする課程における担当授業科目

教科及び教科の指導法に関する科目	大学が独自に設定する科目	教追い区の基礎的理解に関する科目	特別支援教育に関する科目
・科目名(単独 or 複数)	・科目名(単独 or 複数)	・科目名(単独 or 複数)	・科目名(単独 or 複数)

研究分野	研究内容のキーワード
中学校技術科教材研究・開発	プログラミング、マイコン、計測・制御 太陽電池、ソーラーカー、エネルギー変換

教育上の能力に関する事項

事 項	年 月	概 要
1 教育方法の実践例	平成 4 年 3 月 ～ 現在に至	ソーラーカープロジェクト活動を通しての環境問題啓発と ものつくり教育
2 作成した教科書・教材	平成 4 年 2 月 平成 5 年 2 月 平成 14 年 11 月 平成 19 年 1 月 平成 20 年 2 月 平成 23 年 2 月 平成 25 年 3 月	「パーソナルコンピュータで制御する LED 点灯装置」 コンピュータの制御機能を学習するための教材 「Information and Computer」 新学社 中学校「技術・家庭科」情報基礎領域サブテキスト 「手回し発電機とその電力で動作する、エレベータ模型、路線カー、LED 電圧表示計」 エネルギーの変換やその必要性を体験的に学習出来る教具 「DD モータの使い方と可変界磁モータについて」 電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会 教科書 「ソーラーカーの電機系計測装置と計測法について」 電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会 教科書 「オリンピアクラスソーラーカー”芦屋 SkyAceQUAD”の性能評価」 電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会 教科書 「コンピュータで制御する自動演奏トイピアノ」 玩具のピアノに小型電磁ソレノイドを取り付け、コンピュータ制御することによって自動演奏をさせる教材
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項	平成 16 年 8 月 平成 17 年 8 月	平成 16 年度 県立高等学校 10 年経験者研修 講師 平成 17 年度 県立高等学校 10 年経験者研修 講師
5 その他		特記事項なし

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

職務上の実績に関する事項		
事　項	年　月	概　要
1　資格、免許	昭和 60 年 3 月 昭和 60 年 3 月 昭和 60 年 3 月 平成元年 5 月	中学校教諭一種(技術) 中学校教諭一種(職業指導) 高等学校教諭一種(職業指導) 教育学修士
2　学校現場での実務経験		
3　実務経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
加工材料の特性	1. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3)―中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討―	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表論文集	中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作時において、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について。 共著者:北村絵梨加、藤本光司、盛谷亨、若杉祥太、瀧巖 頁数:pp. 148-149
プログラムと計測・制御	2. 中学校技術科での使用を想定した防災教材(ライト)の開発－備えの空白を埋める新教材開発概要の報告－	共著	令和 4 年 8 月	日本教育情報学会 第 38 回年会論文集	中学校技術科にて、工作技術やエネルギー変換、プログラミング、工業規格等を学べるほか、防災学習に使用できる要素を持ち合わせ、完成品を日頃から携行できるように設計した防災教材の開発概要について報告を行った。 共著者:成瀬優享、盛谷亨、信藤卓也、佐藤緑 頁数:pp.384-385
情報処理基礎 プログラムと計測・制御	3.「ディバッグ手法を用いた技術科教職課程向け計測・制御プログラミング教材開発」	共著	令和 7 年 8 月	日本教育情報学会第 42 回年会(於:大阪教育大学)	中学校技術科教育における「D 情報の技術」に関する項目(3)の教育目標に着目し、計測・制御システムの仕組み理解と思考したシステムをプログラムへと落とし込むコーディングを学ばせる手法として、コーディングの過程で必要となるディバッキングに焦点を当てたプログラミング教材を考案し、実践的な指導力育成に資する教材設計の方向性を示した。 共著者:岩城賢一、藤本光司、盛谷亨、野口聡 頁数:pp162-165

研究業績等に関する事項(5 年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】 1. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(2) －教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について－	共著	令和 2 年 8 月	日本教育情報学会 第 36 回年会論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。前回報告に続き、本学学生の教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について考察した。

				共著者:藤本光司、盛谷亨、安東茂樹、若杉祥太、中谷有里 頁数:pp. 300-301

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書				
教 育 研 究 業 績 書				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
令和 8年 4月 1日 氏 名 井 上 徹				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 2 3				
(学術論文) 1 科目 CG・CAD 技術概論の実習課題の報告と考察Ⅰ[査読付き]	共著	2009年10月	芦屋大学論叢 52 号	「CG・CAD技術概説」にて実践している2DCG(illustrator・Photoshop)を使用した2009年度前期実習課題報告と成果の考察。
2 科目 CG・CAD 技術概論の実習課題の報告と考察Ⅰ[査読付き]	共著	2010年10月	芦屋大学論叢 54 号	「CG・CAD技術概説」にて実践している3DCG(vectorworks)を使用した2009年度前期実習課題報告と成果の考察。
3 インポートアパレル企業アオイの研究 (博士論文)	単著	2022年3月	甲南大学	戦後75年を過ぎた日本のファッション界に根付いたインポートアパレルを主として取扱う企業分野研究である。経営史的視点からインポートアパレルを主事業とする企業「株式会社アオイ」を取り上げ、インポートアパレル企業の永続性の要因としてファミリー企業が優位であることを示した。 A4判全84頁
4 WEGEWOOD のマネジメントとデザインの関係に関する一考察 -19 世紀の共同経営を中心に-	単著	2023年2月	甲南大学 経営学会 甲南経営研究 第 63 巻/第 3・4 号	イギリス窯業者ウエッジウッドの第 2 世代から第 4 世代に該当する 100 年間の経営環境と経営に関与する人物とその役割を概観し各世代の経営関与の状況及びデザインの活用方法の違いを示した。
(その他) 「総説」 「63 人のインテリア論」	共著	2018 年 4 月	日本インテリア学会 30周年記念号	「インテリアとイノベーション」 インテリアデザインにおける今後の課題とイノベーションの必要性について執筆。
「研究報告書」 WEDGWOOD におけるデザインマネジメント その 1	単著	2013年1月	芦屋大学論叢 58 号	WEDGWOOD 研究におけるマネジメントとデザインの研究史料についての研究ノート
「年鑑」				

	Graphic Design in Japan 2018	共著	2018年6月	公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会	ロゴ・シンボルマーク掲載
	「国内学会発表」				
1	近世イギリスにおける陶磁器とインテリアの関係に関する考察その 2	単著	2014 年 10 月	日本インテリア学会第 26 回大会研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描かれたカリカチュアを中心に近世イギリス社会における中流階級のインテリアと陶磁器の関係を検証・考察
2	近世イギリスにおける陶　磁器とインテリアの関係に関する考察その 3	単著	2015 年 10 月	日本インテリア学会　第 27 回大会研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描かれたカリカチュアを中心に近世イギリス社会における中流階級のインテリアと陶磁器の関係を検証・考察
3	超高層・高層マンションの居室と収納関係の調査・考察と提案	共著	2016 年 10 月	日本インテリア学会　第 28 回大会研究発表梗概集	2012 年の調査から 4 年、超高層・高層マンションの収納がどのように変化したかを調査・考察・提案。
4	インテリアのカラーコーディネイトに適応した色相環の提案	共著	2017 年 10 月	日本インテリア学会　第 29 回大会研究発表梗概集	インテリアデザインにおける新たなカラーコーディネイトの提案。
5	インテリアデザインに於けるIoT(InternetofThings)に関する考察	共著	2017 年 10 月	日本インテリア学会　第 29 回大会研究発表梗概集	インテリアデザインを取り巻くスマート化・IoT の現状調査及び課題と考察。
6	第 1 回スマートインテリア研究部会-スマートインテリア趣旨説明-	共同	2017 年 12 月	スマートインテリア研究部会	研究部会設立経緯及び、建築・インテリアと ICT・IoT のあらまし及び研究方法、研究計画・目的。
7	第 2 回スマートインテリア研究部会-IoT 活用事例の現状(住宅・オフィス等) -	単独	2018 年 1 月	スマートインテリア研究部会	1.時代毎のスマートハウスの進展及び、HEMS の概略 2.現状報告ハウスメーカーの取組・オフィスの現状等の調査報告。
8	第 3 回スマートインテリア研究部会―スマートインテリア研究に関する検討項目―	単独	2018 年 8 月	スマートインテリア研究部会	スマートインテリア設計の為の要件を摘出・提案。環境（空間）と活動（行為）のガイドラインの検討会を実施。
9	インテリアのスマートに向けたデザイン要件の枠組み検討-スマートインテリア研究その 1 -	共著	2018 年 10 月	日本インテリア学会　第 30 会大会研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。
10	デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 2.-	共著	2018 年 10 月	日本インテリア学会　第 30 会大会研究発表梗概集	スマートインテリア研究その 2 のアンケートを他大学で実施し母集団を増やし、傾向の再確認を行った。

11	スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共著	2019年8月	日本教育情報学会第35回年会	スマート化に対する学生意識調査報告。
12	デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その3.	共著	2019年10月	日本インテリア学会　第31回大会研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その3
13	デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その4.-	共著	2020年10月	日本インテリア学会 第32回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知･受容性の調査と考察。その4
14	デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その5.	共著	2021年10月	日本インテリア学会　第33回大会研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知･受容性の調査と考察。その5
15	イギリス窯業者WEDGWOODの1795年以降の事業継承･経営者について	単独	2022年9月	関西経営研究会	WEDGWOODの1795年以降の事業継承・経営者・パートナーの事業持ち株割合における役割について発表。
16	インテリア分野の黎明期におけるオーラルヒストリー調査～関西の視点から考える～	共著	2023年10月	日本インテリア学会　第35回大会研究発表梗概集	インテリア分野の黎明期における研究･産業･教育分野視点からの状況調査･研究。

上記のほか2003年～2013年まで国内学会発表13件

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　山 片 崇 嗣

担当授業科目に関する研究業績等(10 年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概　要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　要
(学術論文) グローバル人材育成を視野に入れた授業の研究 −「主体的・対話的で深い学び」を主眼に置いた海外研修の考察−	共	2020.8.22	日本教育情報学会 第 36 回年会論文集	グローバル人材に求められる資質を考察したうえで、これまで芦屋学園中学校・高等学校で実践した海外研修を通じて視察した海外の授業実践例を検証した。それらの考察をふまえ、改めて現状の日本の教育を見直し、「主体的・対話的で深い学び」の実践を急務とした新しい日本型のグローバル教育の開発が必要であると提言した。
(学術論文 発表) 中等教育におけるグローバル教育の実践に向けて −海外の授業を踏まえて−	単	2021.5.22	令和 3 年度第 1 回日本産業科学学会 関西部会 学会発表	伝統的な日本の教育における成果と課題を検証し、家庭教育としての補修授業、受験指導や学歴主義、企業の終身雇用制度等の背景から今後の日本のグローバル教育に求められる方向性を模索したうえで、オーストラリアの授業実践に触れ、改めてアクティブ・ラーニングの重要性を説き、日本の教育の課題と展望を提言した。
(学術論文 発表) 中等教育における国際教育の実践 − 海外研修プログラムの課題と提言 −	単	2021.8.28	第 27 回日本産業科学学会 全国大会 学会発表	文部科学省が目指すグローバル人材育成の一環として多くの中等教育現場で海外生徒派遣プログラムが実践されていながらその多くが「語学研修」や「ホームステイ」に特化しており、グローバル人材の育成という目標に直結するものではないことを指摘した。今後の海外研修プログラムの在り方や担う役割について考察し、提言した。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

（学術論文） グローバル教育の実践に向けてーイギリス中等教育の教育事情の考察ー	共	2021.8.29	日本教育情報学会 第 37 回年会論文集	勤務校の姉妹校であるイギリス提携校に生徒を派遣・引率した際の現地校視察を通じて、授業展開の意図と学校が掲げる教育目標に関して現場教員と管理職教員にヒヤリングし、実態を体系化した。また、日本の教育現場で実践されている教育目標や教育実践を比較してイギリスと日本の教育実践の相違点を明らかにした。特に教育現場における教員現場の組織形態や実践目標の指示系統などの差異を整理し、日本の教育の課題を浮き彫りにした。
（学術論文 発表） 「グローバル教育の確立に向けて：オセアニアの教育事情」	単	2021.12.11	日本産業科学学会 第 2 回 関西部会	勤務校の姉妹校であるオーストラリアの提携校に生徒を派遣・引率した際の現地校視察を通じて、日本の教育現場で実践されている教育目標や教育実践を比較してオーストラリアと日本の教育実践の相違点を明らかにした。
（教育実践記録） グローバル人材育成を視野に入れた高大接続教育の研究（１）ー芦屋学園中学校・高等学における海外派遣プログラムの検証ー	共	2019.7.26	芦屋大学論叢 71 号	主体的・対話的で深い学びを教育現場で具現化し、グローバル人材の育成を実践可能なものにするための研究として、グローバル人材に求められる資質を考察した。芦屋学園高等学校・中学校が、これまで実践してきた海外研修を振り返り、明らかになった課題を提起した。
（研究ノート） グローバル人材育成を視野に入れた高大接続教育の研究（２）ー 国際教育における「アクティブ・ラーニング」モデルの考察	共	2020.3.10	芦屋大学論叢 72 号	理想的な国際教育の方向性を高大接続教育の観点から提言した。文科省が推奨する「学力の3 要素」を育むための教育財を国際教育の視点からも考察し、「アクティブ・ラーニング」のメソッドも念頭に置き、今後の教育システムを模索した。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　井 村　薫 子

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　要
【学術論文】 1.「“妖精”が“賢女”に書き換えられた理由―グリム兄弟はなぜフランス語からの借用語に満足せず、ドイツ語派生の言葉にこだわったのか―」	単	平成 25 年 3 月	学位論文	これまで、私自身バレエやディズニー映画を通じて「眠れる森の美女」の存在を知っていたのだが、これには類話があることを知った。その中でも影の主人公といえる“妖精”に焦点を当て、グリム兄弟の行った書き換えを元に、なぜグリム兄弟はドイツ語起源の単語にこだわったのかということを明らかにする。
2.「日本におけるバレエ教育に関する研究」	単	平成 29 年 2 月 平成 29 年 5 月	・学位論文 ・日本アーツビジネス学会口頭発表	今日までの日本バレエ界の発展は先人たちの努力によって作り上げられてきたが、日本バレエが更なる発展を遂げるにはバレエ教育を根本から見直す必要があると考える。現在日本国内で活躍しているバレエダンサーたちはどのようなバレエ教育を受けてきたのか、ということを研究し、現在の日本国内のバレエ教育における問題を明らかにし、今後のバレエ教育について提言を行った。
3.「初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) ― 運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察 ―― 」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp274-275)	入学時の学生は、不安や期待を感じつつ徐々に大学生活に馴染んでいく。本稿では学生同士のつながりを深めさせる手立てについて、入学前のリメディアル教育および初年次教育の取組を報告する。また成績評価の量的／質的評価の側面を概観する。 井村薫子・新谷佳冬・佐藤真左美・藤本光司
4.「日本におけるバレエ教育に関する研究―芦屋大学バレエコースのカリキュラムをもとに考察―」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp 288－289) ・日本教育情報学会第 33 回年会 口頭発表	芦屋大学経営教育学部経営教育学科では平成 24 年度よりバレエコースが開講した。日本において、私立大学にクラシックバレエに特化したコースの開設というのは初の試みといえる。本研究では、コース設立の意義を

				述べ、バレエ界の更なる発展のために過去 6 年間のカリキュラムをもとに実績と現状を踏まえ、今後の課題について報告する。 井村薫子・新谷佳冬
5.「日本におけるバレエ教師教育の必要性について(1)ー芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの試みー」	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	大正時代に西洋及びロシアからバレエという芸術が日本に伝来し約一世紀が経過した。バレエ鑑賞が大人の社交や楽しみとなる文化を持つ西洋の国とは異なり、日本ではバレエ公演を観る観客層も薄く、バレエを見に来る観客の大半は出演者の関係者が客席を占めるという状況である。 本稿では、一種の歪な形態のまま発展を遂げた日本のバレエの問題点、特に教師養成の側面に焦点を当て 2013 年度より開講した芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの意義と、コース内容等について報告する。 井村薫子・佐藤真左美
6.「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)-制作側からの視点-」	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	芦屋大学バレエコースでは第一期卒業生を輩出した 2015 年から毎年、芦屋市民センター・ルナホールにて卒業公演を開催している。 大学コースにおいての卒業公演ということで、教室の発表会との違いは明らかである。卒業公演が、ただの発表の場ではなく、学生教師共に学びの場として、様々な成果・課題が挙げられる。本稿ではそれらに重点を置き、実績報告とする。
7.「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(2)」	共		芦屋大学論叢第 75 号 ※掲載予定	
【その他(講演や発表)】 1.カンパニーでこぼこ 第 10 回公演「眠れる森の美女」出演		平成 24 年 4 月	兵庫県立芸術文化センター 大ホール	
2.生誕 200 年記念オペラセレクション 歌劇王ヴェルディの肖像 出演		平成 25 年 9 月	フェスティバルホール	
3.トモコアートダンスカンパニー「MASK」出演		平成 26 年 6 月	びわこホール 中ホール	

4.衣裳デザイナー 時広真吾プロデュース 第 5 回美の種「華心～打・舞・歌・調・装」出演		平成 27 年 10 月	京都府民ホール アルティ	
5.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.2」出演		平成 27 年 4 月	西宮市プレラホール	
6.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.3」 演出・出演		平成 28 年 9 月	西宮市プレラホール	
7. 0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.4」演出・出演		平成 30 年 3 月	西宮市プレラホール	
8.芦屋大学バレエコース卒業公演 指導・演出助手		平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 12 月	芦屋市民センター ルナホール	
9.CTB Studio クリスマスパフォーマンス 指導・演出助手		平成 25 年 12 月 平成 26 年 12 月 平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 11 月	京都府立文化芸術会館	

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　高倉 弘士

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
【著書】1 (著書) 第 5 章 保育運動を考える	共	平成 24 年1月	『保育の社会学 子どもとおとなのアンサンブル』、学文社	本書は保育・子育て研究への新たな試みへの第一歩とするものであり、保育を社会学の視点から見ていくという大前提のもとに論述する。 保育の現場の実情をできるかぎり重視しながら、保育の現場を側面から動かす行政をも念頭におき、各諸課題へ取り組む。
【著書】2 (著書) 序章 「地域包括ケア」をめぐる制度改革の動向と課題 第 2 章 大阪府内の病院、老健の入院入所、退院退所調査	共	平成 29 年 12 月	『地域包括ケアを問い直す―高齢者の尊厳は守れるか』、日本機関紙出版センター	地域包括ケアで高齢者は幸せに暮らせるのか？ 要介護者の家族、病院・老健の入退院の実態調査、医療・介護の現場実態などから、地域包括ケアの公的責任不在、地域の助け合いへの矮小化、費用負担の問題などについて検討し、住民のための本当の地域ケアとは何かを探る。
【著書】3 (著書) 第 7 章 なぜ今も階級が問題なのか	共	令和 5 年 3 月	『岐路に立つソーシャルワーク現代のラディカル・ソーシャルワーク』、クリエイツかもがわ	格差、貧困、差別などへのソーシャルワークは「効率的な」マネジメントに忙殺され、本来の役割を発揮できていないのでは。ラディカルな政治思想と活動に根ざしたソーシャルワークを求め、多様な視点から徹底的に検討する。翻訳もとの本は出版からすでに20年を経過しているが、それでも現在の社会福祉状況をとらえる際に役立つ知見が多くある。
【学術論文】1 (博士論文) 環境リスクの共有が環境運動に与えた影響に関する社会学的考察― ダイオキシン類および PCB をめぐる住民運動を事例として	単	平成 25 年 3 月	立命館大学大学院応用社会学研究科	産業廃棄物処理場建設・操業をめぐる反対運動を分析対象とし、住民運動の要因分析をおこなっている。具体的には、住民運動はどういった要因で拡大し、どういった要因で収束するのか、を運動体への参与観察やインタビュー調査、調査票調査を用いて明らかにした。当該住民運動は産業廃棄物の健康被害を争点とする住民運動であるため、ダイオキシンや PCB などのいわゆる科学的根拠をどのように扱うかによって住民運動の成否に影響することを実証的に明らかにした。
【学術論文】2 (学術論文) 教育階層と格差意識・社会活動・社会的ネットワーク ―地域と暮しについての意識調査データからみる教育による分断をめぐる現状と課題―	共	平成 23 年 6 月	『立命館産業社会論集』第 47 巻1号	本稿は，教育階層と収入・格差に対する意識はいかなる関連をもつのか，教育階層と社会活動への参加や社会的ネットワークの保有状況はいかに関連しているのかを明らかにすることを目的としている。近畿2府4県に在住する20歳から65歳未満の男女の調査データの分析から，教育階層が高いほど世帯収入満足度は高く，格差意識は低いことが示された。これは高学歴層ほど高収入であるためである。また，高学歴層ほどサークル活動，自己研鑽活動に参加する傾向があり，社会的ネットワークについても高学歴層ほど規模が大きい。これらの結果は，現代の日本社会において教育達成は職業的地位達成の手段にとどまらず，日常生活の多くの領域を分断する側面をもっていることを示唆している。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

【学術論文】3 (学術論文) 合意形成における科学的情報の影響	単	平成 24 年3月	『日本産業科学学会研究論業』第17号	産業廃棄物処理場建設・操業をめぐる反対運動を事例として、その争点となっている処理場操業による健康被害について、科学的情報の持つ役割は非常に大きい。だがこれまで、科学的根拠の持つ重要性には積極的な言及がなかった。そこで、科学的根拠をめぐってどのような合意形成がなされるのか、また合意形成の結果、住民運動はどのような戦略をとるのかを分析している。分析の結果、科学的根拠は重要であり、住民運動の戦略も大きく変わることが明らかとなった
【学術論文】4 (学術論文) 環境運動における科学的情報の役割―環境ホルモンを争点とした住民運動を事例に―	単	平成 24 年 9 月	『立命館産業社会論集』第 48 巻第 2 号	環境問題を争点とした運動では、化学物質と被害との因果関係が客観的に証明されるかどうかが運動を展開するうえで重要な要素となりうる。そこで、本研究では、特定の科学的情報に注目が集まっている時期と注目が薄れてきた時期とでは住民運動の展開過程に差異がみられるかどうかを探索的に分析した。分析の結果、環境運動の初期段階においては、科学的情報への注目度が高く、運動参加者の個人での判断が重要な役割をはたしていることが明らかとなった。後期の段階においては、科学的情報への注目度が低くなり、運動体の組織強度が重要な役割を果たしていることが示唆された。
【学術論文】5 (学術論文) 環境問題の解決における科学的根拠の同定過程―産業廃棄物処理施設増設反対運動をめぐって―	単	平成 25 年 3 月	『立命館大学人文科学研究所紀要』No.101	環境運動の展開において、科学的根拠の同定過程は非常に重要な要素になりうる。なぜなら環境運動において、運動の根拠となる最も大きな事柄は被害の程度であるためである。そのため、運動として発展していくためには主体者自身が検知した感覚的な周辺環境の変化を、誰もが認知しうる客観的な科学的根拠として提示することが要請される。本論では、環境運動を事例に、被害状況が明確かつ単純ではない環境運動の科学的根拠の同定過程がどのように進行するのかを中心に分析を行う。本論の事例より、同定過程において住民運動側と行政側との科学的測定の結果に差異が生じていることが明らかとなった。科学的測定は一般化された手続きを順守した方法であり、そのため客観性は担保されている。従って、科学者が提供する実験結果ないしは測定結果などの科学的根拠は客観性を担保していると言える。しかし、その科学的根拠を運動展開へ戦略的に用いる場合、留保が必要である。つまり、科学的根拠にはどのような手法が用いられたのか、という条件を加味したうえで用いなければならないということである。今後、環境運動とその展開の過程に用いられる科学の関係を分析しようとする場合、科学的根拠の扱われ方に注目しながら分析を行う必要があると言える。
【学術論文】6 (学術論文) 『部落差別の実態に係る調査結果報告書』(法務省人権擁護局)の検討	単	令和 3 年 5 月	部落問題研究 2021 年 5 月号(No237)	『部落差別の実態に係る調査結果報告書』(法務省人権擁護局)が公表されたことを受け、部落差別の実態がどのようにとらえられているのか、調査の分析結果を批判的に検討することを目的としている。検討の結果、現在の部落差別の実態を見ていることにすぎず、全体的にみれば部落差別件数の減少傾向こと、インターネットで部落差別事例が増加していることへの根本的な問いにこたえるものではないことが確認された。

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

【学術論文】7 (学術論文) 社会福祉法人の大規模化・協働化に関する一考察 ―一般社団法人社会福祉経営全国会議経営実態調査2020 年度からの検討―	単	令和 3 年 12 月	『総合社会福祉研究』第 51 号	複雑化・多様化する福祉ニーズに対して、政府は、社会福祉法人を合併・連携させ、大規模法人化・協働化することで対応しようと考えている。いっぽうで、我が国では多様化する福祉ニーズに対して、小規模法人で対応してきた側面がある。果たして、複雑化・多様化する福祉ニーズに、政府の考える社会福祉法人の大規模化・協働化は、こたえられるのであろうか。本稿では、こうした関心から法人規模に注目して分析し検討をくわえる。本稿の分析結果からは、相対的に見て大規模法人には職員の定着について課題があるとみることができる。くわえて、非正規職員や派遣職員に依存している率が高いということが明らかになった。確かに、政府が指摘するように、福祉への要望は複雑化・多様化してきている。だからといって、国が目指す自助・互助の社会保障を大規模化を通じて担わせてすべてが解決するということではない。今後、これまで以上に地域に根ざした地域福祉の在り方、公的な福祉の拡充が問われることになると考える。
【学術論文】8 (学術論文) コロナ禍で働く福祉労働者の実態に関する一考察	共	令和 3 年 12 月	『総合社会福祉研究』第 51 号	本稿では『コロナ禍で社会福祉現場で働く人々の労働実態調査』の分析結果から、コロナ禍で社会福祉現場に何が起こっていたのか、その課題を整理することを目的とした。現在、社会福祉現場で働く人手が足りない中で、他分野からの転職者に支えられ、過重な労働を強いられている、または仕事に見合わない低賃金水準という厳しい実態が、本研究でも明らかになった。やりがいをもち、激務に耐えられてあまり退職や転職を考えない人はもちろん存在するが、しかし一方で、業務や時間に追われて心の余裕を失ってしまい、自信を失いながらも身を粉にして支援にあたっている人たちは、将来に展望を持てなくなり、退職や転職を考えてしまうということも示唆された。
【その他(講演や発表)】1 (雑誌掲載) 社会保障からの公的責任の継続的な後退を視る	単	平成 29 年.3 月	『福祉のひろば』204 号、財団法人大阪福祉事業財団	本論稿では、介護報酬の引き下げ、「生活支援戦略」に見る生活保護制度の見直し、社会福祉領域の市場化、高齢者の再定義など、政府が行う一連の事柄から何が見えてくるのか。すなわち、社会保障・社会福祉領域からの公的責任の継続的な後退状況である。こうした後退状況は、福祉領域の市場化による経済の効率化と発展という理念のもとに過剰なほど偏向し、急速にその動きを加速させており、近年では特に傑出した動きとなっている、という内容を執筆している。
【その他(講演や発表)】2 (雑誌掲載) 社会福祉を担う若者たちの生活が苦しくなっている	単	平成 29 年 10 月	『福祉のひろば』211 号、財団法人大阪福祉事業財団	社会保障・社会福祉は生命と健康を守る重要なものである。ときに社会福祉従事者は、困難を抱える個人や世帯を支援する。対象者は、精神疾患や経済的貧困を抱える方等様々だ。だが現在、そうした支援する側が貧困に陥っている現状がある。本稿では、なぜ支援する側が経済的貧困に陥るのかを追求している。政府は介護現場へのロボットやAI の導入を急ピッチで行っているが、そうしたことよりも、現場職員への財政支援こそが急務であると考える。
【その他(講演や発表)】3 (雑誌掲載) ハンセン病をとおして社会福祉を考える	単	平成 30 年 10 月	『福祉のひろば』223 号、財団法人大阪福祉事業財団	社会保障・社会福祉は、生命と健康を守る重要な社会的基盤である。こうした保障はその性格上、公平性を担保しなければならない。何らかの力によってこれが侵されるようなことがあれば、社会福祉従事者は、疑義を唱え修正をせまるべきことがらであろう。だが、過去において、社会福祉従事者がハンセン病罹患者の社会的排除に加担していた。そうした背景から、現在も国立療養所に住まわれている方にインタビューをおこない、これまでの経緯や社会がどのように見えていたのか、なにが剥奪されたのか等をきき、執筆を行った。

様式第4号（教員個人に関する書類）

芦屋大学

① 教育研究業績書

教　育　研　究　業　績　書

氏　名　　成瀬　優享

研究業績等に関する事項（5　年以内）

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概　　要
【著書】 アクティブラーニングに導く教学改善のすすめ	共	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	コラム「技能伝承　急がば回れ」を執筆 pp118-119
【学術論文】 1.潤滑剤性能・特性評価試験機の開発提案	単	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢	競技用自転車チェーンを対象とした潤滑剤において、実用環境を再現した評価試験機が無い事から、実用される環境を調査し、これに基づいた潤滑剤性能及び特性評価試験機開発に関わる提案を実施した。 芦屋大学論叢第65号 pp79-90 成瀬優享
2.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（1）	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	2　級自動車整備士養成課程において、整備士に求められる深い課題解決能力の構成要素である技術、知識、社会人基礎力の向上を目的とし、車両製作を主軸としてゼミ活動と授業を連携させたＰＢＬ授業プログラムの開発と実践の 1 年目の経過報告行った。 日本教育情報学会 第 33 回年会論文集（芦屋大学） pp276-277、2017.8.26-27 成瀬優享、大西昌哲、藤本光司、盛谷亨、齋藤治、若杉祥太
3.初年時教育におけるアクティブラーニングの研究（3）	共	平成 29 年 8 月	同上	本学のリメディアル教育について整理し，初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメントについて述べ、学生レポート評価に関する質的評価 - 量的評価の課題について報告した。 日本教育情報学会 第 33 回年会論文集（芦屋大学） pp288-289、2017.8.26-27 藤本光司、森下博行、池田聡、斎藤治、井村薫子、成瀬優享、若杉祥太

4.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（2）	共	平成 30 年 8 月	同上	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的としたPBL授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告を行った。 日本教育情報学会 第 34 回年会論文集日本教育情報学会第 34 回年会論文集（松蔭大学）pp294-295、2018.8.25-26 成瀬優享、盛谷亨、藤本光司、若杉祥太、大西昌哲、齋藤治
5.2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力育成を目的とした包括的教材開発に関する研究	単	平成 31 年 1 月 15 日	芦屋大学修士論文	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得（2017）（2018）の実践を元に、整備士に求められる深い課題解決能力を育成するために必要な要素と、教材として求められる要素を併せ持つ教材開発に関する研究を行った。この研究により、計算された不完全さをもつ包括的な教材が提案された。 芦屋大学　大学院　平成 30 年度修士論文　2019.1.15 成瀬優享
6.2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果（3）	共	令和 1 年 8 月 24 日	日本教育情報学会	同研究の最終報として、一連して行われた PBL 授業プログラムの成果と課題に関する報告を行った。また、これらの研究に伴い明らかとなった課題を解決するための手段として、包括的教材の開発提案を行った。 日本教育情報学会第 35 回年会論文集（ 岡山理科大学）pp214-215　2019.8.24/25 成瀬優享、若杉翔太、盛谷亨大西昌哲、藤本光司、斎藤治
7.2 級自動車整備士養成課程における包括的教材の開発と実践（1）	共	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会	養成課程で用いる教材として、専門性と社会人基礎力を同時に高めていくための包括的教材に求められる要件と構成について、考察を行った。 日本教育情報学会第 36 回年会論文集（ 札幌学院大学）pp312–313　2020.8.22/23 成瀬優享、若杉祥太 興感染症の影響により、従来

8.座学系科目の遠隔授業化が技能に影響を与えた可能性についての報告	単	令和 3 年 8 月	日本教育情報学会	対面で行われていた座学系授業がオンラインやオンデマンド授業に変更された。これに伴い座学系授業での得点は有意な変化がみられなかったものの、実技系科目にて有意差がみられた。 日本教育情報学会第 37 回年会論文集(岐阜女子大学) pp374-375 2020.8.28/29
【その他(講演や発表)】 1.FD 研修 救急	単	令和元年 11 月	芦屋大学	大学での事故や災害時に伴う負傷者発生に対して、積極的介入が必要なケースと、その対処法に関する講習を実施 (成瀬優享)
2.FD 研修 救急	単	令和 3 年 5 月	芦屋大学	新型コロナウイルス流行に対応した脳心肺蘇生法に関する講習を実施(成瀬優享)
3.消防 心肺蘇生研修	共	令和 3 年 12 月	成徳小学校	同校の小学生を対象に、心肺蘇生法研修を実施(成瀬優享)

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

氏 名　　明神 聖子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【学術論文】				
1. Activation of a co-located meeting by visualizing conversation and facilitating participant's behavior	共	平成 29 年 11 月	Transactions of the Institute of Systems, Control and Information Engineers、システム制御情報学会	全員が同じくらいの時間発言するインタラクションモデルに会議のインタラクションを近づけるために、会話の様子を計測して、会話参加者が取るべき行動を助言するシステム ScoringTalk を提案した。使用してもらい、システムの有効性を評価した。 著者:Hiroyuki Adachi、 Seiko Myojin、 Nobutaka Shimada
2. A logical consideration on deceived person's thinking	共	平成 31 年 3 月	Artificial Life and Robotics、第 24 巻 1 号、Springer	本論文では、欺瞞的なコミュニケーションを数理モデル化することによって、騙されるときの思考プロセスを考察した。それによって、被害者は不足している情報を論理的に埋め合わせることによって、なりすまし犯を本人と信じる(騙される)可能性があることが示された。 著者:Seiko Myojin、 Noboru Babaguchi
3. A logical consideration on fraudulent email communication	共	令和 2 年 8 月	Artificial Life and Robotics、第 25 巻 3 号、Springer	本論文では、ビジネスメール詐欺に焦点を当て、大企業で起きた実際の詐欺事件のインタラクションを数理モデル化することによって、騙されるときの思考プロセスを考察した。本研究によって、論理的な罠や、人間の思考の脆さを数式で示すことができた。 著者:Seiko Myojin、 Noboru Babaguchi
4. Preventing fake information generation against media clone attacks [Invited]	共	令和 3 年 1 月	IEICE Transactions on Information and Systems、第 E104-D 巻 1 号、電子情報通信学会	本論文では、フェイク動画やなりすまし音声、フェイクレビューなどのフェイクメディア(メディアクローン)が生成されないようにするために、個人情報をどのようにして保護するかという問題に焦点を置き、複数の研究によるさまざまな方法についてまとめた。 著者:Noboru Babaguchi、 Isao Echizen、 Junichi Yamagishi、 Naoko Nitta、 Yuta Nakashima、

				Kazuaki Nakamura、 Kazuhiro Kono、 Fuming Fang、 Seiko Myojin、 Zhenzhong Kuang、 Huy H. Nguyen、 Ngoc-Dung T. Tieu
5. Generation and detection of media clones [Invited]	共	令和 3 年 1 月	IEICE Transactions on Information and Systems、第 E104-D 巻 1 号、電子情報通信学会	本論文では、フェイクメディア(メディアクローン)を技術的にどの程度生成することが可能かという能力の検証と、メディアクローンの攻撃を認識して防御するという保護の実現についての二つの方向から研究結果について説明した。 著者:Isao Echizen、 Noboru Babaguchi、 Junichi Yamagishi、 Naoko Nitta、 Yuta Nakashima、 Kazuaki Nakamura、 Kazuhiro Kono、 Fuming Fang、 Seiko Myojin、 Zhenzhong Kuang、 Huy H. Nguyen、 Ngoc-Dung T. Tieu
【その他(受賞)】 1. 情報・システムソサイエティ論文賞(ISS 論文賞)	ー	令和 5 年 7 月	電子情報通信学会	2 件の論文について、情報通信及び情報流通に関する学問技術の発展に貢献する優秀な連作論文と認められた。
【その他(広報誌)】 1. コミュニケーションで人が騙されるときの思考プロセス	単	令和 3 年 3 月	2021 研究シーズ集 助教版(冊子版および電子版)、大阪大学大学院工学研究科	大阪大学大学院工学研究科が発行、付属フューチャーイノベーションセンター(CFi)が編集したもので、研究内容が紹介されている。
【その他(国際会議)】 1. A co-located meeting support system by scoring group activity using mobile devices	共	平成 28 年 2 月	The Augmented Human International Conference (AH)	本研究では、モバイル端末を活用することによって場所を選ばず簡単にセットアップできる会議支援システムについて、グループ単位の会話を採点する方法および可視化する画面を再設計した。

					著者:Hiroyuki Adachi、 Seiko Myojin、 Nobutaka Shimada
2.	Formulating what a deceived person think	共	平成 30 年 1 月	International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB)	本稿では、コミュニケーションを情報の流れとして定性的にモデル化するのに適したチャンネル理論という枠組みを使用して、振り込め詐欺に騙される人の誤解を含む思考を数理モデル化する。 著 者 : Seiko Myojin 、 Noboru Babaguchi
3.	Initial consideration on human factor in security incident	共	平成 30 年 9 月	The International Workshop on Security (IWSEC)	本発表では、定性情報(言葉の内容)に対する人の戸惑いを要因として起こるセキュリティインシデントを取り上げる。セキュリティインシデントを個人間の情報の流れとして捉え、その流れを定式化することについて考察する。 著 者 : Seiko Myojin 、 Noboru Babaguchi
4.	Modeling deceptive communication based on information flow	共	平成 31 年 1 月	International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB)	本稿では、ビジネスメール詐欺における欺瞞的コミュニケーションに着目し、一種の論理的アプローチとされているチャンネル理論を用いて、騙しという現象を説明する理論的枠組みの構築を目指す。 著 者 : Seiko Myojin 、 Noboru Babaguchi
5.	Semiotic and logical approach for analysis of augmented world	共	平成 31 年 3 月	The Asia Pacific Workshop on Mixed and Augmented Reality (APMAR)	本発表では、拡張現実技術を利用するアプリケーションが、記号論的アプローチと論理的アプローチにより注意を払うべきという立場に立ち、これらのアプローチに焦点を当てる利点を説明し、今後の計画について説明する. 著 者 : Seiko Myojin 、 Noboru Babaguchi
6.	Training－free method for generating motion video clones from a stiil image considering self-occulusion of human body	共	令和元年 9 月	International Conference on Image Processing (ICIP)	本稿では、三次元の人体モデルを必要とせず、右足や左足などのパーツごとに骨格を抽出することで、静止画から動画を生成するときの人体の自己遮蔽の影響を抑え、従来手法よりも自然な見た目のフェイク映像を生成する手法を提案する。 著者:Teppei Tsutsumi、 Kazuaki Nakamura 、 Seiko Myojin 、 Naoko Nitta、 Noboru Babaguchi
7.	Fostering Cooperation in Online Social Dilemma Game through Communication with	共	令和 8 年 7 月	31st International Congress of Applied Psychology (ICAP)	環境心理学では対人コミュニケーションによる人間の協調行動促進効果が指摘されている。本研究では、人間の協調行動促進に

Artificial Intelligence (発表予定)				対する、AI とのコミュニケーションの有効性を検証した。 著者:Kaori Ando、 Akihito Himuro、 Akira Goto、 Seiko Myojin
【その他(国内会議)】				
1. 会話の均衡を保つ採点モデルの提案とシミュレーション	共	平成 28 年 3 月	情報処理学会研究報告、ヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)、vol. 2016--EC-39、 no. 11	本稿では先行研究の会話採点モデルの問題と解決に向けた理論の提唱をした。シミュレーションによって問題の解決を確認した。 著者:山腰悠真、安達寛之、明神聖子、島田伸敬
2. 立ち聞きクラウドと見せかけスイッチの実装および人狼ゲームへの適用	共	平成 28 年 3 月	情報処理学会技術研究報告 エンタテインメントコンピューティング(EC)、vol. 2016-EC-39、 no. 11	本研究では AR の利点を活用したアプリケーションとして、画面を現実世界にかざす動作を利用した立ち聞きクラウドと、プレイヤーごとに提示する情報の量や質を調節できる見せかけスイッチを制作し、それらを人狼ゲームに適用した。 人狼ゲームのエンタテインメント性を高めることができたかを実験で確認した。 著者:春名晃宗、安達寛之、明神聖子、島田伸敬
3. 認知体系の制約に基づくメディアを介した情報の不定性と騙される思考	共	平成 29 年 9 月	情報処理学会研究報告 セキュリティ心理学とトラスト (SPT)、vol.2017-SPT-25、no.5	本稿では、「情報」の意味を人が推定するプロセスが、単に人と人の間で意味の齟齬を引き起こすだけでなく、人を騙すために機能するというところを数理的に示した。 著者:明神聖子、 馬場口登
4. 詐欺が成功する状況の記号論理的表現	共	平成 29 年 11 月	計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 (SSI)	人が騙されることを防ぐために、情報の本物・偽物を人はどのように判別するのかを明らかにする必要がある。本研究では、メディアを介したコミュニケーションについて、人が騙されるときと騙されないときの状況が記号論理的に表現できることを示し、情報が人の認知に作用した結果として詐欺が成功しうることを議論する。 著者:明神聖子、 馬場口登
5. 人物の形状と色を補正するネットワークに基づく静止画からの動作クローン映像の生成	共	平成 30 年 1 月	電子情報通信学会技術研究報告、メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎(MVE)、vol.117、 no. 391	本研究では、人物の動作を撮影した映像に基づいて別人の画像を操作し、リファレンス映像の人物と同様の動作を行っているかのように見せる映像の生成手法について検討する。実験の結果、提案手法によって人物輪郭の形状やテクスチャの歪みをある程度改善できることが示された。

					著者:宮脇勇輔、 中村和晃、 明神聖子、 新田直子、 馬場口登
6.	身体部位による人物の自己遮蔽を考慮した静止画からの動作クローン映像の生成	共	平成 30 年 3 月	電子情報通信学会総合大会	本稿では、人物 A の動作を撮影した映像に基づいて別の人物 B の画像を操作し、人物 B が人物 A と同じ動作を行っているかのように見せる映像の生成法として、従来手法を腕や足などのパーツごとに独立に適用することを考え、エッジ画像から各パーツの輪郭を抽出する手法を提案する。実験の結果、従来手法に比べ歪みの少ない映像が生成できた。 著者:堤哲平、中村和晃、明神聖子、新田直子、馬場口登
7.	情報の流れと騙されるコミュニケーション	共	平成 30 年 11 月	計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 (SSI)	本研究では、メディアを介して受け取った情報の意味内容の解釈によって、人が騙される状況を対象とし、そのコミュニケーションの性質を数理的に分析することを提案する。その分析のために、真偽の不明なメディアから人への情報の伝わりかたを数理モデル化する。 著者:明神聖子、 馬場口登
8.	人物の自己遮蔽を考慮した少量の静止画像列からの動作クローン映像生成	共	令和 2 年 3 月	電子情報通信学会技術研究報告、 メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎(MVE)、vol.119、 no.457(開催中止、技報発行あり)	本稿では、ある人物 A の動作映像 1 本と、別の人物 B の静止画像少数枚のみを入力として、人物 A の動作をあたかも人物 B が再現しているかのような映像を生成する手法を提案する。実験の結果、提案手法により、自己遮蔽を伴う 動作と回転を伴う動作の双方に対して、ある程度の品質で生成できることを確認した。 著者:堤哲平、中村和晃、明神聖子、新田直子、馬場口登
9.	欺瞞的対話における判断に関するゲーム理論に基づく分析について	共	令和 2 年 3 月	HAI シンポジウム	本発表では、欺瞞的コミュニケーションの中でも詐欺を対象とし、人が信念に基づいて合理的に行動するとき、どのように騙されるのかについてゲーム理論に基づいて議論する。騙しは古くから人間社会に影響を及ぼし、人間とは何かを考える上で重要である。そのため本研究の成果は、信頼や裏切りといった側面に関するエージェントの研究にも通じると期待できる。 著者:山下雅弘、明神聖子、 馬場口登

10. 人と人型メディアの同一性について	共	令和 2 年 11 月	計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 (SSI)	ヒューマノイドや、アンドロイド、エージェントの中には、人との同一性が見出されることで有効に機能する人型メディアがある。本研究では、人と人型メディアの実例との間に、どのようにして同一性が見出されるのかを考察する。考察のフレームワークとして圏論を導入する。 著者:明神聖子、馬場口登
11. 相手が AI であるという認識は人とAIの協力に影響を及ぼすのか ー繰り返し社会的ジレンマゲームにおける検討	共	令和 8 年 2 月	HAI シンポジウム 2026	本研究では、相手が AI であるという認識が、社会的ジレンマゲームにおいてコミュニケーションによる協力促進効果に影響するかを検証した。分析の結果、顕著な影響はほぼなかった。また、本研究は機械ペナルティ(人間は相手が機械だと協力率が低下する)の解消に関して示唆を与える可能性がある。 著者:明神聖子、安藤香織、日室聡人、後藤晶

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8 年 4 月 15 日

氏 名　渡 康彦　　㊞

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】				
【学術論文】 1 小学校理科教育における活動記録装置の導入検討報告 ―簡易ミニ電卓を用いた計装カウンタの教員免許更新講習講座での利用事例―	共著	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	「教職課程における担当授業科目に関する研究業績等」を参照
2 Clock-controlled arylalkylamine N-acetyltransferase (aaNAT) regulates circadian rhythms of locomotor activity in the American cockroach, *Periplaneta americana*, via melatonin/MT2-like receptor.	共著	令和 3 年 9 月	Journal of Pineal Research, Vol. 71, 19pp.	メラトニンがワモンゴキブリの歩行活動に及ぼす影響を調べた。メラトニン濃度が増加するにつれて、明暗サイクルでのゴキブリの活動リズムはより同調した。メラトニンとその合成酵素である aaNAT は、PDF システムに関連して、歩行活動の少なくとも 1 つの概日出力経路を構成していると推測された。 A. S. M. Kamruzzaman, 他 8 名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
3 トビイロケアリ新女王における異なるコロニー発達パターン ―コロニー創設時期と気温の影響について―	共著	令和 4 年 9 月	芦屋大学論叢第 76 号 63-70	野外条件下でトビイロケアリを飼育し、コロニーの発達を調べた。結婚飛行を終えたトビイロケアリ新女王の間でも,コロニー創設時期の違いによって 1 年目のコロニー発達のパターンが変化することが分かった。黒木出・渡康彦・中村圭司(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
4 Weak and strong phase response curves of the onion fly circadian clock at temperature changes of 1 ◦C and 4 ◦C.	共著	令和6年5月	Physiological Entomology Vol.27, e12573	タマネギバエ(Delia antiqua)は、温度の振幅が小さくなるにつれて羽化の位相を前進させ、土中の深さによる温度変化の遅れを補償し、早朝に羽化できるようにしている。この「温度振幅応答」の仕組みを明らかにするため、異なる振幅の温度パルスを用いて位相リセット実験を行った。その結果、温度変化の大きさが大きいほど羽化時計の位相変化も大きく、24 時間周期の温度では位相が前進するのではなく遅れることがわかった。

				このことから、深い土では小さな遅れ、浅い土では大きな遅れが生じ、それに応じた位相調整が行われていると考えられる。Miyazaki, Y., Tanaka, K. and Watari, Y.(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
5 What accounts for the difference in the emergence times of *Drosophila melanogaster* between the first and second eclosion days?	共著	令和6年6月	Entomological Science 154, 104618	ショウジョウバエでは、羽化初日と2日目で羽化時刻が大きく異なり、これは概日時計が光-暗周期に完全に同調していないためと考えられる。特に羽化初日は蛹期間が短いため、外界の周期と時計の同調が不完全なまま羽化が始まる可能性がある。この仮説を検証するため、異なる温度条件下で羽化ピークの時刻差を比較したところ、温度が下がって蛹期間が長くなるほど、時刻差が縮まり24時間に近づいた。この結果は、二振動体モデルで説明可能である。Watari, Y., Goto, S. G., Miyazaki, Y., Kuroki, I and Tanaka, K.(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6 Why do onion flies, *Delia antiqua* (Diptera: Anthomyiidae), avoid midday adult eclosion?	共著	令和7年4月	Applied Entomology and Zoology	タマネギバエは早朝に羽化し、日中の羽化を避ける。この研究では、日中の高温の砂が羽化を妨げる要因かを検証した。羽化直後の成虫は約42℃まで活動可能であり、43℃の砂中では砂表面に出られなかった。野外実験でも、午前中(砂温 42℃未満)に埋めた個体は羽化できたが、正午(砂温 42℃超)では羽化しなかった。これらの結果から、高温の砂が日中の羽化を制限していることが示された。Tanaka, K. and Watari, Y.(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
【その他(講演や発表)】 1 Morphological analysis of circadian clock systems driving the underground eclosion rhythm in the onion fly, Delia antiqua	共同発表	令和6年8月	第 27 回国際昆虫学会議(京都)	タマネギバエは土壌の温度周期に基づいて羽化リズムを調節し、温度振幅が小さくなる(深い場所)と羽化時刻を前進させて深度による位相遅れを補償している。先行研究では、温度振幅の違いによって概日時計遺伝子 **per** の発現位相が変化することが示されており、このリズムが温度に応答していることが示唆される。本研究では、PDF および PER に対する抗体を用い、*D. antiqua* の脳内 PDF 陽性ニューロン(LNvs)を確認したが、PER は脳ではなく羽化に重要な前胸腺(PG)で検出された。これらの知見は、羽化リズムを調節する概日時計の理解に寄与するものであり、LNvs と PG のどちらがリズム制御に関

2 Circannual rhythms in two Anthrenus carpet beetles: comparison between spring- and autumn-pupation types.	共同発表	令和6年8月	第 27 回国際昆虫学会議(京都)	与するかは今後の課題である。Hamanaka, Y., Kazuhiro Tanaka, K., Watari,Y. and Miyazaki, Y. 秋に蛹化するシロオビマルカツオブシムシは、20.0℃・14 時間明／10 時間暗(14L10D)の条件下で明確な年周期的蛹化リズムを示したのに対し、春に蛹化するヒメマルカツオブシムシではそのようなリズムは見られなかった。しかし、両種の幼虫を 25.0℃・16 時間明／8 時間暗(16L8D)で 8 週間飼育した後、17.5℃・13 時間明／11 時間暗(13L11D)に移すと、両種ともに年周期的な蛹化リズムを示し、その蛹化の位相には 17 週間の差が認められた。Miyazaki, Y. and Watari, Y.

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和　8年　4月 1日
氏 名　武並 朋美

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1 “どう生きていくか” を支え続ける―後見活動に関わるソーシャルワーカーの語りから―(修士論文) 2	単著	令和6年3月	武庫川女子大学大学院	成年後見制度は、権利擁護を目的とした仕組みであるが、実情は財産保全の観点のみが重視され福祉的観点が不十分であると指摘されており、本質的な社会福祉実践とはいいがたい状況にある。そこで、担い手としては 20%にも満たない福祉専門職であるソーシャルワーカーへのインタビューを通して、ソーシャルワークを基盤とした後見活動の実際を描き、ソーシャルワークと後見活動の関連、後見人の実践力の向上について、分析、考察を行った。
【その他(講演や発表)】 1 2				

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8年 4月 20日

氏 名 中村 整七

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
数学概論	(教育実践記録等) 1.平成28年度芦屋市教育研究部会委嘱研究報告書	共	平成29年3月	打出教育文化センター	150	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「ユニバーサルデザイン授業づくり部会」の算数数学科の授業研究で「焦点化」「視覚化」「共有化」の3つの視点を意識的に取り入れた実践研究を指導した。子どもの側に立った3つの視点でわかり易さを作る研究成果をリーフレットや報告書にまとめ、報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。 1P中村整七・山下正記・佐伯千紘・八木美子・田淵雅樹・林優也・田中義明・森洋樹・小西三枝
	2.平成29年度芦屋市教育研究部会委嘱研究報告書	共	平成30年3月	打出教育文化センター	170	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「情報教育部会」の算数数学科の授業で、学習支援ソフト「スカイメニュー」を活用して「誰もが授業で使えるタブレットPC」をテーマにした研究の指導を行う。児童生徒がペアやグループで考えたものを個々のタブレットから大型提示装置に映し出し、それらの考えの共通点や違いを話し合い、学びを深めていく授業づくりの成果を報告書にまとめた。これを報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。1P中村整七・柳本耕平・加島太成・坂東龍二・池田兼資・陰山圭一・眞﨑幹雄・伊藤佑輔・今若孝広・大川隼寛・長野伸哉・垣内あゆみ
初等教科教育法Ⅲ	(教育実践記録等). 1 平成28・29年度芦屋市立打出教育文化センター所報	共	平成29年3月 平成30年3月	打出教育文化センター	12 16	芦屋市立学校園教職員の研修等(一般研修・課題別研修38講座、新規採用教員研修及び2～5年目教員研修8講座、教師力向上支援事業)の実施し、研修内容をとりまとめたもの。それぞれを監修した後に冊子化し、教育現場や各教育研究機関に配付した。

(算数)						教師力向上支援事業においては、算数科1年「大きな数」・2年「長さ」の単元全時間において授業者とともに単元構想を練り、毎時間の指導の実際を考察し、子どもの理解度を観点にした研究を掲載している。 1P中村整七・大林亮・幸谷省吾
	令和2年度 芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル	単	令和3年3月	芦屋大学	7	実践研究『「算数科」における「主体的・対話的で深い学び」を実現させる指導法に係る一考察』を掲載した。初等教科教育法「算数科」の教育実践の中で「主体的・対話的で深い学び」を算数科の授業でどのように実現させていくのかを学生と共に見つけようとした実践をふり返り、考察したものを掲載した。子どもたちが主体的な学べるようにする指導法、深く考えられるように誘う指導法やその学習過程の創り方などについてまとめている。
教職実践演習(幼・小)	(教育実践記録等) 令和元年度 芦屋大学論叢第72号	共	令和2年3月	芦屋大学		研究論文「学校インターンシップの実態と効果に関する一考察」-芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して-を芦屋大学論叢に掲載した。学校インターシップの活動を通して、学生たちが小学校の教育現場での体験で何を学び、思いがどう変化したのかについて考察し、学生の進路形成にどのように寄与したのかをまとめたものを掲載している。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概　　要
【著書】 特記事項なし				
【学術論文】 特記事項なし				
【その他(講演や発表)】 特記事項なし				

様式第4号(教員個人に関する書類)

芦屋大学

① 教育研究業績書

教 育 研 究 業 績 書

令和 8年 4月 1日

氏 名 西 光 晴 彦

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)

担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
情報社会と情報倫理(Ⅰ)	**マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その4) マスコミ環境が現代社会(若者世代)に与えた功と罪 [Communicability と Literacy]**	単著	**令和7年3月**	**日本産業科学学会研究論叢 第30号**	P23 総ページ数 12	
情報社会と情報倫理(Ⅱ)	**マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その 5) メディア環境が現代社会に与えた影響とジャーナリストの役割 [Communicability と Literacy]**	単著	**令和8年3月**	**日本産業科学学会研究論叢 第31号**	P97 総ページ数 8	

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
【著書】 1 2				
【学術論文】 1 **マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その4) マスコミ環境が現代社会(若者世代)に与えた功と罪**	単著	**令和7年3月**	**日本産業科学学会研究論叢 第30号**	

[Communicability と Literacy] 2 **マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その 5)メディア環境が現代社会に与えた影響とジャーナリストの役割** [Communicability と Literacy] 3 格闘技の科学(その 1)現代武道批判－間違った指導と練習方法		**令和 8 年3月** **令和 8 年3月**	**日本産業科学学会研究論叢 第31 号** **日本産業科学学会研究論叢 第31 号**	西光哲治・西光晴彦
【その他(講演や発表)】 1 リーダー指導者論 2 指導者の安全配慮義務－大学運動部指導者編、 3 キャプテン(上級生)の安全配慮義務 4 指導者論「若手社員に対する社内教育」 5 指導者論「人材育成と指導者」 2	単独 単独 単独 単独 単独	令和 3 年 4 月 令和 3 年 12 月 令和 4 年 3 月 令和 6 年 9 月 令和 8 年 3 月	西日本学生拳法連盟理事会(大阪経済大学からオンライン) 全日本学生拳法連盟役員会議(於;大阪キャッスルホテル) 西日本学生拳法連盟主将・主務会議(於;大阪キャッスルホテル) 大阪鋳材懇話会経営者研修会 於;大阪キャッスルホテル ゼネコン現場責任者研修会「未来塾」 於:心斎橋東急ビル研修室	